

じたい。然して耶蘇の言の記録と云ふ點から云へば、共觀福音書の次に置かねばならぬと思ふが、耶蘇の精神を得た點から云へば大に價値あるものであると思ふ。何となればかゝる立派な教が耶蘇と云ふ人格から發せずして外から來る道はないと思ふからである。

是に於て我等は今一の問題に出逢ふのである。これもこの處に充分の解決を與へることは望み難いことであつて大體を紹介するに止めねばならぬ。其れはヨハネ傳の思想はつまりパウロ神學であると云ふ議論である。即ち基督論でも其の外の事でもパウロの思想を耶蘇に溯らせて耶蘇が然か考へたものゝ如く書いたものが即ちヨハネ傳であると主張する。獨乙の神學者ヴェルンレの基督敎の起原に關する書物などには頻に之を主張して居るが、サンデエ博士の如きは之に反對しヨハネの思想とパウロの思想と共通の點はあるがそれは甲か乙に感化を及ぼしたからでなく、教會一般の信仰と云ふ一の源から發したから同一

點があると論じて居る。サンデエの説も少し偏して居つて、パウロの建てた教會の所在であるエペソで晩年を送つたヨハチ、思想の感受力の鋭敏であつたと思はれるヨハネがパウロの如き強大なる思想の興つた時其の感化を受けぬ筈はない。それにしても兩者各々奪ふべからざる本領がある。それは既に幾度か云つた如くである。且つパウロの神學を書き込みて耶蘇の傳を著すといふやうな細工の多い仕事やさう容易に出来るものでない。これはどうしてもヨハネと云ふ考の深い創始方に富んだ人格が耶蘇の驚くべき人格に接して受けた感化から咲いた花であると思はれぬ。

五

最後にヨハネ福音書は我等の靈性修養の糧としてどれだけの價値があるか。これは無論前に擧げた箇條のうちに大分籠つてゐる事もあり、又人々自ら味ひ自ら得るを要する事であつて、一概に言ふ事は出来ぬが、余は参考の爲に左の

點を擧げたひと思ふ。

(イ)前にも云つた如くヨハネ傳に於ては總ての事永遠の背景の上に描かれてある、永遠の光のなかに包まれて居る。此等が宗教を信するによりて得んと要求するものは永遠なるものとの交通である。永遠なるものに觸るる所に歡喜がある又悲哀がある。晨夕に響く相國寺の鐘も、仰げば果てしなき蒼空も、やむ事なき方の身にさへ打ち寄する死の波も、皆我等の思を牽いて永遠の天地永遠の運命に到らしむるではないか。宗教が如何に社會を改良しても、又品性の修養に益しても、永遠の現實に觸れしめ、永遠の生命を味はしむるものでなければ宗教とは云はれない。新約聖書のうちヨハネ傳ほど此の方面の光を與へるものはなす。

(ロ)宗教は現在もてる者でなくてはならぬ。無論希望と云ふとも宗教の與ふる祝福の一である。保羅が「我れ此等の望を既に得たりと云ふに非ず又既に全く

せられたりと云ふにあらず或は取ることあらんとて我たゞ之を追ひ求む」と云つたやうに、未だ得ざるものを得んとして進む所もなくしてはならぬが、又一方には既に之を得て居ると云ふ安心がなくてはならぬ、我等は斯かる集會に於て斯くしなければならぬ、斯くあらねばならぬと云ふ事を多く學ぶ。宗教は斯くなるべきものであると云ふ事を教へらるゝ。然れどもこればかりでは何となく物足らぬ心地がする。芥種一粒でもよいから此の點は我がものとなつて居る、味を占めて得ると云ふ所があるべきである。信仰の喜はこゝから發する、心の平和は之れによつて得らるゝ。前項に語つた如く、ヨハネ傳は基督の再來でも審判でも永遠の生命でも、たゞ之を將來の出來事と見ずして、現在の事實現在の持ち物であると云ふ見地から見居るのである。日本語の聖書には「生命を得る」と譯してあるが更に精密に譯すれば「生命を有す」とすべきである。我等は自ら省みなければならぬ、我等は果してこの生命を有せるや否、基督我

が裡に居るや否や。

(ハ)ヨハネ傳は使命の觀念に満ちた書物である。耶蘇は神から遣されたものであると云ふ觀念に支配せられて居給ふた。己の意志を行ふ爲てなく、まして己の快樂を求むるためてなく、たゞ一つ神の御心を行ひ托せられたる業を成就するためこの世に遣されたと云ふ思想は、共觀福音書にも見へて居るが、第四福音書のうちに最も鮮明に現はれてある。又基督が神から遣された如く、基督者たるものは基督から世に遣はれたものであると云ふこともヨハネ傳に於て反復教へらるゝ教である。遣されたものであるから、世間を離れてはならぬしかも世と同化してはならぬ。この精神はヨハネ傳十七章にある耶蘇の祈りのうちに最も美しく現れて居る。「我れ汝に彼等を世より取りたまへと祈らずたゞ彼らを守りて惡に陥らす勿れと祈る、われ世のものに非る如く彼等も世のものに非ず、汝の眞理を以て彼等を潔めたまへ、汝の言は眞理なり、汝我を世に遣せし

如く我も彼等を世に遣せり」。使命と云ふ思想がこれほど立派に言ひ表された例が他にあるであらうか。深く味ひ且つ念頭に懸くべきである。

(ニ)ヨハネには基督の一生の情調が良く現れて居る。余輩は嘗て「ヨハネ傳研究」(分冊第三卷)の巻頭に題して斯く云つた「ヨハネ傳全卷を通讀す宛がら山を越ゆるが如き感あり。始の數章に於て、ヨルダン河の岸にて弟子初めて耶蘇に隨ひし光景、田舎の婚筵、神の宮の掃清、ヤコブの井の傍の談話より麵麩の奇跡に至るまで讀み來れば新鮮の氣はひ全幅に溢れて、露夏草に滴る山路を登るに似たり。讀んで第七章に到れば光景全く變じ、密林を穿ちて進むが如く荆棘路を塞ぎて徑路の屈折糾紛殆んど追隨するに迷はしむ。更に進んでラザロの復活のあたりに至れば身は漸く林を出て、坂を降りつゝあり。救世の大光西に沈まんとして他界の色天を染め沈々たる暮鐘の響遠くより來るに比ぶべき莊嚴神秘の趣譬へん方なし。」余輩は耶蘇の生涯には深き悲壯な情調が流れて居つたと想ふ。ヨハ

ネ傳ほどそれを良く現して居る福音書はない例へば第十三章の始にある「踰越の節の前にイエス此の世を去て父に歸るべき時いたれるを知り世に在りし己の民を既に愛し終に至るまで之を愛せり」とある如き何等の調べ高き序曲であるか。又「今我が心憂へいためり何を言はんや父よ此の時より民を救ひたまへと言はんか、否これが爲に我れこの時に至れるなり、願くば父よ汝の名の榮を顯せ」(十二〇二十七)の一句の如く耶蘇の胸に波うちたる憂苦の響を傳ふるもの他にあるべきか。又復活後ペテロに向いて「汝いけなき時自ら帶し意に任せて歩きぬ老いては手を伸べて人汝を束り意にかなはざる所に曳き至らん」と云はれし言はペテロの生涯の悲壯を歌ふた詩である。かゝる情調は我等の心に觸れて我等を動し我等を慰め潔めて耶蘇を愛せしむる心を深からしむるものである。

(ホ)耶蘇の悲哀と犠牲に一致する世界もヨハネ傳に於て最も切實に示されて居る。ヨハネ傳には十字架の引力を示す言が多い。然して人の子の肉を食ひ其の

血を飲むもの生命ありと云ふ眞理が全卷に貫通して居る。その精神は此の福音書が世に出て、後間もなくこの書を読んだ人の心にも徹して其の靈魂の糧となつた。イグナチウスと云ふ人はアンテオケの監督であつたが、紀元百七年羅馬に引かれ猛獸の餌とせられた。彼が途中から羅馬の信者に書き贈つた手紙があるが、其の中に次のやうな一節がある「我が裡に生きて且つ語れるありて「父に來れ」と云ふ。我は朽つる食物及は世の樂みを願はず我は生命の麵麩を欲すこれ神の子耶蘇基督の肉なり、我は又神の飲物を欲す、彼れの血は即ちそれにして不朽の愛又永遠の生命なり」。それはヨハネ傳の引用としてはないが、ヨハネ傳中の言を咀嚼し深くその精神を得たものと見なければならぬ。イグナチウスが信仰の糧とし死に臨んで力を得た福音書は今も猶我等を慰め我等に力を與ふる活ける糧である。

(ハ)「我れ往かずば慰むる者汝等に來らじ」。耶蘇の死に對する眞の了解があ

り経験がなければ、慰むるもの即ち聖靈を受くることが出来ぬと云ふ事實もヨハネに於て三度意を致した所である。理窟では六かしい處があるが、経験の事實として考ふれば盡きざる味がある。

最後に一言したい。ヨハネ傳の思想の深い處に徹するは、やがて我が國民の宗教心に觸るゝ所以である。(二、八)

聖ベルナルドの思想一斑

聖ベルナルドの文抄が昨年ケンブリッジ大學出版部から出版せられた。手紙や説教讚美歌冥想録などの粹を抜いて之を譯したもので、美しい袖珍本になつて居る。譯者はホレシオ、グリムリイと云ふ人で、ベルナルドの誕生の地、修學の地から修道院のあつた處、さては有名なアベラルドと會見した舊蹟まで探つて此の偉人に對する景慕の念を深くしたものと見える。ベルナルドの家は一城

の主であつて、彼は佛蘭西のデジョンに近き城中で生れた。この城跡は今ほどのやうになつて居るかと云へば、久しからぬ前に會堂と傳道館のやうなものゝが建てられて、五人の神父が居つたさうであるが、彼の政教分離の波は此處にも打ち寄せて、七年前皆此の處を引き揚げ、三年前譯者が訪れた時には唯一人の尼が番をして居つたさうである。

紀元千九十一年に生れ、二十二歳青春妙齡の身を以て五人の兄弟とともに浮世の榮華を辭してシトオの修道院に入つた。二年の後荒蕪の谷を拓いて新しい修道院を建てた。これが有名なクレアボオ(光の谷)である。彼は一生涯修道院の院主に過ぎなかつたが、其の勢力は一國の帝王以上であつた。此の文集を見れば國王法王侯伯と應酬した手紙が澤山にある。又法王の位に登つたユウゼニウス第三世は、ベルナルドの弟子の一人であつて、即位の當時之を誡めた書翰もある。若し夫れ第二回十字軍の首唱者として、ベルナルドが如何なる勢力を

揮つたかは歴史の面に聳えた事實である。

ペルナルドの書いたもので、余の最も面白く讀んだのは「神を愛することにつきて」と題する一篇の文章である。如何にも單純で、透明で、時代以上のものである。宛も昨日書かれたかの如く新鮮である。其の大意を紹介して見やう。

*

*

*

*

*

人は何を持つても満足するものでない。自ら持たぬものを良く思ふ。美人は一層美にてありたしと思ひ、富める人は己よりも富める人を羨む。金殿玉樓に住む人でも、始終家を建て直したり建て増したりして居る。満足すると云ふことの無いのも尤のことである、つまり人は最高最美であるものを見出だすにあらざば底止することが出来ないのである。人の求むる所は歸する所神自身に外ならぬ。然して人が神を求め、之を求めさすものも神であつて、求める心の起ると云ふのは既にいくらか神を見出して居るのである。

神を愛する愛にいくつかの程度があり等級がある。先づ最も低き等級に於ては、己の爲に神を愛する。凡そ生きとし生けるもの神によりて存在し神に支へられざるものはない。然れども人は高慢にも神を忘れ、神から賜はるものを我が物顔に占有するのである。そこで神は艱難を降して人を試みる。人窮すれば本に反つて神を呼ぶ、神は之を聽きて助を與へ給ふのである。肉的動物的な人類でも流石神の恩寵を感じて神を愛するやうになる。まだ己の爲に神を愛すると云ふ以上には出ないけれども、兎に角神を愛し初めるのである。

それから進んで神の爲に神を愛すると云ふところへ行かねばならぬ。これはどう云ふ處から此處に進むかと云ふに、屢々苦しい目に出逢ふ、其の度毎に神に頼んで助を蒙る。その中鐵の如き胸、石の如き心でも救主の御情に柔げられて、終に己の爲ばかりでなく神の爲に神を愛することを知つて來る。神を愛するはどれ程甘美なものであるかと云ふ味を知るに隨ひ、自身の爲と云ふ考から

離れて神を愛することが出来るやうになる。

其の次には神を愛する故に神のものである所のもを愛する。イエス、キリストが己の事を求めず、我等の事を求めた、否我等を求めた如く、我等も己の事を求めずキリストの事を求むるやうになる。己の如く我が鄰人を愛し得るものとなる。正しく鄰人を愛しやうとするには、是非神を我等の考のうちに置かねばならぬ。鄰人を神のうちに置いて之を愛するやうになつたれば、初めて正しく鄰人を愛するものである。これが愛の第三段である。

更に進んで神の爲に自己を愛すると云ふことになる。これが第四段である。日々我等の願を神の方に向けて、己の好むまゝでなく神の御心のまゝに自身を整へて行くやうに努める。「御心の天に成る如く地にも成させたまへ」と日々神に祈る。さうして心は神々しい心持に動されて次第に柔かに又美しくなる。たとへば水の一滴を葡萄酒のなかにたらすならば、水は直に葡萄酒の味と色に化

つてしまふ如く、烈火で焼いた鐵が鐵の原質を失つて火となつたかと思ゆる如く、太陽の光に満たされた空氣が其の榮に染められて光そのものになつてしまつたかと思はるゝ如く、聖者の靈魂に於ては、人間らしい心は溶け去つて全く神の心に混じてしまふ。人たる原質は残つて居るにしても、別の形、別の榮、別の力を帯びて来る。この境に達しやうとしても、肉に誘はれ肉の重荷に壓せられて居るうちは望み難いことである。潔く落ち着いて愛心深く、何事も靈の支配に服するやうにならねばならぬ。

以上はベルナルドの一文の大意である。十字軍の時代、武士道の時代に出た聖僧の考であるから、一面は武士的な忠義の精神が表れて居る。其の證據には彼が己の爲に神を愛すると、神の爲に己を愛するとの區別を説いた所は、我が國の細川幽齋が忠義と云ふことを説いて、身の爲に君を思ふと、君の爲に身を思ふと云ふことゝを區別して居ると符節を合する如くである。この獻身忠義の

精神は我等が忘れてはならぬ所である。他の一面は神秘的なプラトオ的の愛である、神に憧れ神と一致契合せんと欲する願である。此の両面が結び合ふてベルナルドの思想を織り成して居る。然してたしかに基督教の精神を得た所がある。さうでなければ今日之を讀んで斯くまで新鮮に感ずる筈がない。若しまだ缺けて居る所、少くとも此の文章に説いてない一面はと云へば、罪と其の赦、罪を赦されて生ずる愛の消息であらう。ベルナルドがルウテルたる能はざりし所以は蓋し主としてここに存すると思ふ。(四四、八)

鮮明なる意識に原ける建設

此の頃或る青年の小集會にて談話を依頼せられしかば多少思ひ合はず事ありて十有年來の友なる「省察の栞」(Aids to Reflection)と其著者コオルリツヂの生涯に就きて語りぬ。然して此の一書を中心思想なる鮮明なる意識の光に照し

て丈夫的品性を建設せよ」と云ふ一義の今日の時代にも適切なる教訓なるを思ふにつれて、苦戦して鮮明なる意識に達し得たる詩人につきて宿昔の興味を復た新に惹起されざるを得ざりき。本年一月の「ハアバアド神學評論」に載りたるユニオン神學校のアダムス、ブラウン教授の「舊神學と新神學」と題する明快なる論文の中に、新神學なるものは前世紀の間思想界に起りたる知識的革命の結果として生れたる神學にして、此の革命が宗教の領界になしたる反動を示せるものなりと説明し、新神學の大家は獨逸に於てはシュライエルマツヘル英國に於てはコオルリツヂなりと云へるを讀み、此の大の思想家の地位正しく認識せられたるを喜びたり。コオルリツヂは新神學者の巨擘なるぞ。讀者余が舊人に愛着するを譏るべからず。

多少の例外はありとするも、詩人の神學などと題する書籍は内容乏しくして、不自然なる所多きものなり。従つて斯かる研究は屢々無用の地に力を費す嫌

あり。これ敢て恠むべきことに非ず。詩人には詩を學ぶべし、宗教は宗教家に學ぶを勝れりとす。宗教家にして詩を研究するものも強ひて宗教思想を抜き出さんと試むることなく、之を詩歌として研究すれば却て宗教思想の上にも得る所多かるべし。余は斯く信ず。然るに獨りコオルリツヂの宗教思想に重きを置く所以は何ぞや。コオルリツヂは文學の領土より宗教思想の邊境を覗ひしに非ず、彼は宗教思想の中心に身を投じ、半生の精力を献じて宗教神學の天地を開拓せし人にして、境界線上の人に非ず。此の點に於て彼れの神學は詩人の神學にあらずして詩人たる神學者の神學なり。如何にして詩人なるコオルリツヂが神學者コオルリツヂとなりしぞ。悲惨なる歴史は生涯の此の兩節を繋げり。これ余の先づ語らんとする所なり。

二

坐右のコオルリツヂ百科辭典を開きてコオルリツヂなる名を索むれば、詩人なるサム

エル、テエラア、コオルリツヂの外に同じ姓の人五六人あるを發見す。孰れも詩人コオルリツヂの近親にして其の長子ハアトリイ、其の娘サラは文人として名を擧げられ、甥には有名なる法官コオルリツヂ公あり、從弟には法官にして「キイブル傳」の著者なるジョン・テエラア・コオルリツヂあり、文士なるヘンリー・ネルソン・コオルリツヂあるなり。一門天才の血統なることを知るべし。詩人の父は牧師にして學識に富める人なりき。嘗て歐羅巴大陸に旅行せしとき其妻七枚の襦衣を行李に藏めて、着更ふることを忘れ給ふなと心を着けぬ。彼は細君の命を守り垢つけば上にと新しき襦衣を着せしかば歸國する時には七枚の襦衣を着け居りしと云ふ。亦奇ならずとせず。詩人コオルリツヂは一七七二年に生れ一七九一年ケムブリツヂ大學に入れり。時しも佛蘭西革命は既に爆發し、全歐洲を通じて社會人心の動搖極度に達したるなりければ、コオルリツヂも亦胸を革命の思想に躍らせ、信仰に於てはユニテリアンとなり、學窓の生

活を懶しとし、且つは借財の嵩みし爲、窃に大學を通れ出て倫敦に上り、變名して兵卒の徵募に應じ入營したり。日ならずして友人の發見する所となり、大學に連れ歸られしが、終に學位を取らずして退學し、暫時オクスフォードに遊びてサウゼエと相識り、生涯渝らざる交情を締しぬ。斯くてサウゼエ等と北米の自山郷に移住して理想の社會を作ること計畫せしが資本の缺乏の爲に之を果さざりき。一七九五年初めてウオルヅウォルスと相識り、永く英文學の歴史に香る交情の歴史は成立し、二人相近き處に居を卜して日夕相携へて文を論じ詩を作り詩名漸く世に知られぬ。其の頃コオルリツヂは「ウオチマン」と云へる雜誌の發行を計畫し、自から各地に旅行して購讀者を募り歩きしことありしが、この雜誌は僅に二ヶ月の存命を保ちしのみなりき。或る時は文學を廢してユニテリヤンの説教者とならんとせしが之にも成功せりと見えず、或る日聴く者十七人ありしが一人去り二人去り説教の終る頃見れば一人の老婦人の坐睡せるを

殘せりと云ふ話もあり。一七九八年の秋ウオルヅウォルスと相携へて獨逸に遊びしが、彼は別れてゲッチンゲンに留りて講義を聴き、或は老詩人クロツプシユトツクを訪ひ獨逸に充滿せる智識的新活動に接して知見を開發し、十四ヶ月間獨逸に留りたり。

夢想徒に多くして之を貫くの執着力乏しきはコオルリツヂの病なり。さればウオルヅウォルスが自ら天職と信する所を守り、兀々として勤苦累積せる一方に、コオルリツヂは世路に彷徨して無用の日月を費しぬ。或は倫敦に在りて「モオニング、ポスト」なる新聞に政治論文を寄稿し、一八〇四年地中海のマルタ島に遊び、知事の秘書官となり。一八〇九年「朋友」と云へる雜誌を發行せる等の事あり。當時英國の文人の間に鴉片を喫する惡風行はれしことはドクインシイの名著によりても知るべき事なるが、コオルリツヂも何時しか之に耽溺して制するを得ず、心身ともに病み、天才の泉涸れて詩想凋落復た招き難し。

一日久し振にて舊友ウオルヅウオルスと邂逅し、ウオルヅウオルスが「ブレルド」の長篇を誦するを聴き、讚嘆の情、慚愧の念交々起りて、作りたる一詩の如き涙なくして讀むを得ざらしむ。彼がウエードと云へる友人に與へたる書翰の中に「たゞ此の一の罪に陥りし爲に我は幾その罪を重ねるに至りしぞ。神に對して恩恵を空しくし、知己に對しては不義の人となり、便り無き我が兒子に對しては無情の父となりぬ。我れ死したる後は願くは具に我が零落の様を記し、何に因りて斯くなり果てしかを世に知らしめて後人の戒となすを得ば、世に幾分の益をなすに足るべきか」。實に友人サウゼーは當時コオルリツヂの妻子を扶養しつつありしなり。其當時作りたる「沈衰」ヂヂクシヨウと題する一詩を讀め。左に譯せるは其の一部分なり。

風香り心澄む此の永き夕、

黄色を帯びし緑えならぬ西の空を眺め暮しぬ、

今もなほ眺むるなり、光失せつらん此の目もて。
見あぐればちぎれ／＼に或は縞なして行く薄雲の隙に、
動くと見ゆる星影は照り又曇れども消え果てず。
雲無き方の空には星稀にして
靜に懸る新月は生え出てしかと疑はる。
孰れも妙へに美しとは見ながらも美しと感じ難し。

豊ゆたかなりし我が魂は衰へぬ。

我が胸を壓する此の磐石を、知らず何物か取り去るべき。
西の空にたゆたふ緑の光を何時まで打ち眺むとも、
生命と情感の源は内にあるものを、外より得る望はあらし。

鮮明なる意識に原ける註設

昔我が行く路嶮しかりしも

歡喜内に在りては不幸を物とせざりき、

千萬の憂き苦勞さへ幸の夢を編み成しけり。

つた蔓の如く繁り行く望は我に纏はりて

榮ふる葉、生る實ともに

我がものならぬものさへ我がものと見えしほどなるに。

今は苦み惱み我を壓して地に伏さしむ。

我が歡樂の奪はるゝを厭はねど、

嗚呼其のたび毎に、

生れ來し時我に賜はりし

想像の靈あへなくも斷ゆるぞ悲しき。

感せずして己み得ぬ事を思はず

黙して忍ぶ外我が爲し得ることあらじ。

憐れむべし、曠世の天才是の如くにして銷沈せんとす。然れども慈愛の神は猶ほ彼を棄て給はず。コオルリツヂは衰へたりと雖も、齡は四十を少しく越えたるのみ。猶ほ殘魂餘魄を拾集して一生の思ひ出に爲し得ることあらざるやを思へり。然れども何事より先に勝たざるべからざるは鴉片の癖なり。倫敦のハイゲート丘に住めるギルマンと云ふ醫者はコオルリツヂの友なりければ、書を贈りて己が一身を托し、如何にしてか回復を得たき望を通せり。ギルマン欣んで之を承諾し、且つ其の住居閑靜なれば來り寓しては如何にと勧めしかば、コオルリツヂも其の厚意に任すこととなれり。これ一八一六年即ち詩人が四十四歳の時なりき。

意志の弱きを以て一生を誤り來りたるコオルリツヂも、此の時は勇猛心を鼓して生涯の再建設に着手せり、然して能く之を果たし得たり。一八三一年に自

ら記したる夜の祈の中に曰く

神の恩恵は我が一生のあらゆる時あらゆる瞬間を通して我を離れざりき。過ぐる日の間、我が生命を支へ給ひしことにつき、我が身體の悩みと衰弱を減らし給ひしことにつき、我が爲に留め給ひしさまざまの慰安につきて、別けて汝が父の憐みを以て我が罪惡と罪深き弱點の破滅より我を救ひ給ひしことにつきて、畏れ又感謝して我が心を捧げまつる。我は又汝が我が爲に興し給ひし親切にして愛情篤き朋友の爲め、殊に我に對する愛の大に且つ眞實なりし此の家族の母、及び主婦、其他の人々のために、我が學問と研究を助け、又勞を分てる一人の親友のため、又就中在天の友、十字架につけられし救主、榮ある仲保者なる耶穌基督と天の慰藉者、總て慰藉なき人の慰藉の源なる聖靈の爲に感謝す。(中略)汝は悔い且つ誠なる心を以て信じて祈る祈りを聽き給ふ。何となれば汝は與へざることにて於て與へ、傷くることを以て癒し、仲

保者基督を経て汝を索むる人の爲には總ての事を善き方に向けたまふ。願くば、御心の成らんことを。汝の賢く正しき定め合ふことならば、此の夜我を守りて疾病に襲はるることなく、惡しく亂れたる夢に惱まざることなくして睡眠の休を得せしめ給へ。若し我が心の目的と志が獨り人の心を知り給ふ汝の前に正しからば汝の慈悲を以て此の衰朽の時に於て平安と氣力の餘日を許し給ひ、汝の恩恵の攝理と助けにより汝が我に託して之を用ひざりし資本の爲め又汝の慈愛を以て供へ給ひし機會を怠りしことの爲に御教會に償をなすことを許し給へ。葡萄園の主にして世嗣なる基督耶穌其の僕を呼びたまふ時は、我も遅れながら葡萄園に働きつつあるものとして見らるることを得しめたまへ。

前の「沈衰」の詩と比べて之を讀まば全く別天地の人となれるを知るべし。彼は其の惡癖に克ち、感謝と希望を以て前進しつつあるなり。彼は獨逸の哲學神

學をはじめ、英國古代の神學者の著書を精讀したり。然して驚くべし、創始的天才は復活し來れり。ハイゲートの寓居を音づれ來る青年に新しき光明を與ふる預言者となりしのみならず、數卷の不朽なる著作は成されぬ。「省察の樂」は一八二五年に、「教會と國家」は一八三〇年に著されぬ、然して聖書につきての意見を述べたる「研究的精神の告白」(Confession of an Inquiring Spirit)は死後出版せられぬ。一八三三年の夏、六十二歳の齡を以てギルマンの家に逝けり。死する前十二日彼はまだ死期の迫れるを知らざりしも、一書を認めて年猶幼き教兒に贈れり。曰く

『御身がこの手紙を讀みて心に會得し得るは尙數年後のことなるべし。されども我等の主キリストの父にてまします恩惠の神は今御身を惡しき事より救ひ給ひ、暗きより光に移し、罪より義に入らしめ、殊に義なる主の中に入れ給ひぬれば、此後とても情篤き兩親の祈りを聴き、身體も又心も健に生ひ立た

しめ給はんことを頼みまつるなり。

余もこの世の樂みと利益の何ものたるを知り、殊には學問智識より享くる貴き快樂をば味ひ知りぬ。今や六十年の一生を閱し將に斯世を辭せんとするに臨み、この事を御身に書き殘し、行末之を信じて身を立て給はんことを祈るなり。身に疾病なきは大なる幸なり、正直なる勤勞によりて乏しからざる生計を立て、又情誼篤き朋友親戚を有するも亦大なる幸なり。されども萬事に優りて大なる幸福にして又得難き仕合はクリスチャンたる一事なり。余は年長て後身體の健ならざるが爲に一方ならぬ苦痛を受け、此の三四年の間は病の床を離るゝことゝては甚だ稀なりき。今や回復の望は絶えぬ。未だ速に世を去ることはあらざるべけれども、病床筆を執り墳墓の岸に臨み嚴なる思を以て、全能の救主は眞實に之を求むる人には豊なる約束を與へ給ひ、又之を果し給ふことの實なるを明にせんとす。我身のかゝる苦痛と薄弱なる間にも

心は想の外平和を失はず、悩みの中にも神の靈は我を離れず、時到来ば悪しき者より救ひ給ふことを疑はざりき。吾親しむ教兒よ、年少き中より神を畏れ之を愛することを知り、救主にして永く祭司の長たるイエスキリストの義と其取成しに任する人の幸福は如何ばかりぞ。冀くは御身の教父又朋友よりの遺言として之を忘るゝことなからんことを。

三

英國第十九世紀の宗教思想の歴史を讀む者は筆をコオルリッチに起すもの多きを見るなるべし。英國十八世紀の思想史の著者レスリイ・ステイツンスはウエスレー等によりて起されたるメソヂストの運動を評して「光なき熱」と言ひしは稍酷評なりとするも、良く短處を指摘したるものなり。實際メソヂストの運動は根底ある思想を與へざりき。されば第十八世紀より第十九世紀に渡る急流激湍に於て新時代の精神は之を導くべき光を渴望したり。初めて之を與へ

たる思想家はコオルリッチなり。トマス・カアライルがスターリーリング傳中にコオルリッチの事を記したる有名なる一節に曰く、

コオルリッチは其の頃ハイゲート丘の山半に坐して倫敦の煤烟と繁華を眼下に瞰、人生の戦場の外に立てる哲人の如く、戦場に驅馳せる無数の勇士の心を維ざたり。彼が顯に詩、哲學及び文藝の専門の部門に貢献したる所はさまざま多からず、又連続せざりしは惜むべしと雖も、研究心に富める青年の社會には文學者よりも一段高等なるマジの如き人物として崇拜せられたり。英國に於て獨逸の先天哲學の鍵を有し、悟性を以て信する能はざる所を理性を以て信じ得るてふ幽玄なる秘義を解せる唯一人なりと思はれたり。暗黒なる時代に於て能く靈なる冠冕を汚さず、唯物主義と革命の大洪水より脱出して、神と自由と不死の道を扶持したるは洵に崇高なる人物なり、人間の王者なりと云べし。

ジョン・スチュアート・ミルは其の友教授ニコルに語つて曰く(フオートナイトリイ、レビウ所載)詩人コオルリツヂの如く余が思想と性格に感化を興へたるものはあらず。余は親しく彼の聲咳に接したることありと雖も、主として余を感化したるは彼の著述なり。余の知人中彼に師事せるもの多く、爲に余は刊行せられざりし彼の草稿の多くを精讀する便宜を有したり。窃に思ふコオルリツヂは當代の大思想家なり。其の秩序的なる思想に至りてはベンザムの上に出づるものあり。ベンザムは想を構ふる規模狭小にして範圍局限せられたり。世間コオルリツヂの如く思想の材料に富むものなし。

「カーヂナル」ニウマンも亦曰く

英國の教會の感情及び議論に哲學的の基礎を供給したる創始的の思想家あり(コオルリツヂのことないふ)。彼が自由なる議論を馳するや基督者の許すべからざる所に到ることあれども、兎に角研究的精神に富める人には今まで習ひしよりも高等な

る哲學を注入せり。是の如くして彼は時代を試煉し、時代の精神を導きて正統なる真理に對する趣味を有せしむるに成功したり。

米國の最も偉大なる神學者の一人なるブシネルの傳記の中にブシネルの友人ツイチエルの面白き談話あり。一夜ブシネルと其の友人等露營の火を圍みて語る中、話頭會々著述家の品評に移りたり。「さすが文壇の勇士も交々ブシネルの槍先に斃され死屍戰場に狼籍たる有様なりき。其のとき一人の友靜に、然らば如何なる書を好み給ふかと問ひしに、彼は少時躊躇したる後二三人の名を挙げしが、終には之をも打ち崩して唯ひとりコオルリツヂを残したり。余は彼が屢語るを聞けり、聖書以外の書にてはコオルリツヂに負ふ所最も多大なり」とブシネルは其の書翰の中に半年間全く「省察の槩」の下に埋没したりと云ひしことあり。

余は此の外の證言を引くことを得れども最早之にて足りなん。さて是の如く

鮮明なる意識に原ける建設

感化力の盛なる人を感記したるコオルリッチの著書、就中「省察の槩」は如何なる使命を帯びたる書籍なるか。此の書は、「鮮明なる意識の光に照して丈夫の品性を建設するの願を有し、思慮と道徳と宗教の各領分に於て道徳的建築の原理を研究せんとする人の爲に書かれたり」とは著者が序文に於て記す所なり。鮮明なる意識は今日の我國に於ても必要にして、然かも之を獲ること容易ならず。思想の複雑なる現代に於て殊に然りとなせども必ずしも現代に限りたることにあらず、懐疑的、破壊的、革命的の波濤澎湃たりし第十九世紀初年に於ても頗る相似たるものありしなり。此の波にもまれて猶ほ單純なるもの、分明なるものを見出したる所に、コオルリッチやシユライエルマツヘルの偉大なる所は存するなり。

コオルリッチを導きて此の勝利の彼岸に達せしめしものは彼の内部的經驗主となりしは固よりなれども、哲學思想に負ふ所亦少からず。彼は一時ライブニ

ツとスピノザの哲學に心を用ゐたれども長く其の裡に留まらざりき。彼を哲學の眞天地に導き入れ、深き思想を陶鑄したるものはカントなりき。彼がカントを正しく理會せしや又如何に之を取捨せしやは此處に問はんとする所にあらず。コオルリッチは純然たる哲學者とならず又なること能はざりしも實在に達する道を實踐理性即ち道念に見出せるカントの思想は最もコオルリッチを動かし建設の基石を供したるものにてありき。「省察の槩」の巻頭より全卷に滿てるは此の思想なり。

人は高尚なる思想に狎れて其の新鮮を感ぜざるやうになり、之を靈魂の寢室に安眠せしめ易し。如何にせば是の如く平凡化したる眞理を當初の非凡なる光彩に復らしむるを得べきか。コオルリッチは曰く、之を行爲に翻譯するに在りと。然れども行爲に譯さんとせば先づ之を回想せざるべからず。「誠實熱心なる祈禱のうちに、若しくは一の慾或は胸の微妙なる罪と戦ふて勝ちつつ過す獨居

の一時間は、之なくして一年間學校に學ぶに増して思想を興へ、省察の力を喚起し、其の習慣を養ふ力あり」。「思はざる基督者は、罟と阱の間を微光の内に歩むに等し。彼は誘惑に陥らす勿れと天父に祈りながら、天父の之を防がん爲に我が手中に置きたまひし炬火を點することなくして誘惑の岸頭に身を置けり」。故に鮮明なる意識を養ふことは良心の義務たるなり。之が爲には世間なるものに對して警戒を怠るべからず、「我等の外部の境遇を形成する所のは世なることを記憶せざるべからず。我等は神聖なる模型又理想と相戾れる世てふ模型の内に鑄込まるることを記憶せざるべからず。我等は宜しく其の罨を避け、其の攻撃を却け、其の援助に心を許さず、縦し同盟として城池の内に之れを入りしむることありとも、外塞の守備を托するに止め、決して本營に近かしむべからず」。

孰れも親切なる教訓と云はざるべからず。然して著者は猶進んで鮮明なる意

識の根本たる三大原理を論ず。是れ即ち基督教哲學の起點たるべきものなり。第一は良心の法則の現實なり、第二は責任を負ふべき意志の存在なり。第三は罪の存在なり、良心と意識は固より同一にあらずと雖も人らしき意識の根本には良心なかるべからず。善惡邪正の際め明白ならずんば鮮明なる意識有り得べからず。著者は曰く「諸君は誠實なる心を以て威嚴ある品性を建設せんと欲するか。然らば青年諸君よ、不徳と徳の中間にある朦朧の世界に生活せる人を離れよ。道徳と識別と法則と熟慮せる選擇は人道の特色にあらざるか。此等のものを除去し、(異教より譬喩を借るならば)光明神の堂と託宣を棄てて、トロフイナス(夜中洞穴にて託宣を授くる神の名)の洞窟を擇び取らんとするの精神習慣より人間らしきもの發し得べきか。法則と光に仕ふる定形無き感情衝動を以てせんとする人々より男子的なるもの發し得べきか。」コオルリッチの信仰てふことを解釋するやカントの信仰の意義と相近し。曰く神の意志は良心によりて人に示現せらる。此

の神の意志即ち理性と個々の意志との綜合これ即ち信仰なり。故に信仰は良心を意識するなことにして、祈禱は信仰が行爲に移ることこれなり。

余輩は意志につき罪につき、コオルリッチの論ずる思想を逐一紹介する能はず。然れども人の自由意志と、この意志より發せる道德上の惡、即ち罪なる事實に正面より相對し、之を解釋せんと勉むるものにあらずんば鮮明なる意識を得ることの難きことはコオルリッチの主張する所なり。然してこれ著者が自己の弱き意志に勝ちて勇猛心を勵まし、罪と戦ふて得たる思想なりと思へば、ただ思想家の思想の如く歴史的の價值あるものとのみ見る能はず。彼は云へり。

『最高の存在者を觀するに當りて、其の人格的屬性を見るを好まざる傾向いや増せり。斯くて基督教の信仰に特有なる三一神、神子成肉身、贖罪の如き教理を好まぬこととなる。年少にして氣鋭なる人は誤謬の摘發に於ける勝利を積極的なる真理の愛と誤り混じて先づ屢々此の流行病に罹り易し。あゝ誠實なる眞

理の探求者さへも此の弊に染むを免れず。天性宗教的なる人にしてこの不健全なる感化により、天父の活ける神より遠かり、人代名詞を神に用ふるを避くるに至りし人を我は知れり。これ短き間余自身の状態なりし故余は深き感じを以て語るなり。又一種誤れる病的の趣味は流行と相合して、アブラハム、イサク、ヤコブの神を以て餘り實在的なりとし、

愛するものを知ずして

小山の上谷の間にて自然を崇む

ることを以て遙に己が漠然たる感覺と一致すと感ずる人を多く識り、又年々之に逢ふ。是の如き流風に染むとも、終に能く之に勝ち鮮明なる意識に達したる人時代を導く光となる、昔も亦今も。(四四、五)

鮮明なる意識に原ける建設

ポオル、ロイヤアルの學徒

若し準備の時と好題目とが興へられたならば、斯かる聞き慣れぬ固有名詞のはいつた題目よりは、もつと我等に切實であつて、何人も多少の意見を立て判断を下すことの出来る題目を擇びたいと云ふことは余輩の希望であつた。始終我等の現状と懸け隔つた美しい事物にのみ我等の感興を繋ぐと云ふことには多少の弊害あることは之を認知せざるにあらず。然れども差し當り餘り無理の行かぬ範圍内で多少新しい感興をもつて居る題目を求めて、今日此處に話さうとして居るポオル、ロイヤアルの學徒の物語を得たのである。名の示す如くこれは第十七世紀佛蘭西にあつた話で、年代は日本では徳川三代將軍から四代將軍の世にかかつて居る。元祿時代までにはまだ二三十年の間があつたが、佛蘭西では宛も元祿時代にも似たる路易第十四世紀に當り、一代の風俗華美を競ひ、

モリエル、ラシイン、コルネキユなどと云ふ文豪が現れて劇壇は盛を極め、享樂主義が風氣を支配して居つた。此の時に當り哲學界に立つても文學界に立つても第一流以下に落ちざる天才の人が身を心靈界の事業に献じ、感化を社會に及ぼしたのが即ちポオル、ロイヤアルの學徒の歴史である。信仰の花はひとり平家の末運とか羅馬の衰亡時代とか云ふ凋落の秋にのみ咲くべきものでなく、興國の晨榮華の春にも之を見ることの出来るのは我等を勵ます事實である。

ポオル、ロイヤアルの學徒を生み出した思想の源を明にする爲に、簡単にコルネリウス・ヤンゼンの事を話さねばならぬ。今の白耳義の内であるが、當時はフランダアと云つた地方、有名な畫家の一派の出た處にルヴァンと云ふ大學があつて、デヤンセン(一五八五—一六八三)は其の大學の神學教授であつたのである。生れは和蘭であつてフランダアで教育を受け、バイユスと云ふ學者から多くの感化を受けた。其の爲人を云へば非常に非社交的人であつて、晚餐會などへは絶え

て出ない學生の集會へも顔を出さない、教室ではなか／＼嚴しい先生であつて怠惰な學生は鞭を以て前進せしむる主義であつた。何々牧師と云ふ晩學生に對しても決して假借しなかつた。しかし學ぶ所には非常に忠實であつて、別けてもアウグスチヌスの書物には精通して居つた。其れも其の筈であつて、數年間或る田舎に引籠つてサン、シイラン (St. Cyran) と云ふ親友と晝夜アウグスチヌスを研究した。時々日本の羽子のやうなものをついて頭を休めるばかりであつた。アウグスチヌスの全集と云へば頗る浩瀚なものであるが、其れを通讀すること十回に及び、救の問題に關してペラギウスと議論を闘せたる部類に至りては三十回に及んだと云ふことである。讀むべき書物の多い世界で、これは又餘り迂遠な事のやうであるが、此の克己精讀の書齋から驚くべき勢力は流れ出たのである。斯くて研究を積んだ結果として「アウグスチヌス」と云ふ書物が出来て、著者の死後出版になつた。著者其の人と同じく此の著書も亦素人受けの

せぬ書物であつたが、軍艦や大きな汽船を動かすには素人には分らぬ組織の複雑な機關を要する如く、カルツキンの「インスチテュート」やカントの「純理批判」や又ジャンセンの書物の如き専門的の大著が世の中に革命を起さする勢力は實に歴史上の偉觀である。ジャンセンの中心思想は人の救はるるは神の恩恵に依ると云ふことであつて、パウロからアウグスチヌスを經て流れ來つた思想である。ルウテルと同じく加特力教會の神學を破る革命的運動であるが、ルウテルの主張とも多少違ふ所がある。恩恵によつて救はるると云ふ所まではルウテルとジャンセンと一致する所であるが、恩寵の人に来る道に就いて、即ち信仰によつて義とせらると云ふ教理の解釋に於て一致しない點があつて、ジャンセニズムはプロテスタンティズムとなり得ないのである。但パウロニズムを生命として居ることは一である。

ジャンセンは神學の教授から後イブレの監督となつて終つたのであるが、其

の友サン、シイランはヤンゼンの如き學究でない。知慧あり見識ある人で、巴里の良き社會にジャンゼンの思想を鼓吹して同志の人を興した。然して後異端と云ふ譯を以て獄に投せられたのであるが、シイランの感化を受けた人の中にアントアン、アルノオ (Antoine Arnauld) と云ふ人物があつた。巴里のソルボン大學院の一員で法學の大家であつたために、自然此の一派の首領と仰がるゝやうになつたが、此の人の姉の子にルマイトル姓の二人の兄弟があつた。兄アントアンは望を屬せられた法律家で、弟サシイは軍人であつたが、宗教上の動機より二人齊しく地位を擲つて巴里に修道の一小社を造つて居つたが、サン、シイランが禁錮せらるるに及んで、巴里を去つてボオル、ロイヤアルと云ふ地に移つた。此處は都を西に距る事十八哩の所に在る一村落ちてあつて、第十三世紀の始めの方、十字軍に従つて東征した武士の遺し置いた金を以て、其の家人が祝福を祈る爲に建立した尼寺があつた。同じくアルノオ一家の婦人で、此の兄弟の

叔母に當るアンゼリカと云ふ信仰篤い婦人が其の院主であつたが、マラリヤの流行した爲め暫時ここを避けて巴里へ移つた、其の跡へ此の二人が住むやうになつたのである。さうすると同志の人々が續々加はつて來て二十五人ばかりになり、沼澤を乾し荆棘を剪つてここに一小樂土を拓いた。其の人々は或ひは軍人あり、學者あり、醫者あり、英國人も二三人雜つて居た。院内に常住するものもあつたが、クリスマスやイイストルと云ふ時節にのみ此處に宿して、心靈の修行をなす人もあつた。其の後婦人の修道者も歸つて來て別の家に住むやうになつた。

院内の生活は如何であるかと云へば、一同朝の三時に起きて朝禱を捧げる。其れから銘々に靜肅勤勉な日々の生活を始むるのであるが、兄ルマイストルは土地財産を管理して園丁を使つて其の方の業に従事する。ハモンと云ふ醫者は周圍數哩の貧しき病家を見舞ふ、ランセロット、ニコオル、フォンテーンなど

云ふ人は學校を建てて兒童の教育に従事した。諸君が西洋の教育史を讀まらるるならばボオル、ロイヤアルの學派の教育には一章を割與したものが多いことを見出すであらう。序ながら此の一派の教育の方針とした要點を數へるならば、兒童各個に親切な注意を拂ふこと、學問に興味をもたすこと、記憶力の發達に重きを置くこと、羅旬語よりも現行の國語の教育に意を用ふる等等である。大體開發主義の教育であつて、且つ佛蘭西文學の進歩に少からず貢獻した功は著しいものがある。有名な詩人ラシインも此の學社で養はれた。然して彼等の中には文筆の事業に當つたものが多かつた。彼等の當面の敵なるイエズイット派から出した宗教の書物は、書肆の架上で塵に埋もつて居たに反し、ボオル、ロイヤアルの人の書いたものは良く賣れた。其れも譯のあることであつて、彼等は苟も書かない又苟も出版しない。其の遣り方が研究的であり組織的であつた。先づアントアンが委員長であつて、誰が何を書くかと云ふことを定める。草稿

が出来たならばニコオルと云ふ人が文字の誤を正し、綺麗な字を書いたフォォンテーンが之を清書して印刷者の手に渡し、印刷の際には「アクセントとコンマの取締」と云ふ役目にあるバスルと云ふ人が校正をした。同志相補ふて一の事業を經營すると云ふのは何たる愉快なる事であるか。余輩は今日西洋の學者の書物を読んで、同僚の何某君が校正刷を讀んだとか、批評をしてくれたと云ふ事を書いてあるのを見て羨ましく慕はしく思ふのである。我が國でも此のやうな友情を一層涵養して行きたいと思ふ。

此の一派の人は生活に於ては極度の克己儉約を實行した。敢て強ひはしなかつたが、一個の林檎で一度の食事をすますものもあつた、麵包ばかりを嚙つて居たものもあつた。柔かな寢臺の上に寝るものや温い襯衣を着る人はなかつた生活の上では斯の如く緊肅主義を執つたが、思想上に於ては膨脹主義であつた山林の係をして居つた人の如きは林を廻つて仕事をす間、雜念邪情の萌すを

防ぐ爲に六個國の國語を覺えたと云ふ話である。サアシイとバスカルはエビクタタス及びモンターの事を論じたと書いてある。彼等はたゞ聖書をばかり讀んで居なかつた。一代を相手にして戦ふ爲には博く學ぶ必要があつた。さて我我方針は如何にすべきであるか。博く學ぶべきであるか將た狭く限つて之に精通すべきであるか。孔子は君子博學於文約之以禮亦可以弗畔矣と博く學ぶと云ふ事と之を約むると云ふ事と兩方がなくてはならぬ。如何にして兩者を調和さすべきであるか。貝原益軒の考へは餘程面白いと思ふ。益軒の言に、大抵讀書之法中年以前須以博識記誦爲務。不博記則才力不進固陋寡聞。中年以後須以義理精熟爲務。不識精則義理不明泛濫無功。これ大に參考とすべき言である。諸君はまだ中年以前の人である、日本の基督教會は中年以前である。敢て自ら局限する必要はない、局限すれば僻みを生じ易い。大いに知識的の好奇心と功名心を盛にして充分新思想の空氣を呼吸すべきである。中心さへ定まつて居

れば成るべく博く學ぶに如くはない。アグリッパ王はパウロに向ひて「博學汝を狂氣せしめたり」と云つた。我が基督教の先輩諸君も其の初め博學によつて世に勝つた所がある。

さて千六百五十四年の清秋九月、一人の非凡なる天才の人が來つて此の團體に加はつた。ブレエス、バスカルは其の人である。余は今からバスカルの傳記を説き出だすほどの税を諸君に課するものでない。況して其の著作に及ぶことは出来なす。たゞ新に出たバスカル傳 (St. Cyros's Pascal, 1909) を讀んで居る所から此の題目を考へ付いたやうな譯もあるし、此の人が廣き修養から深い敬虔にはいつた徑路につきて數點を話して見たいのである。バスカルの生れたのは千六百二十三年、モリエルの生れた翌年、ベエコンの死ぬる三年前、スピノザの生るゝ九年前であつて、デカアト、ライブニッツ、ガレリオ、フェネロン、ボッシュエの人々は皆時を同うした。如何に知識的活動の旺盛な時代であ

つたかと云ふ事がわかる。バスカルは又名門に生れて良き社會に接する機會をもつた。其の父は地方官や裁判所の所長を勤めた人で、其の姉と妹は佛蘭西の名婦人傳中に載せらるゝ才徳雙美の人であつた。バスカル少年の頃は黒衣の宰相リセリウが飛ぶ鳥を墜す勢ある時代であつた。バスカルの父はリセリウの或る專横な政治に反抗したが爲に其の怒に觸れ、バステイル獄裡の人となるを免れる爲に田舎に隠れて居た。然るに演劇の好きなリセリウは、一日小兒を役者として「戀の壓制」とか云ふ劇を演せさして見たいと思ひ立つた。さうすると宰相の姪に當る某夫人は、バスカルの妹伶俐なるチャクリヌに主なる役割を演せしめた。然してリセリウが出来榮の良かつたのに満足して居るを見てチャクリヌをして父の赦免を乞はした。願は納れられて、バスカルの父は巴里に歸還することが出来たと云ふ話である。バスカルは數學物理學にかけては驚くべき天才の人であつた。十二歳の時幾何學と云ふ學問につき少しばかりの事を聽

いたばかりで、己が部屋の床に白墨をもてユークリッドの第三十二の命題までを解釋した事、十六歳の時コニツク、セクシオンに關する論文を書いてデカアトを驚かした事、十八歳の時父の仕事を簡易ならしむる爲に計算器を發見した事、氣壓によりて山の高さを量ることを發見した事はいづれも人の多く知れる話である。此の一家が如何にして宗教に心を傾くるやうになつたかと云ふと、バスカルが二十四歳の時父が氷を滑つて怪我をしたが其れを治療するために迎へた醫師がサン、シイランを崇拜して居る人であつて、バスカルの一家に宗教の考を吹き込んだ。別けてバスカルの姉と妹とは深く之に感動して忽ち敬虔の人となつた。此の時バスカルの第一の同心と云ふべきものがあつたが、其の後復暫し社交の樂に心牽かれて、學術の俱樂部などの方に興味を奪はれた時期があつた。然るに信念益々篤くなつて終にボオル、ロイヤアルの尼寺に入つた妹の感化と愛情の失望と、或る時乗りし馬車の馬が高き崖より河に落ち、車は幸に

崖上に止つて危き命を助かつた事等からバスケルは眞面目になり、再び靈的の生活に心を向けるやうになつた。殊に又注意すべきことはモンテインの文章を讀み其の懷疑思想を學んだ事が、却てバスケルをしてデカアトが推論によつて到達したる神を疑つて基督の示し給ふた神を求めさせたことである。今日我が國に行はれて居る懷疑の思想でも、或ひは又人をして哲學者の神を疑つて眞の宗教の光明を尋ねしむる機縁とならないにも限らぬ。遂にバスケル三十二年の秋、妹ヂャクリヌをボオル、ロイヤアルに訪ふてこの別天地に身を寄することとなつたのである。バスケルは修道士となつたのではない、先づ客分のやうな姿で靜に道を學び、讀書著作に力を用ゐたのである。これは九月であつたが、二月立つて後、彼の精神上に一革命があつた。この事は生前餘り人に話さなかつたが、死後着物の衿に縫ひ付けてあつた書付により之を知ることが出來た。其の文左の如くである。

千六百五十四年恩寵の年

月曜日、十一月二十三日、聖クレメンヌ祭

夜十時半と十二時の半

火

アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神

哲學者賢人の神にあらず

確實 確實

イエス・キリストの神

我が神 汝の神

汝の神は我が神たらん

世を忘れ神の外一切を忘る

彼は唯だ福音によりて示されたる道によりてのみ見出さるべし

人の靈魂の偉大なることよ

「義なる父よ世は汝を知らず、我は汝を知る

歡喜 歡喜 歡喜 歡喜の涙

ボオル・ロイヤアルの學徒

基督と人生

我は彼より落ちたり

「彼等は活ける水の源なる我を棄てたり

「我が神汝我を棄て給ふか

我永に神を離れざらまし

「唯一の眞の神なる汝と其遣ししイエス・キリストを知るこれ永遠の生命なり」

我は落ちたり、我は彼より遁れたり、彼を否みたり、彼を十字架につけたり

我永に彼より落ちざらまし

我は福音の示す道によりてのみ彼を捉ふ

全く舊生活を棄つることは如何に甘美なるよ(「舊生活を棄つる」と云ふは)

イエス・キリスト、我が贖主に絶対的の服従(renunciationを譯したるなり)

我は汝の言を忘れざるべしアメン

バスカルは神に接したのである、歡喜と法悦を味つたのである。其の結果は如何であつたか。其の姉なる人が妹に與へた手紙の中に「彼は恩恵に成長し、汝彼を見識らぬまでになれり。彼は己を賤しみ且つ信せず、人の記憶より己が名の消し去られんとを好めり」とある。實に靈の結ぶ果は柔和であり、謙遜であ

り、碎けたる魂である。權威と活動とはこの處から生じて來るのである。ポオル、ロイヤアルの人は沈着であつた。然して其下には炎々たる熱火を藏して居つた。

バスカルの宗教的經驗と神學との關係をこゝに話す餘地はないのであるが、兎に角彼の神學は回心のあり得る神學であつたと云ふ事である。デヤンセンの神學の生命は保羅主義である。然して保羅の主義は彼の回心悔悟から生れた神學である。バスカルの全宗教は回心を中心として居る。

然れども保羅主義を標榜した神學なれば可いかと云ふにさうではない。自得したもの發見したものでなくば力がない。バスカル曰く「人に聽きし事を諸君の信仰の法則とするてなく、未だ曾て此の事を聞きしことなきかの如く一の問題に接すべし。諸君をして信せしむるものは他の人の聲に非ずして諸君自身の理性の變らざる聲なり」と。バスカルは何事によらず自己の判斷力を働かすべきことを教へた。此の點はルウテルが「己の目を以て見よ」と教へたのと揆を一に

して居つて、あらゆる改革家の警告である。

又注意すべき一事は、バスカルが實行を力めた事である。行によりて救はれず信仰によりて救はるゝてふ福音は、力行の人の口から出た時に最も權威がある。

此の新鮮な経験の裡、當時の人心を毒して居つたイエズイット派の神學の勢力に打撃を加ふに足る勢力があつた。バスカルの「郷友に寄するの書」はイエズイット派の勢力を粉碎した大なる武器であつた。其の諷刺嘲笑の筆は痛快を極めた。

バスカルは千六百六十二年四十歳で世を去つたが、其の前からジャンセンの徒に對する羅馬教會の壓迫は次第に加はつて、或る者は禁錮せられ或る者は流竄の身となつた。然して名にし負ふボオル・ロイヤアルの寺院は千七百九年に破毀せられた、死者の遺骨でさへ掘り出して他に移された。然れどもハルナツクの

言つた如く、ジャンセンから起つた運動は「深く第十七世紀の佛蘭西の歴史にはいつて、其の勢力は第十八世紀第十九世紀にまで及んで居る」佛蘭西革命の初期に活動した名士のうちには、ジャンセニストの人が少くなかつた。然して不朽なるバスカル「思想録」の讀まるゝ限りはボオル、ロイヤアルの學徒のビウリタンの精神は永久に世界に感化を及ぼすであらう。(四十四、六、東京神學社卒業式講演)

ロポルトソン傳中の自然

英國の有名なる説教家ロポルトソンは二十三歳にして牛津大學を卒業し、翌年即ち千八百四十年の七月按手禮を受けて教職に就き、最初の任地なるウインチェスタアに赴けり。此の青年牧師は克己力行の精神を鼓して其の新生活に入れり。毎日の日課を云へば、先づ早起の習慣を守り、睡眠と飲食に於て厳しく自ら抑制し、一年近き間は殆んど肉食を斷ちしことありき。午前は全く勉學

のために用ひたり。デヨナサン・エドワルドの著書の如きは之に精通し、又日々マルチン及びブナイナルドの傳記を讀めり。午後は貧民を訪問するために用ひ生活の費用を節して之に施したり。ロボトソンは斯くの如く努力したれどもどもウインチェスタアに於ける二年は成功の生涯にあらざりき。講壇に於ける偉大なる勢力未だ發揮せられず、且つ健康を損じたれば、遂に醫者の勸告に従ひて大陸の旅を試みたり。歩いてライン河畔を溯りて瑞西に入りゼネバに到り暫く留りて歸路に就けり。歸國して後も數ヶ月間は説教を爲すことを禁せられ静養せしが千八百四十二年チェルテンハム市に聘せられて教會を牧することゝなれり。彼は此處に於て多くの知己を得たれども、思想上の疑惑の爲に煩悶して人に説くべき確信を得ず。且つ健康を損せしかば千八百四十六年任地を去り再び歐洲大陸さして旅立てり。

清秋九月彼はしばらくハイデルベルヒに留りて獨逸の哲學に沈潜せしが、や

がて南してイン河畔に出てぬ。イン河は瑞西の山間に發し、チロールを経てまた北に流れてダニウブ河に合せる河にして、インスブルックの市は其の岸に在り彼は妻(前回の旅行の際ゼネバに於いて初めて相識り後結婚したり)に贈れる手紙のうちに記して曰く、「余がインスブルックに到着したるは午後五時頃なりき此の市は一の河岸に在りて河岸は幅二哩ばかり長さは目の届くかぎり遙なり。イン河は其の中を馳せてダニウブへ流るゝなり。インスブルックに着する四時間前に一の高地に達す、此處より眺めたる景色と云へば同じ種類の景のうち之に匹敵すべきものを見ず。美麗なる一帶の平野は村落や會堂の塔を以て點染せられ、其の背景には雄大なる山脈突兀として聳え、其中には新雪を戴けるものありき。二十六時間も汚き驛車に乗りつづけし不愉快なる思に引きかへて此の絶景が赫々たる日光に照られて眼前に露呈するを見しときの感情を記すは筆も及ばざる所なり。」

是の如き雄麗なる自然の美に對してもロボルトソンの心は猶ほ未だ我を忘るる歡喜の状態に入る能はざりき。別の書翰に記して曰く「此の壯觀は余をして人を厭はしめ、靜和なる美さへ我が胸をして自ら述べ難き苦惱を以て鼓動せしむ。レッチの筆に成れるゲーテの「ファウスト」の挿畫の一にこれあり。數々の惡魔ファウストの魂を得んとして相争へる上より天使だち薔薇の花を落としつつあるに、其の花惡魔の身に觸るればさながら溶けたる金の如く燃え且つ焦げたるを畫けり、美妙の景の我に於けるも之に同じく我を慰むべくして却て焦げ去る。インスブルックに着して後、余は獨り猛く流るゝ川の傍を逍遙せり、萬象森として且つ莊嚴なりき。夕陽小山の彼方に没するや巨影は靜に谷を渡りてさながら大なる怪物に似たりき。やがて山々の輪廓は、次第に暗くなり行く空に混じつゝ、我が身獨り暗黒の偉大の裡に残れり。かゝる時に有ることながら余は時間の經過迅速にして萬物皆無限のうちに流れ入るを感じたり。我等須臾の生

命を享けて爰に立てり。眇として力なきものながら煩悶し思想する力はある、不死のものにあらずんばいかで此の力あるべきか。かくて余は徐にインスブルックに歸り、家々の窓の燈の光を見、會堂の鐘の緩に響くを聞き、晚禱を終へて歸る群集に會ひしが、すべて一場の夢の如く感せられたり。」

インスブルックにては一日獵師を雇ひて麝羊を獵りしも獲物なかりき。それより復た背囊を負ひ歩いて川を渡りて谷に沿ひスタイメハと云へる山間の小村に一泊し、アルプスの支脈を渡りヴェニスの方角さして辿り行けり。「今こそ旅行するに最も佳き時節なる。夏の頃は樅の樹の葉たゞ一色にて陰氣なれども今は之と異なり、舊き葉の深緑せるあり、若木の淺き緑せる、之に雜りて秋色を染めたる木葉の橙黄色なるあり。此の橙黄色の不規則に染め分けし景色此上なく美し」。彼は道すがらアルプス山間にて聞し鐘の音の格別なる響あるを愛てつゝ、アムベツオの道にかゝりぬ。アムベツオはインスブルックよりヴェニスに通ず

る捷徑にして三日半にしてコルテナと云ふ驛に着す。此處よりはヴェニスまで二日路なり。ロポルトソンは手紙のうちに語りて曰く、「アムベツオの道の景色は見事なるものなり。路は奇峰削立せる間を曲り曲りて行く。余が此處を過ぎし日は半日好く晴れしが其後雨瀧の如く降り出でコルテナに達せし頃には衣打ち濡れぬ。されど雨さへも景色の雄大を加へぬ。時々漏れ来る日光は遠山の峰を現はし、近き山々をめぐりてさまざまに卷舒する雲はます／＼景色の壯大を増したり。昨日余はカストレッツウトと云へる地高く四方の眺め開きたる處より險しき山路をばポツチェンさして降り。此處は此の道中の最も險しき部分にして余は足を痛め躓きて踝を損じたれども、途上の景色の美しきは人を樂ましむるに足れり。……此のあたりより南土の風物は漸く現れ來り。葡萄蔓は茂り南瓜は黄金色なして地上に横はり、漸く暖に殆んど蒸せ暑き空氣は照る日暑き空の遠からぬを知らしめぬ。余はポツチェンより南には行かざりしが、此處はア

イサクとアヂゲの谷の相合する處に在り。四面を繞れる山は都府の上に懸かり、葡萄、無花果、桑、南瓜など山腹に茂れり。

讀者若し地圖を開てロポルトソンの遊跡に追蹤するの勞を吝まれば此の邊の山水如何に幽邃險奇なるべきかと想像するに難からざるべし。地は瑞西と境を接せる奥太利の西邊なるチロル州にして、イン河の水は北東に流れてダニウブなり、アイシ河は南に落ちて以太利に入る。ロポルトソンの志す所は兩河の分水嶺なるアルプスの一脈を跋涉するに在り。さればアイン河とアヂゲ河との合流點に臨めるブツチェンに到りて引き回し更に別なる方面を探らんとするなり。九月二十八日朝六時に出立してミンドラ山に登り、二水遠く群山の間より來りて一となり更に南に流れ、トレント宗教會議を以て名高きトレントの方に隱る、一帯の景色を眺め、歸りしは午後八時なりき。此處よりアヂゲの川を

湖りメランに到り、氷河を涉りてイン河畔に出づる道を問ふべく、アウグスチヌス派の修道院の一僧を訪へり。此の僧は土地の案内に精しき人なるが、此の時節に行き得べき道は唯一あることを答へたり。勿論案内者を雇ひ氷河用の金靴を穿きて行かざる可らず。さらば行くべしとて朝六時に出立して進みしが、路にて大雨となり、氷河を越ゆることは到底望み難き空模様なりければ、計畫を變じ雨のやむを俟ちて更に西に進み、瑞西國境に聳ゆるステルピオ山に登れり。山道ははや雪積りて蹠を没するばかりなれど、其の奇絶なる、歐羅巴に於ける最も驚くべき道なりとロポルトソンは云へり。山頂に達せし頃は折悪く雲に閉されて眺望に便悪かりければ山腹の一軒家の税務署と宿屋とを兼ねたるに一泊し、翌朝再び登山を試みたり。前夜降り積りし雪は膝に達せり。「雄大なる景色は頂に於て我を待ちつゝありき。太陽は堂々たるオルテラル峰頭の雪を照らし、其の皚々たる光は山腹の巖石の黒色なるに反映したり。然して氷河も亦

日に照り輝きつゝ谷に流れ入る」。ロポルトソンは一人の下等なる以太利人が附纏ひ來るを計略を回して振り拂ひ、漸く孤獨の樂みに耽るを得たり。基督の孤觸を題として有名なる説教をなせるロポルトソンは唯獨り雄大なる自然を友として靜想を縱にするを好みたり。曰く「余は如何ばかり孤獨を愛する様になりしか君に語るに能はず。余は一人ならずして此の山、此の蒼蒼たる松林、荒涼たる風景や響を味ふこと能はず」。

ステルピオ山より復た一の分水嶺を越えて終にインスブルックに歸りぬ。彼は路を改めて瑞西に入り、十月十一日シャウハウゼンに遊べり。此處はコンスタンツ湖の水注いて萊因の大河となる源にして、ロポルトソンの宿りし旅亭の對岸には高さ七十尺の瀑布懸れり。「昨夜余は月光の下萊因の瀧に對し更くる迄寢室に坐して眠る能はざりき。糲糊たる月の光は白き飛沫を照し、黒色の岩は之に反映して一層黒く見えたり。空に飛ぶ細沫は最と薄き銀帳を掛くるに似た

り。断えざる瀧の轟きは遠く聞けば嵐の林を吹くが如く、兵士の悲みの曲を奏するが如し。何等莊嚴の光景ぞ。寂然として牙え渡りたる星は限り無き蒼空より見下し、風無く、雲無く芝生の上に建ち列べる石像は冷く白くして宛ら幽靈の如く萊因河の流れの騒がしきを瞰下すに似たりける。之よりも更にロポルトソンの遊心を動せしは透明なる西方の空に見えし少女山ユングフラウの景色なり。「華麗なる日の光は山々を染めて燃ゆるばかりとなせしが、やがて何時しか薄薔薇色を潮し、須臾にしてたゞ雪の色のみ白く冷く残れり。此の移り行く色は余に何とも云ひ難き心持を起さしめぬ。雪の色の蒼きは死人の色に似通ひて余をして戦慄せんばかり一種不思議なる感をもたしめぬ。ロポルトソンは此遠景に對して遊心禁じ難く旅亭より二哩離れたるシャウハウゼンの市街に歩いてチウリッヒ行きの馬車の出づる時刻を聞き合せたり。然るに旅亭の老案内者は余が天氣の好きを語るを聞き冷然として頭を掉りて云ふやう「否とよ余は二十五年の間案内

者なり、我が云ふことを信じ給へ今に雨とならん」。其の時空には一點の雲もなかりしが夜半を少し過ぐる頃雨は星なき空より落ち初めたり

二三日の後にロポルトソンは瑞西を辭してハイデルベルヒに往き、十二月上旬まで此の古城の市に逗留せしが三月の不在の後英國の我が家に歸着せり。

三ヶ月間の旅行休養は病めるロポルトソンの心身を癒やしたり。余は六週間獨りチロルに放浪して山間の空氣と強き運動の結果を試みたり。その後ハイデルベルヒに九週間を費し一の教會に關する義務を擔任して多くの興味を感じ、ゲーテ、シルレル、クラウゼを研究し、平靜と健康らしきものを回復したり。大陸より歸りて後彼は暫くオクスフォードの或る教會に於て説教せしが、其の年の八月ブライトンの教會の聘を受け、初めて畢生の精力を盡すべき地を見出しぬ

ロポルトソンが三十二歳の時聘せられて其の教會の牧師となり、三十八歳にして死するに至るまで、短くして榮えある生活を送りし處なるブライイトンは英國の南海岸に依りて海峽に臨みたる一都會なり。されば大海の眺め、吹き來る海風、都府の背に起伏せる廣き牧場、孰れもロポルトソンの心を動かし趣味に適せる景色にてありき。忙しき勤勞に疲れたる時、若しくは説教の準備に心を碎く時、彼は或は波打つ岸邊を往來し、或は綠色濃き小山の上を逍遙して青き天と青き海に懷を遣り想を養ふを常とせり。晨夕に變り行く海の氣色は別けてもロポルトソンの感興を惹けり。彼は書翰の一に語りて曰り「朝早く見たる海と空とは日中の眺め平凡なるに引き代へて特に美しく新鮮なる事はいたく我を打てり。日中は中年と同じく平凡なる事多く勞苦多くして傳奇的なるものに乏し、少くとも多數の人は然り。朝と夕とは少年と老年に似て一種の詩なり。然れども之を見得べく開かれたる目あらば日中と中年と齊しく特殊の驚きあり又神秘あり。

眞晝の時代に於て非凡を感得せんとせば須く目を舉げて、今世界の上に照り輝ける光は、我等が晨に其の濃に動き初むるを見し時と同じく神秘にして崇高なることを記憶すべし。余は二日前の朝海濱にて感せしほど此の天地の清新なること、毎朝茲に新しき一日ある事を感じしことなしと思ふ。今日となりては光景復たすべて一變せり。然かも余は亦海の姿態のさまざま變化するを見るより受くる利益を感ぜざる能はず。風は疾走して怒號し、岸下の海は一面に白く、沖の方は暗澹たり、裂けて大なる谷をなしつゝ、水平線のあたりは半透明なる淺霧のうちに沒せり。

大なる海鷗は時々奇妙なる聲もて叫びつゝ、或は食物を持ち來る波の上に直下し、或は霧の中に影の如く浮べり。我が舌は我が裡に起る此思を語り得まほし。此の刹那に我が心はすべて此の光景と一になれり。我は眺め又眺めて我が意志の無からんことを願へり云々。」

或る年十月の末ロポルトソンはレゼニイ街角を歩する時端なく空の美に打たれぬ。「雲の作せる二大陸は平行して海の方に垂れ、水平線上にて相合ふが如く見えたり。碧く澄みわたる河は其の間を流れ岸を洗ふて遠くなるに随ひて狭くなり行く。岸と岸とは純金色もて縁とられて宛ら漣の此處に打寄せてきらきらと光るが如し。其の外數知られぬ黄金の小島兩岸に沿ふて散點せり。雲と雲と並行せる遠景は果しなく續く並樹を見る如く、無限の距離てふことを感せしむ。空と雲とのみ眺むる時には餘り距離と云ふことを思はず。……さはれ形の様々なる所より我は空間の莫大なるを思はざるを得ずして、數週間來會て感せざりし偉大と美妙とを切に感ずることを得たり。我はヒウマニチイと良く和合せざる時には樹や雲や心なき物の形象と色に於て、人間よりも一層我に近く我に語り、我を容るべきものを見出すなり。」

此等の文字はラスキンを思ひ出でしむるならん。實にロポルトソンは自然を

愛したるが故に、亦自然を解釋したる詩人文士を愛したり。彼はラスキンを精讀したりと見ゆ。或る人の爲にラスキンを讀む心得を記して曰く「君よ願くは極めて緩かに之を讀め、毎日數頁以上を讀まぬとを決心せよ。短き章なれば、一二章にて足れり、長き章なれば二日を費して可なり。……ラスキンは是の如く讀むだけの價值あり。之を勉強せられよ。一章を讀む毎に沈思し、眼を閉ぢ書中の主義に照して自己を省察し、其の眼目を簡單に紙に記し置き、日々前日に得たる所のものを思ひ起すべし。此れは多くの書を讀む方法にあらざるも大に讀む方法なり」。

キイブルの詩も亦彼の座右の友なりしと見ゆ。「余は悲み多く心沈み勝ちなるまゝ我がキイブルを開けり」と云へる所あり。又「今日我はキイブルを讀めり、今日は珍しくも麗しき日なり」と書けるもあり。之に引き續きてロポルトソンはキイブルが虹の事を歌ひたる篇に説き及べり。朝の虹は牧羊夫などが悪しき天

氣の兆として怖るゝ所、夜の虹は之に反して好き天氣を示す。キイブルの歌(リク
スチヤン・イヤールのうちトリニ)は此の事實を借りて聖者暮年の榮を稱へたるいと美は
チー後第二十五の日曜日の歌)しきものなり。ロポルトソンも亦虹の如く始まる一生が屢々悲愁の雲に包まれ
て暮ることあれば、始め困難多けれども一生の行路其の終に近くにつれて夜の
虹の如く不朽の眞理と柔けき愛に浴することなる事實に注意したり。

ロポルトソンが作りたるテニソンの「イン、メモリヤム」の分解は別に一冊の
書として出版せられしほどなれば、彼がテニソンの忠實なる研究者なりしこと
は察せらるべし。「イン、メモリヤム」の各篇の要約は此の詩を讀む者の大なる
助けなり。又或る人がテニソンの詩中の一句の意味を尋ねたるに答へたる手紙
などいと面白きものなれどもこゝに譯し難きは残念なり。又ウォルヅウォルス
の「プレルウッド」につきては云へり「此は高尚なる作なり。余は之を讀んで幾度
が眼に涙を充たせたり。哀れなるが爲にあらず其の高き調子と澄み渡れる純粹

によりてなり」と彼は最後の病氣にかゝる前ライダルの詩人につきて數回の講
演を試みたり。

ロポルトソンは涙脆く心弱き人にあらず、勇猛の氣に満ちたる丈夫兒にてあ
りき。青年の時軍人となる望を懷き、後年に至りても寧ろ軍人となりたりしな
らばと云ふ情は全く之を絶つこと能はざりき。然れども彼は悲哀寂寥の人にて
ありき。四十歳に満たずして死したりと雖も既に一代の偉人と仰がれ、家に妻
あり子あり。然るに其の數多き書翰の中妻子の事に言に及べるは殆んど之を見
ず。たゞブライトンに赴任せる年、妻早産して生れし兒死したるを葬れる日の
事を記せるを見るのみ。「余は今我が小く美しき者を墓に藏め、棺のうちに横は
れる安らかなる顔に最後の一瞥を與へて歸りし所なり。折しも月夜にてたゞ會
堂守の此處に在りしのみ。日中大勢の人に圍まれて式を行ふよりも今斯く彼女
を葬るは寧ろ我が心に適ふ如く感ず。果てしなき茫漠たる暗黒のうちに却て多

く天あり、神あり、深くして静なる休みあり、少くとも我には爾か感せらる。」
 ロボルトソンは自然を愛すること多く人を愛すること少き人にあらず。彼が
 人を愛する愛ありて後初めて自然の美を感じることを説ける所は面白し。曰く
 「小兒の自然を見るや欣び樂むと云ふ情はこれなし」(不幸にも身體の早熟のた
 め感情が早く發達したる小兒にあらずは)。殊に男の兒に取りては美しき小山
 も、駆け歩く場處、水雞を捕る處にして、其の感情を寄する所にあらず。自然の
 愛すべきを感じる心は婦人の魔力に觸れし時初めて動き出づ」と。「物の哀れは
 之よりぞ知る」と我が國の詩人の云ひしと符合せり。然り彼は人を愛せり。人を
 愛せるが故に其の濃なる情緒は人生の底に伏せる哀音に動かされざるを得ず。
 「此の世界の深き低音は悲哀なり。その莊嚴なる低音は時を期して自から發し、
 あらゆる他の調の間に響けり。此の世界の音樂の一切の調べは結局此の調子に
 歸入す。余は信ず、若し正しく解釋すれば悲多き人生の秘義を解釋するものは

十字架なり。たゞ十字架なり。生命の君なる至高者の悲なり。」

清高沈摯の人には此の悲哀あり、然れども光明靈活の元氣は減せざりき。彼
 を斃したる病は脊髓病にて苦痛は非常なりき。されどロボルトソンは日の出の
 空を觀たきあまり、或る日四時に起き動かぬ身體を運びて窓まで匍ひ行けりと
 云ふ。(四十三、九)

チャルメルスの信仰の轉機

總べて偉大なるものは自然なり又健全なり、人をして亦之を學び得べく感せ
 しむ。チャルメルスの傳記を讀み其の宗教的實驗の進み行く跡を尋ねるに如何
 にも自然にして人情に近く又調子高きを見る。殊に其の傳記の中樞とも稱すべ
 き彼の信仰及び説教に於ける轉機に至りては我等を啓發し教訓する所甚だ多し
 先づ其の二三を擧ぐるを得ば、第一、我等の經驗が基督の福音の根本義に透徹

せずんば自ら動かし又人の靈を動かす力なきことなり。第二、この福音的なるものは之に達するまでには研究を要し苦心を要し努力を要することこれなり。我等の信仰は縦し前人より承繼したるものなりとするも自ら勞して之を耕し自得する所あるにあらずば力なし。何等に係らず結論は單純なり、たゞ苦んで之に達したる人にして初めて能く單純なる真理の價値を解し得べし。第三、チャルメルスの如き人に在りたる轉機は純然たる靈的宗教的のものなれども之を來らしめたる機會は道徳的努力に胚胎せる所多し。これ亦我等が此の偉人に學ぶに當り注意すべき一要點なるべし。

米國の學者マコーン世界を巡りて偉大なりと稱すべき二個の人物を見たり、一はブンセンにして他はチャルメルスなりと其の書中に記しありと云ふ。此の頃獨逸にて出版せられつつある大説教者に關する叢書にも近世の獨逸以外の大説教家六人を選び、ウキネー、ボスエー等とともにチャルメルスを挙げありと

或る雜誌に見えたり。蘇格蘭の「自由教會」^{フリー・チヤルメルス}の設立者たる地位と、苦心慘憺たる經營の歴史を除くも猶ほ偉大なる人物たるを失はざるべきトマス、チャルメルスは千七百八十年三月十七日に生れ、千八百四十七年五月三十日に死せり。其の女甥ハンナの筆に成れる詳傳とジョン、ドッツと云へる人のものせし簡短なる傳記によりて其の一生を尋ねべし彼の曾祖父の代より代々牧師たり。皆好人物なれども非凡の人なりしと見え。チャルメルスの父母は十四人の子ありて彼は第六にてありき。父母は教育に力を用ふること能はざりしと見え、チャルメルスは乳母の虐待を免れんために三歳の時自から望んで小學校に入れり。十二歳の時セント、アンドリュウス大學の「ユーナイテッド、カレッジ」に入れり。早熟の人にて十三四歳の頃既に著しき智力の開發を見たり。最も好みしは數學にして又倫理學政治學にも興味を有し、就中或る一人の有名なる教授より學界の精神を鼓吹せられたりとあり。序ながら云ふべきことはこの學界の精神こそ今

日の神學教育に於て最も意を用ひて鼓吹すべき一なるべく、この精神に觸るる機會を失はしむるは大なる不親切なり。十六歳にして神學を始たり。されども彼は當時神學に多くの時を費さず、依然數學に熱心にして且つ佛蘭西語を勉強したり。同窓の一人の語りし所によれば彼は神學校の教師の説くオルソドキシイは確信したる眞理にあらずして教條に定めあるまゝに遵ふのみとの思想に支配せられたり。これ今日の知識ある青年が教會や説教者に對して抱き易き感想なれば、かかる謬見に基礎を與へざるを力めざるべからず。チャルメルスは決して精神上の問題に無頓着なりしにあらず。十八世紀末の思想の混亂の波上に漂ひたり。この宇宙は神を容る、餘地なきかと嘆じたり。一人の友人の云ふ所によれば屢々彼の口より出でしは「願くは我等の心の據りて立つべき確乎たる對象を與へたまへ」との熱切なる祈りにして、其の友人の寢床に入りし後も猶ほチャルメルスが其の傍にて跪きつゝあるを見しこと多かりしと云ふ。この煩悶

の間に彼を導くに於て最も力ありしはデヨナサン、エドワアの著者にてありき。之に感じて「殆んど十二ヶ月の間余は精神的の歡喜國に在りたり。この間余の心靈にすべての喜悅を供せしものは神の廣大なること、一切の事は神の目的に服従せることにありき」と云へり。却説チャルメルスは神學の科程を卒る前十九歳にして説教者たる准允を受けたり。丁年未滿なればとて異議ありしも舊き規則に除外例を設けありしを發見して之を許したり。

神學校を出づる前よりキルマニイとてセント、アンドリウスより九哩ばかり離れたる土地の牧師の空位を充たすべき約束調ひ居りしが、當時彼は大學に於て數學の助教をなし居りて、近き土地なれば牧師就職後も此職を兼ね得べしと期しつゝありしに大學の都合にて此任を解かれしかば、彼はキルマニイに於て化學の組を作りて之を教授し、或はエデンポロ大學の數學の教授の候補者となりて申し出でしことあり。かくの如く初の六年ほどの間は宗教的信念は至て淡

然たるものにて説教の準備にもあまり多くの精力を注がず、日曜日の朝まで之を始めざりしこと珍しからざりしと云ふ。但だ自ら十分確信せざりし所は之を人に説かざりし正直ありしのみにて、自らも福音の深き意味に觸れず、又人を動す力も少かりき。

變化は來らざるべからず、終に來れり。回轉の機會となりしものはその弟と妹の死、之に引き續きて彼の大病にてありき。エデンボロの會議よりの歸路肝臓の病を得て講壇に立つを得ざること五ヶ月以上、十分に回復するまでには一年以上を要したり。その病中伯父なるバラデイと云へる七十近くの老人椅子に俯して祈りしながら此の世を辭せりとの報に接したり。それやこれやにてチャルメルスの心に一大變化は起り來れり。曰く

「余は閉居せる中、時てふものは云ふに足らずとの甚だ強き印象を我が心に與へられたり。その印象は再び健康強壯の幸に達すとも余を離れざるべし。この

印象は一層有益なる他の印象即ち永遠なるもの、偉大てふ他の印象に進まじむる第一歩なり。人間の生活と高等なる存在の境界との結合を停止せよ、餘す所は刹那の幻あるのみ、意味なき戦あるのみ、幻影と計畫と狂奔盡力の往來空に歸するのみ。余は今バスカルの靜思録を讀みつゝあり。」云々

此新しき實驗の光に照らして見れば過ぎ來し生涯は夢の如く又影の如く、其の信仰は如何にも稀薄にして皮相的なりしことを覺り、昨非今是の感切にしてチャルメルスは生涯を一變せんと決心したり。如何に之を變すべきや。此の世は常住の處にあらざる處として生活せんと此れなりき。自今以後一言一行一思想悉く神の前に負へる責任ありとの觀念を以て世に處せんものと決心したり、天性熱烈にして事を半途に止むることをなさざる氣象の人なるが今や渾身の熱心をこめて之に獻すべき目的を見出だしたり。これ實に大なる變化にして之がために罪を感ずる念も一層切實を加へたり。其の頃より彼は日記を書くことを

始めぬ。千八百十年三月十日は彼の第三十回の誕辰に當れるが、その日の日記に曰く、

「余は三十年を完ふせり。最近十五年間の生涯を點檢すればその三分の二は少くとも益なく又怠り勝ちにて經過し、知識の上進を加ふることに於て、悲しひかな系統と忍耐とを缺きたりしを認めざるを得ず。之にもまさりて我が心は全く宗教上の根本義より遠ざかりたり。我が全行爲はその時々々の衝動に指揮せられて義務の觀念より發せず、又すべて我等の行爲の歸趣動機たるべき「永遠」に參照することなかりき。」

此年八月二十一日の日記に、今までの如く數學に多くの力を費すことを廢すべきことを記して、「我が神よすべて我が嘉すべき志を成さしめ給ふて、汝の榮光と人類の善事をして最も多く我が心を懸くる所のものにてあらしめよ」と願へり。但だ茲に考ふべき一事はチャルメルスが大學に在りし時より以來數學に

熱中したりしことは強ちに彼の精神的生活上に損失なりしとのみ思ふべからず。何にもあれ學問を好み精神を之に傾注し研究を續けつゝあることは、心靈の轉機の來るに少からざる關係あることを信せずんばあらず。

チャルメルスの其頃の精神状態は、ルウテルが人生の無常を感じてエルフルトの修道院に入り、嚴正に義務を果たして満足を得んことを求めし時期と相似たり。彼の書翰に曰く「我が行をば神の求めたまふ標準に達する處まで引き擧げんとして努力したり。されどもかゝる間に余は満足を得ること少く又靜息を感ぜざりき」と。この時に當り彼はウキルバーフォースの著せる「今日の宗教的系統の實際的觀察」と云へる書を読み。著者は奴隸廢止の主動者の一人として有名なるウキルバーフォースと同人にて此の書は千七百九十七年に公にせられ、英米兩國の人心に深き感動を興へしのみならず、他の國語にも翻譯せられたり。チャルメルスは此の一書を読みて忽ち新しき光明に入れり。道徳上の

完全に達せんとして努力し、益々達し難きを嘆し居たるに、救主は既に彼れの爲さんとして爲す能はざる處を爲して之を備へ給ひたることを發見したり。今まで爲せし所はつまり和合し難きものを和合せしめんとして徒に勞したり。今よりは、自己の功いさめに由るか、將たキリストの功に依るか、二者其の一に居らざるべからざることを語りたり。彼は今に於てキリストを發見したりしなり。

此新しき經驗に入りたる結果は先づ彼をして自己の使命に對する自覺を盛ならしめたり。彼は自己の心情をば、眼前に絶壁に突進しつゝある友人を見る時の心にたとへたり。之を引き止むる爲には警告し、哀訴し、流涕せずんば已まず。「我は基督の大使なり」との意識儼然として立てり。講壇より發する言は大使としての使命を宣ぶるとなれば容易ならざるを感ぜざるを得ず。今までは二三時間を費して成りしもの今は一の説教の準備に一週間を費し或るものは一ヶ月を要するに至りぬ。彼は精神の高潮に乗じて輕心掉過するの誘惑に陥らざり

き。然して説教の調子も亦變しぬ。猛烈ならずして反て清く靜になれり。然して最も多く變せしは其の内容なり。彼は其の後キルマニイの教會に向つて此の事を語れり。

「余は諸君の間に在りし十二年以上の間なしたる實際の經驗を語らざるを得ず其の大部分余は不正直の卑劣なること、虚偽の敗徳なること、誹毀の賤むべきことを説けり。一言に云へば人間社會の攪亂者と悪疫に對する人心自然の憤怒を發せしむべく品性の缺損を説き示したり。此等の熱心なる辯論の力によりて若し能く盗人をして盗を止めしめ、悪口者をして誹毀を止めしめ、虚言者をして眞實に回らしめたるならば、余は窮極の目的を達し得たりとして安心したるならん。すべて此等の事を爲し得たりとも我が説教を聽く人の靈は全く神より離れ居ることあり得べきことに思ひ及ばざりしなり。(中略)且つ余は未だ曾てかゝる改善の實の擧がりしことを聽かず、よしこれありとしても其の報知に接

せしことなし。余は猛烈に道徳を説き社會的生活の樽節を説きたれども教會員の上に一羽毛の重さをもなざりき。我自から心の願と愛が全く神より離れ居ることを感じたるまでは然かあらざりき、神と和ぐことを余の牧會的盡力の明白にして主要なる目的となせしまでは然かあらざりき。聖書に隨ひて和合の道を示すの方法を取りしまでは然かあらざりき、基督の血によれる罪の赦が自由に提供せらるゝこと、基督の仲保の路を経て求むるものに與へらるゝ聖靈をば信賴祈禱の不斷の目的となすまでは然かあらざりき。一言にして云へば、我が信徒の思想と靈魂とを神との交通に於ける偉大にして必然なる元素に用ひしむるまで附屬的の目的すら果たされしを聞かざりき」

是に於て講壇より新しき勢力は發揮せられたり。語は反響を帯び來れり其の一例を云へば或る日曜日に彼はヨハネ傳第三章十六節を題として説教したり。二人の青年（一人は農夫の子なり）禮拜に列して歸る途中相逢へり。甲は問

へり、今日君は教會にて何を感じたりしが、余は今日の如く我が身の失はれたる罪人なるを感じたることなしと。乙曰くそは不思議なり、余も同じやうに感じたりと。かくて此の二人はともに祈りせんとしてとある林に分け入りて青草の上に跪きて熱心なる祈を捧げぬ。彼等は此の日より新に生れし人となりぬ。其れより毎日曜日の夕必ず同じ處に會して祈り続け、數年に及びしかば其の處一小徑をなしたりと云ふ。後一人は傳道者となり、一人も亦教會の爲に有用なる人物となりしと云ふ。

トマス・チャルメルスが後日グラスゴオに於て又エデンボロに於て蘇格蘭を動したる精神的の活力はキルマニイの小教會の牧師たりしときに經驗したる轉折の節より湧き出てしなり。願くは我等の信仰にも事業にも此の如き轉機來らしめよ。

ジョルヂ・ハアバートと田舎牧師の生活

ジョルヂ、ハアバートは理想的の田舎牧師と云はれし人なり。然も彼はエリサベス女王朝の末、シエクスピヤが「ヴィナス、アンド、アドニス」を書きし年（一五九三年）貴族の城中に生れ、デームス第一世の宮中に入出入して榮華の空氣を呼吸せし人なり。劔を帯び絹の衣を纏ひしを一朝牧師の服に脱ぎ更へて斯くなりし一生の變遷我等の傳奇的興味を牽くものなきに非ず。彼は又宗教詩人なり。其の死せし翌年ミルトンは早期の作なる「ラレグロ」「イルペンセルソ」を出し、翌々年「コオマス」を出だせり。時を同くせし宗教詩人に、クラシャウ及びヅランの二人あり。亦以て時代と文學の風氣漸く變じつゝありしを見るべし。ハアバートは詩人としては大詩人の群に入るを得ずと雖も、其の作は敬虔の精神に満てり。此の時代の詩に有り勝ちの弊なるが形に泥み不自然

なる着想を用ふる所ありと雖も、單純にして清美なる歌亦少からず。短篇に良きものあり。余が此の詩人の名を知りしは往年學校にてワシントン・アーヴィングの「スケッチ、ブック」を學びしとき、安息日の光景を寫せし章（と憶ふ）の首に其の詩句を引きありしを讀みしに生まれり。彼は十七世紀のキイブルと云ふべき人なり。ともに英國國教會の詩人なり。日曜日を歌ひ、會堂の戸口と窓を歌ひ、朝夕の祈禱、一年折々の祭を歌ふ、いづれも作者の高雅なる氣品を反映し、且つ俗を脱せる教會の空氣を愛する念に満てり。徳（Virtue）と題せる短篇の如き愛誦すべきもの一なり。

Sweet day, so cool, so calm, so bright,

The bridal of the earth and sky,

The dew shall weep thy fall to-night,

For thou must die.

美しき日なるかな、かくも涼しくかくも静に、かくも麗なり。天と地を契を
結ぶ日なりけり。今宵露落ちて今日の日の果つべかりしを傷むらん。

とうたひ起して、次に薔薇の花も、花咲く春も皆去り行くべきことを歌ひ、た
だ美しく徳ある靈魂のみぞ滅びず、よし全世界は灰燼となるともこれのみは生
くべしと云へり。

「香り」(The Odour)と題する篇亦詩人の特色を見るべし。彼に取りては「我が
主」の一語に言ひ難き芳芬あり。終日我が靈魂をそのなかに浸して此の香に薰
せらると云ふ主意を咏す。

ハアバートの生涯の傳ふべき所以は蓋し「徳」の一字にあり、又「香り」の一字
にあり。我等は古人に對しても今人に對しても其の人の有せざる點を指摘する
よりも先づ大小を問はず其人の有せる所を質せば必ず學ぶ所あらん。ハアバ
ートに求むるに哲學思想を以てし、傳道の活動を以てし、政治的の經綸を以てす

るは誤れり。彼は徳を以て人を化したる君子なる聖者なり。徳の一字希臘の道
徳學や儒教思想の臭味を帶ぶるものありて、今日基督教會に於て重を置いて説
かれざる傾きなきにあらず。然れどもパウロは云はずや「凡そ如何なる徳如何
なる譽にても汝等之を念ふべし」と。今夜諸君ともに此の有徳なる人の生涯を
考ふることによりて徳の一字を念頭に鮮かならしむるに勉むる所ある機會とな
らば此話も亦徒爾ならずと云ふべし。之とともに基督教の徳は「我が主」の香り
に薰せられて初めて養はれ得べきことも記憶せざるべからず。

極めて簡單にハアバートの一生を語らん。此の人の傳記はアイザック・ワルト
ン(一五九三—一六八三)之を書けり。ワルトンは「コムブライト、アングラー」として釣魚の
事を書きし有名なる書の著者なり。親しくハアバートを識りし人にあざざれど
も、敬慕の念に充ち、彼が遺せし數篇の傳記のうち最も傑作と稱すべく、又英
文學上の一美玉と云ふも溢美にあざざるべし。ハアバートはモントゴメリイと

云へる都府のモントゴメリイ城中に生る。代々勳爵士にして母も亦勳爵士の娘なり。ヨブの妻と同じく七人の男子、三人の女子を生めり、長子は英國の超越神教の開祖として知らるゝチエルベリイ伯エドワード、ハアバートなり。彼がものしたる自傳を讀まば大使として佛蘭西の朝廷に駐りしこと、佛國のプロテスタントを庇護する爲に盡す所ありしこと、又西班牙と戦ひつゝある和蘭の人民を援くるために義兵を募り歩きしことなど詳に記載せられたり。二男三男も和蘭應援軍の士官となりて戰場に向へり。ハアバートは第五子なりき。少くしてケンブリッヂ大學に學ぶ。文雅の嗜み深く詩を作り又音樂を好めり。母に宛し手紙のうちに「我が貧しき詩才をばすべて永久神の御榮の爲に捧げたし」と云ふ語あり。一六一五年二十二歳にして「マスター、オブ、アーツ」の學位を授けられ、一六一九年選ばれて大學の演說者となれり。此の職は大學の外交官の如きものにてありしと見え、たとへば國王より或る恩寵を授かりし節には大學

を代表して謝辭を述ぶるが如き其の任務の一なりき。品藻辭令に長けたる人にあらずんば占め得られざる地位なりと知るべし。或る日國王デームス第一世はフランシス、ベエコンヤ、信仰の人として有名なるウインチェスターの監督アンドリウスを隨へてケンブリッヂに幸せしことありしが、此の二人とも深くハアバートに敬服して交を結びたり。彼は特に國王の知遇を受け、屢々宮中に召されて謁を賜はり、大學の勤務を曠うせる非難ありしほどにて、青雲の志を達するには此上なく便利なる地位に立てり。彼が他年歌ひし如く「我が月日に散りかゝりしは花と幸福とのみにて五月の外に月なきが如く思はれたり」。然れども歡樂の春長からず。彼は歌ひ次ぎて曰く「我が年とともに悲哀はこの身に纏はりて生長し知らぬ間に我を悲みの侶となしぬ」。ハアバートを引き立てくれし二人の友相踵いで死し、一六二五年デームス第一世を去りぬ。ハアバート自身も病を得て暫く倫敦を去りケントに住める一友人の家に退きて靜居せり。彼

は再び書の如き宮廷の生活に歸るべきか、或は母の時折勧めたる如く此の際身を宗教の職に捧ぐべきか胸中に戦ありき。日を経て倫敦に歸り來りし時既に教職に就くことに心決したる旨を宮廷にある一友人に告げ知らせぬ。其友は切に之を諫止せしにハアバートは答へて曰く「曾ては天の王者に宮仕へする臣僕は地上の最も高貴なる族なりと思はれし時もありけり。近き代の不義の爲め人は教職を尊まざるの聖なる名を侮るに至りたれども、我はわがすべての學識とすべての貧弱なる力を我に此等のものを賜ひし神の御榮を揚ぐる爲に用ひてこの職を名譽あるものとせんことを努めんとす。我を基督者とせんがため我がために斯く多くの事を爲し給ひし君の爲なれば何事を爲すとも過ぎたりと云ふべからず。謙遜と云ふことを總ての人の目に愛すべきものとなし、親しき耶蘇の恩深くして且つ柔和なる模範に従ふことによりて我が救主に似たるものとならんことを勉めたり。」

彼は終にこの健氣なる決心に背かざりき。一五二六年執事の職に就きリンコン、カセドラルに屬せるレイトンと云へる會堂を擔任して任に就くや、敗類せる會堂を改築するため、信仰有る母さへも止むるほど勞苦經營して高雅近傍に比なき會堂を建てたり。其後母の死、己の病氣又結婚の事ありて三十六歳の頃ウキイルト縣のベメルトンと云ふ土地の教會のレクトル（監督教會の教職の一の名にして實際牧師と思へば可なり）となるべく招かれたり。彼は今更に責任の重きを思ひ屢々斷食し祈禱して一ヶ月の間決すること能はず。躬ら經驗せしことある人にあらずば何人も思ひ知ること難きほどの心靈の煩悶を経たりと語り。天職に對して誠實謹嚴なる精神を思へば我等をして恥ぢ且つ畏れしむ。

ハアバートの妻なる人も亦身分高き家の女にてありき。任職式済みて三日の後彼は任地に赴き儼然として妻に語ひて曰く「卿は今は牧師の妻なるぞ。されば今は全く父の家を忘れ教會員の何人よりも高きものと思ふべからず。牧師の

妻は己の親切と謙遜とによりて買ひ得る外何等の地位も又人に勝れたることも有ること無し。斯くて買ひ得たる地位こそは牧師の妻にふさはしきものなれ」と。妻は欣んで夫の言を守るべきを約束したり。

ペメルトンに赴任せしは一六三〇年三十六歳の事なりしが、一六三二年かねて多少其兆ありし肺患の爲に世を去りぬ。牧師の職に在りし間は僅々三年に満たず、されどこの三年間の生涯流風餘澤今日に傳はるものあり。毎日二回十時と四時には、妻と世話せる三人の姪とを伴ひ會堂に入りて祈りをなすを常とせり。こは公に定まりたる祈の時刻なれば會堂の鐘を鳴らす。村民は牧師の徳を敬ひ尊めるものから鐘の聞こゆるや農夫鋤を止めて祈るもの多かりしとぞ。ミレエの晝の蔭に更に一個の人格を加へたる光景は昔ペメルトン村に實現せられぬ。彼は神の前に跪づく毎に己が生活に關する決心を新にし、之を忘れざる爲に録して規箴を作れり。かくして認められしもの積んで漸く一書となりしもの死

後二十年を経て出版せられたり。この書題して「宮の一祭司」(A Priest to the Temple)と云ひまた「田舎牧師」とも云ふ。すべて三十項より成り、牧師の生活知識、副知識、祈禱、説教、家居、祝儀、慈善、慰問、書齋等牧師の心にかくべきあらゆる事を網羅したり。彼は牧師の生活に於て特に警戒すべき誘惑は精神的高慢と心の純潔を缺ぐ二つの事なりと云ひ、説教につきては第一の性質は聖と云ふことにして、博學、雄辯、機智にあらず、すべての言を口に出だす前に先づ之を我等の性情に浸すべしと云ひ、牧師の妻たるものゝ務は第一に子女を教育して神を畏るゝことを學ばしむること、第二に怪我や痛あるものに應急の手當をなす方法を知れること、第三に夫を負債に陥らしめず又適當の給養を缺かざること、又子兒をして夙くより慈善の行を爲さしむべきことを教へたり。其の外一々紹介する餘地なけれども、要するに謹嚴の精神に満てるとともに決して消極的ならず。たとへば牧師の知識と題する章のうちに云へり「田舎牧師

は萬般の知識に充てり。漫に石を棄つるものは良工に非ず。苟くも巧なる手を以て運用せんか正面より用をなさずとも之を用ひて他の知識を説明するを得べし」と。彼は佛蘭西語と伊太利語と西班牙語とを完全に解し得たり。今日に生れしめばオイッケンやベルグソンを讀みしならん。

由來信仰的の書を著したる人は多く積極的の人なり。ハアバートの著作の一は諺を集たるものにして名けて *Jaenla Prudentium* と云ふ。面白きもの少からず、知慧奇警を愛せし人なりしを見るべし。彼は陰氣なる人にあらず。もし彼の著作に陰氣なる所ありとせば、そは自ら責むること嚴格なると、人生の苦み惱に對して同情深かりしによるならん其の詩集のうち「惱み」(Affliction)と題したるもの五篇あり。彼自ら亦人生の悩みを知りし人なりき。死の近きし時親しき友に語つて云へり「彼は親しき友を有したる人なり」「親しき友よ余が慈愛深き神の御前に捧げ得るものとは罪と惱とのみなるを悲しむ。前者は既に

赦されたり、數時間立てば後者にも句點を施すべし。」其の友人彼が一生の間なせし善き事の若干を擧げしに、ハアバートは答へて云へり「之を基督の血に浸しなば初めて善き業とならん」。

ワルトンは其の美しき傳記を結んで曰く「彼は是の如く生き是の如く死ねり。聖者の如く世より汚れず、慈善の行に満ち、謙遜に満ち、有徳の生活のあらゆる模範に満ちたり。」

この卒業式の夕、ヂョルヂ、ハアバートが就職式のすみし夕親しき友に語りし言を以て卒業生諸君に饒せしめよ。曰く「教職にあるものの徳ある生活は之を見る人をして敬愛せしむ、少くとも彼の如く生活せんと欲する人を動かす最も力ある雄辯なり。余は之を事とせん、何となれば我等は教訓よりも善き實例を要する時代に生くるを知ればなり。」今日の我が國は教訓を要すること少なきにあらず實例を要すること更に多き時代にあらずとせんや。(二・六・東京神學社) (卒業式講演)

人格的感化の秘密

アリス・フライマン・バアマアの傳を讀む

近頃米國の一友人より受けたる手紙の中に「君若し今も米國の事物と接觸を保ちつつあらんとせばアリス・フライマン・バアマアの傳を讀まざるべからず」と。其の前後一二の友人より此の書に就て推獎の語を聞きしもありければ此の頃閑を偷んで此の書を讀めり。興味盡くる所を知らず、二三日にして讀み了れり。著者はハアバアド大學の教授デヨオヂ・ハアバアド・バアマア博士にして書中に傳へられたる人物は即ち其の亡き妻なるなり。余は四五年前米國にありし頃一度バアマア教授の講演を聴くの機會を得たるが、其の紳士的なる風采と學者らしき頭顱今尙ほ眼前に髣髴たるを覺ゆ。今や此の書を讀んで眞の紳士の筆によりて眞の婦人の描されたるを見る。夫なる人妻の傳を著す我國に於て

は例少き事にして又試み易からざる業なるべし、然るに此の書の如き極めて淡泊に單純に然かも品良く、總ての點に於て適度を失はざるを見る。此の如き人ありて又此の如き書あり。北米合衆國も未だ全く物質化したる天地にはあらず。

先づ此の婦人の一生を略記すれば、彼女は千八百五十五年二月十二日ニウヨオク洲のコオルスピイルと云へる田舎に生れたり。父はスコットランド人の血統を受け、強健にして且つ至つて親切なる人物なりき。アリスは母が十七歳の時生れたる初兒にして四人の妹相踵ぎて生れたり。家は貧しかりければアリスは幼時より家事の手助を爲し數多き妹の爲に小さき慈母の役を務めたり。アリスの生れし頃父は農業に従事せしが、醫者と爲らんことを思ひ立ち、アリスが七才より九才に至る二年の間アルバニイの醫學校に入りて醫學を勉強したり。此の二年の間女の手一つにて四人の小兒を養育し加ふるに夫に修學の費を送りたる母の苦勞一方ならざりしなるべく如何にして貧しき中に之を爲し得しか驚く

人格的感化の秘密

べき事と云はざるを得ず、父業を卒へて歸るに及び家計もやや改まり、且つ職業の關係より其の郷閭の間に善き事を爲し得る事となれり。此の人又長く其の地の長老教會の長老に擧げられ、信仰厚き夫婦なりしことも記せざるべからず。アリスは此の如く幼少の頃より貧しき家に生長して人生の現實と接するの機会を與へられしこと、殊に醫者の娘としては人の病み苦しみを^{いた}見之を勞はる心を養はれしこと、田舎に生長して自然の美を愛する情緒に富みしこと等は其の人物を造り成せし大切な要素なりき。父は醫者を開業して後日ならずして近傍の小都會なるウインヅルに居を移せり。此處にはウインヅル、アカデミイと云へる學校ありて小學校よりは程度高き課程をも教へたり。アリスは十一才の頃此の學校に入りフランス語、ギリシャ語、ラテン語、數學など學びたり。此の學校を卒へし上は更に進んで大學の教育を受くるの志を立てたり。父母は之に反對し兒女多き中にて且つ男の子も生れしことなれば唯一人の娘にのみ高等教

育を愛けしむるの不可能なるを説きしもアリスは若し己れに大學の教育を受くることを許されなば卒業後結婚することなく、弟をして大學を卒業せしめ他の妹にもそれぞれ好める教育を授くる費用を負擔すべしとて切に乞ふて止まざりければ、父母も遂に其の精神に感じ十七才にしてウインヅル、アカデミイを卒業したる後は大學に入るを許すこととなれり。當時女子大學と稱するに足るものは至つて數少なく男女共學の制を實行せる大學も亦稀なりしが、ミシガン大學のみは其中にて最も有力なる者と聞えしかば、アリスは千八百七十三年父に伴はれ遙々と西に旅してミシガン大學に入學することとなれり。入學の頃には學業の資格稍々不充分なりしかど校長アンデルと云へる人彼女と語りて其の才智あるを愛し特別に入學を許せしが元來記憶は好く敏捷なる性質なりしかば、日ならずして群を抜くに至りぬ。加ふるに其の性質寛大にして妬みの心少く同情厚く且つ快活なる氣立の人なりしかば齡は同級の女學生の中にて最も若かり

しかど何時しか其の首領と推さるる様なりき。日曜日には二度禮拜に出席し日曜學校を教へ其の外宗教上の集會に出席することを勉めたり。學校に於ける彼の境遇は決して平坦なるものにあらずき。兩親より送り來る金は費多き大學の學費を充たすこと難く且つ一家の生計も不慮の損失の爲に困難を加へ來りしかば、孝心深きアリスは斯くても尙ほ大學の勉學を繼續して兩親の重荷となるに忍びず、在學三年の後、校長に乞ふて小學の教師の地位を求めたるが、イリノイス州のオタワと云へるに聘せられて行くこととなれり。かく卒業せずして學校を去りしかど後時々機會を求めて學校に歸り五年の後 Ph. D. の學位を取れり。其の翌年ウキスコンシン洲のゼネバ湖畔にあるゼネバ湖女學校に招かれて其處に轉じギリシャ語ラテン語など教へたり。俸給は一年八百弗を受けしかど三百弗は妹エラの教育費に送り其の外ステラと云へる妹の重き病にかかり遂に死せしことなどありて其の入費等少からずアリスも不自山勝の生活を續けた

り。ゼネバ湖女學校に移りたる翌年又北ミシガン洲に在るサキナウと云へる女學校に移りて此處を監督することとなれり。此の時妹のエラは學校を卒業せしかば二人共に同じ學校に教授し、困める兩親をも其の地に招きて之を扶養し、又大學に入れる弟に學費を送るを得たり。此處に在ること二年にして彼の女は更にウエレスレエ女子大學に招かるることとなれり。これ彼の女が最大なる活動を爲す舞臺なりしなり。

抑もウエレスレエ女子大學は米國の女子大學中、錚々の名ある學校にして、千八百七十五年の創立に係れり。創立者はヘンリー・フォール・デウラントと云へる人なり。此の人は法曹家として成功したる人なるが有望なる男兒の死に逢ふて感ずる所あり、法曹の社會を退き殘年を公共慈善の爲に費すことに決し殊に女子教育の急務なるを思ひ、ボストンの西十五哩なるウエレスレエと云へる土地に森あり小山あり湖水の眺ある己が所有地に女子大學を建設したり。又

常に創立者なるのみならず、實際上校長として萬般の事を統率し宗教的精神を以て基礎を据えたり。アリス・フリーマンが聘せられて此處に來りしは僅に二十四歳の頃にして専ら歴史を教授せしが其の後二年創立者デウラント死するに及び彼女は擧げられて副校長となれり。デウラントの生時より此の大學の校長はハワアド嬢と云へる人なりしがデウラントはアリス・フリーマンの來りし年理事員の一人に向つて「君は彼の少なき黒眼勝の少女を見たまひしや、ウエレスレエの二代の校長たるべき人は彼女なり」と云ひし程ありて、名は副校長たれども實は校長の地位に進みしと同じかりき。これ彼女が二十七歳の頃なりき。翌年は愈々校長の椅子に坐することとなり、千八百八十七年結婚して職を辭するに至るまで七年間此の名譽ある地位を占めたり。

校長として彼女が偉大なる創始力を發揮して創立者の精神を維持しつつ着々新面目を開きし次第は遺憾ながら之を記するを得ず。又彼女が如何なる感化を

及ぼしたるかば後段に譲り先づ其生涯の履歴を語り終らしめよ。バアマア教授との交情は同教授がウエレスレエにて講演を爲せし頃に始まり次第に深く相識るに至り千八百八十七年結婚してハワアド大學の所在なるケンブリッヂに家を成すに至れり。此の前後彼女も亦其の夫たるべき人も種々なる困難なる問題に接したり。彼女の如き社會に立つて大なる事業を爲しつつある婦人を單に一家の主婦となすは不當なることなりとは或る人々の間にありし感情にして、實際ウエレスレエ大學が此の人を失ふは大なる損失なりしかば種々絶ち難き情實ありしも無理ならず。されどバアマア博士はあまり健康ならざる彼女を永く繁劇極まる地位に置くの無情なるを感じ、又大學に於て彼女の爲し得べき經營は既に略ぼ形を成したれば今は後繼者に委ぬるも不可ならざるを見、妻としてアリス、フリーマンを迎ふる事を恐れざりき。かくて名聲赫々として米國の教育界に轟きたるアリス・フリーマン校長は三十二歳にしてバアマア夫人となりぬ

夫人も亦頗る自然の事なるかの如く心安く境遇を變へたり。前半生の多忙なる境涯に代へて比較的安靜にして餘裕ある生活を送り、智識的の空氣の濃厚なるケムブリッジの社會の一光彩となり、或は夫妻相携へて歐羅巴に旅行し或はボックスフォールド(ポストンの北二十五哩)にある別墅に退いて田舎の生活を樂みたり。かかる間にも彼女はマサチュセツト洲の教育會の評議員となり婦人内國傳道會社の社長となり其の外種々なる重大なる活動に與りて其の相談役となり又個人的の交際によりて大學の校長時代に遜らざる大なる感化を及ぼしたり。千九百二年バアマ博士休暇の年に於て偕に外遊を試み巴里に滞在中國らずも病にかかり客舎に於て世を去れり。齡四十七歳。

アリス・フリーマン・バアマの生涯に於て最も著しく顯れたるは彼女の人格より發して他の人格に及びたる感化に在り。學問の才あり、讀書の嗜好深き人なりしも、書を著さず、演説の草稿の存するものも少く書きしものは唯數篇

の詩、讚美歌と數知れぬ手紙あるのみ。其の活動は全く人の爲めに捧げられ其の興味は専ら人に向つて注がれたり、彼女は至つて單純にして近づき易く普通の事物と普通の人民に興味を有し何等深遠なる所ありと見え又他人を自己の模型の内に鑄造せんとするの痕なかりき。然れども彼に接する人、彼女が其の冴えたる眼を注ぐ人は元氣付けられ、清められ、新らしくせられて去らざるものなし、其の演説するや一種の磁石力ありて之を聽く者を魅する力あり。彼女のある所に毎朝の禮拜に一種の生命あり。在らざる處寂寥あり。ウエレスレエの學窓にありし學生が聖書の或る節を讀み或る讚美歌を聽くときにアリス・フリーマンの音容を憶ひ起さざる者なしと云ふ。彼女の祈りは亦頗る力あるものにして其の聲は熱心と洞察と己を忘るる誠を以て鼓動せる如く聞かれたり。聖書に關する智識も豊富にして事に應じて引用自在なりければウエレスレエ大學の女學生はフリーマン嬢の持てる聖書は普通の聖書と異なる如く感じ居りしと

云ふ。これ如何なる場合にも適切なる語を其の中より引き出し得たればなり。然して彼女には一種犯しがたき威厳も備はりたり。ウエレスレエ大學の上級生の一人に毎朝の禮拜に遅れ勝なる者ありけり。一日校長初め生徒一同着席して校長は讚美歌の番號を言はんとせるとき其の學生は戸を排して入り來れり。校長は眼を其の學生に注ぎて入り來りしより席に着くまでジツト見成りしがやがて其席に着くを見るや、今讚美歌の何番を歌はんとて「今」の一字に力を入れて言へり。其より後其學生は時刻に遅ること無かりしと云ふ。又或る一人の少女初めて學校に入り戀郷の思ひ堪へ難くひとり庭樹の傍に立ちて悲しき思に沈み居りしが數人の人々打ち連れて語りながら行き過ぎたり。其の中の一人は年若く美しき婦人なるが、語りながら親切なる眼を留めて此方を見遣りたり。其の少女は新らしき生命の流れ來る如く感じ、かかる人と偕に在りなば何處にても淋しからずと思へり。翌朝禮拜堂に行きけるに同じ婦人の坐し居るを見て何人

なるやを問ひしに傍に在りし者彼人こそ校長なれと答へたり。其れより後戀郷病は全く癒されたりと語れり。

此の如き驚くべき感化の源は何處に在るか其の大半は無意識の間に發露し來る力にして川の自おのづから流るる如く花の自から香る如く其の人自から識らず、他人も亦之を説明し得ざる領分多きを占むることは疑ふべからず。彼女の夫たるバアマア教授は云へり「ここに余の説明せんと欲せる深秘なる或物ありき。然かも余は之を説明する能はず。蓋し天才なるものは説明し得べからざるものならん。彌々之を詮索すれば彌々驚くべきものと見ゆ。十五年間偕に棲みしかどこの不思議なる機械の動力は余に示されざりき。彼女は依然として一個の驚異なりき。」然れども感化力の一半は勉めて之に達し學んで至るべきものなしとせず。彼女が初めて大學の副校長として擬せられしとき齡尙ほ二十六歳にして教授の中最も年少なりしかば他人も驚くべく彼女自身も意外に感じたるなり。普

通の人ならば、先づ老成の先輩を訪ふて意見を聞くべきにフリーマン嬢は己の室に歸るや先づ上級生一同を招きたり。然して今日副校長として推薦せられし旨を告げ、若し上級生なる諸君にして余を助けて此の重任を果さしむるの意あらば余は之を受くべきも、然らざる限りは到底之を諾し得ざるべしと語りしに上級生一同は其の場に於て充分に校長を助くべき意志を表明して其の就職を請へり。此の一事は彼女をして多くの不利なる嫉妬と妨害より免れしめたり。又或時學生の間に怠惰なる風行はれ禮拜堂にて讚美歌を歌ふとき起たずして歌ふもの多かりき。一同フリーマン嬢はユウモアを帯びたる調子にて「いざ我等起ちて第二十三番の歌(起てよいざ起て云々)を歌ふべし」と。此の後は一同起立して歌ひ其後復た座して歌ふ者なきに至りしと云ふ。

此の如きことは寧ろ伎倆ゲットに屬すべきものなるが、或る人嘗つて彼女に問ふて云ふやう「君は我が知れる人の中にて最も伎倆ある人と思はるゝが、如何にし

て此の如き伎倆を得べきや教へて給はれ」と。フリーマン嬢は曰く自分にはとても斯かる伎倆あるにあらず、但ありたく思ひ又試みたることもあり。年若きとき學びたる一人の教師伎倆の必要を説き、之を得んとせば最も良き道は我等の接觸せる人の事に一層深く注意するに在りと云へり。他人どもに事を爲す際には我等が最善と知れる道を譲り、彼等の最も好む道を取らしめなば反つて目的を達することを得べしと云へりとぞ、實にアリス・フリーマンは四人の妹の姉として彼等を世話せし昔より其の一生を通じて最も力を用ひたる所は思想に非ず、事業に非ず、人なり。人を善くし、人を幸福ならしめんとする是れ彼を動かしたる最大の動機にてありき。其の書きし手紙も盡く個人的事に關し公にし得べきもの少しと云ふ。彼の伎倆は同情より發したるものにてありき。ボックスフォールド(バアマア氏の別墅の在る所)に一人の貧しき婦人ありけるが、一日門に立ちて夫の歸りを待てり。バアマア夫人其處を過りて常の如く歩みを

停めて語りしが、其の婦人は夕飯のスウプを煮かけありて農夫が燕菁を持ち來るを待ちつつある所なりと語れり、バアマア夫人は別れて去りしが程なく手に燕菁を携へて歸り來り、スウプを完成するを得しめたりと云ふ。同情は管に伎倆の秘密にてあるのみならず、又智慧の秘密なり。夏のことなりき、新たに結婚したる婦人ボックスフォルドに來れり。夫人は之を音づれて種々結婚式の様子等を尋ね、新たに造りたる衣裳を見せて給はれとて、彼是と衣裳の美はしきを喜び見たりしが、見了りて扱て云ふやふ「此の土地に在る中度々は之を着けぬ様にせられよ、田舎にては質素なる着物ならではあまり他の人との間に隔てを生ずる恐あり」と云へり。又面白く思はるゝ一つの話あり。夏休みの中ボストンの貧民窟にて毎朝開かるゝ學校ありて、貧兒に讀書音樂等を教ふる計畫なり。バアマア夫人も毎週一度避暑地よりボストンに來り貧兒を教ふるを樂みたるが、或日「今朝は何の事を語るべきか」と一室に群れ居る兒童に問ひしに、一

人の少女は「生命のことの就て教へて給はれ」と云ふ。夫人は「其はあまり大なる題目なり、他に何か聽きたきこと無きや」と問ひしに、膝の上に大なる嬰兒を抱きたる少なき色蒼ざめし小兒は「如何にせば幸福にあるべきかを語りて給はれ」と云ふ。夫人の眼には涙ありき、「好し然らば幸福なる道を卿等に教ふべし、之に就きて三つの規則あり、一週間の間此の規則を守り一日も怠らぬ様約束すれば之を語らん」と云ひしに、皆聲を揃へて約束せり。「然らば」とてバアマア夫人は三つの規則を語れり。第一は日々何等かの善き事、即ち聖書の一旬にても又詩の一行にても暗記すること、第二、日々何等かの美しき物を見出すこと、第三、人の爲に毎日何事か爲すこと、是なりき。次の週間に小兒等の爲せし報告こそ面白けれ。第二の美はしき物を見出すべしとの答として或る者は、雨垂れにて水浴する雀なりと答へ、或者は嬰兒の髪こそ美はしきものなれと答へたるなど詩的なりと云ふべし。

久しく家庭を離れて学校の食堂にて食事せし彼女は家庭の主人となりて後は好個の妻君なりき。彼女は美味きパンを焼けり。料理に巧なりき。帽子衣類等新しく注文すること稀にして、良品を選び親から手を下して幾度か造り更へ、己の趣味に合ふものとなすを誇れり。「教育てふものは前にせざりしことを爲し得さしむることなり」と云へり。下婢に對しては別けて親切なりき。或者は十年も繼續して召使はれたり。其外夫人はケンブリッジに於ける良き社會、得難き交友を尊重する念深かりき。然ればシカゴ大學創設せられしとき、ハアバア總長はバアマア教授夫婦を聘せんとして懇切を極め、俸給の如きも三倍の増加あり得べき筈なりしも、バアマア夫人は舊き關係より離るゝを好まず、切に夫に勸めて之を辭することし、たゞハアバア博士の懇請を無にせざらん爲に三年の間時を限りてシカゴに行き婦人部の經營の爲に助力することを諾したり。終りに彼女の信仰上の事に就て云ふ所なかるべからず。彼女は平生の談話の

際宗教上の事に就て語ること少かりき。まして論ずることは更に稀なりき。然れども人の爲に盡し、人を救ひ、人を幸にするを以て最も大なる事業とせし主基督の精神は日常の生活を支配せり。彼女は生涯は始より悲哀煩勞の多き生涯にてありき。兩親姉妹の爲に重荷を負へり。其の手紙を見れば悲みと疲れとを訴ふるの情惻々として人に觸るゝものあり。大學校長たる數年の間別けても年若き身に山の如き重任を負担したることなれば一方ならざる勇氣を要したり。然して彼女は母系より肺病の傾向を遺傳し、妹の一人は之が爲に斃れし事なれば、世に在る日長からずとの感じは常に胸中に伏在して彼女を親切に又嚴肅ならしめたりき。其の信仰は自から力の源にして慈愛の保護者なる神に依るの情となつて表れざるを得ず。聖晚餐の讚美歌として作りし歌に曰く、

「我が神よ汝と偕にある處、

如何に美はしく靜なるよ。

汝の天の秘密、汝の恩恵の
我に觸るをばこゝに待つ。

親しき主よあこがる、

我が心を充たす汝の道どさまざまなる。

汝の愛らしき世界あり、汝の語り給ひし言あり。

汝の美はしき聖意みことばを爲し、

汝の小兒等に活ける麵包を與へ、

かよわき者を導きつ、

懐しき手を頭に置かれ、

去りにし人を偲ぶなど、

親し君よ導きたまふ道異なれど、

何れも君の道にこそあれ。

次の聖餐の日來るまで

願くば我が地を天となさしめよ。

實にこれ餘地ある宗教なり、健にして感深き心靈に宿れる信仰なり。一篇の美はしき傳記讀み來りて尊敬と同情の念ともに動き、眼前に残るは、成功せる女子大學の校長にあらずして人生の眞味に觸れ基督の精神に養はれたる氣品ある女性の姿なり。その傳記を包める芳芬は神の御園に育ちたる花の香りなるを感せざる人あらざるべし。

保羅の自傳

一、生ひ立ち

保羅は固より自傳を書いたことはない。爰に自傳と云ふのは其の書翰のうち
 に散見して居る自傳的文章をいふのである。其れてさへ仔細に其の驚くべき
 一生と其の經驗を物語つた處はないが、宛がら龍の雲間に躍るが如き勢がある。
 其れを綴り合はせて自ら書きたる此の偉人の一生と其の經驗や心事の一斑を覗
 ぶのは愉快にして且つ益ある業である^{わざ}と信ずる。固よりこれは一般の讀者の爲
 に物したものであつて解り易いを主とする、何も新しい研究を發表すると云ふ
 譯のもてない。然かし西洋の學者の書いたものでまだかう云ふ風な趣向の書
 物を見たことはないから翻譯ではない。

「我は第八日に割禮を受けたる者にしてイスラエルの族ベニヤミンの支派へブル人より生れたるへブル人なり律法に由ればバリサイの人、熱心に由れば教會を窘迫もの律法に在るところの義に由れば玷なき者なり」(ピリヒ書三〇五、六)

「我れまた心を人よりも先祖等の言ひ傳へに熱くしユダヤ教に在りては我が國人のうち年相若しき人にまさりたり」(ガラテヤ書一〇十四)

保羅の生れた民族家系は是の如きものである。實に素性正しい家に生れ、雜りない血を受けて居ると云ふとは、人生の幸福の一である。素性が正しければ自然と品の良い所があり、嗜みがあるのである。保羅は生れて八日目に割禮を受けた生粹の猶太人であることを誇りとした。イスラエル十二族のうちでもベニヤミン族と云ふのは名譽ある種族であつた。ヤコブの十二人の子のうちヨセフとベニヤミンとは愛する妻ラケルの生む所であつて、約束の地で生まれた子はベニヤミン一人であつた。初めてイスラエル國の王となつた英雄サウロは、ベ

ニヤミン族から出て、後になつて國が二つに分れた時ユダ族とともに南王國を建てたもの、又バビロンから歸つて後ユダ族とともに建國の中心となつたものはベニヤミン族であつた。エステル記に載つて居るモルテガイと云つて同胞を救つた人もベニヤミン族の人であつた。パウロ原の名サウロは多分昔のサウロ王の名に因だものであらう。日本の昔の俠客などが男のなかの男といふことを傲つた如くパウロはへブル人から出たへブル人であることを誇つた。實際彼は希伯來魂を具へた人であつた。

保羅は天性熱烈な人であつた。人を愛するにも滿腔の熱情をこめて愛した、コリント後書の中に「我れ神の熱心の如き熱心を以て爾曹を念ふ」と書いてある(十一〇二)。又人が礙いたときにも之を傷んで心熱した。(同上十一〇二十九)。創世記にヤコブが其の子等の運命を語つた中に「ベニヤミンは物を噛む狼なり朝に其の所掠物を啖ひ夕に其の所攫物を分たん」(四十九〇二十七)とある。昔しテルトリヤ

ヌスといふ人は此は保羅の事を預言したものであると云つたさうであるが、兎に角此れはベニヤミン族の氣象の激しい事を云つたに相違ない。これを見れば保羅の熱烈なる天性は彼が屬せる種族の通有性であつたと見える。彼はその熱情を何處に用ひたかと云へば、「心を人よりも先祖等の遺傳に熱くし」とある。原文には「我が先祖」となつて居る。これはたゞ國の祖先と云ふ意味でなくして保羅の家の祖先と云ふ意味であらう。律法を嚴守する精神は先祖から受け繼いだ家風であつたと見える。「律法に由ればパリサイ人」と云ふのは律法を守る事にかけては嚴格を以て聞こゆるパリサイ宗の一人なりと云ふ意味である。さうして律法の文面を嚴守すると云ふ點に於ては完全無缺と思ふほど努力した。これだけ行と云ふ事を勉めた人であるから他日彼が人の救はるるは行によるでない信仰によると叫んだ言に權威がある。ルウテルでもチャルメルスでも矢張同じ道から新しい天地にはいつた。保羅は律法の効用を認めて居る。曰く「か

く律法は我儕をして信仰に由りて義とせらるる事を得しめんが爲に我儕とキリストに導く師傅となれり。」(カラテヤ書三〇二十四)

如何にして律法が彼をキリストに導く師傅となつたか。律法によつて罪と云ふ事が解ると云ふことを重なる理由と見て居るやうである。「律法を立てられし時より前に罪は世に在りき律法なくば罪は人に歸することなし」(羅馬書五〇十三)「律法を立てるは罪を増さんが爲なり」(同上五〇十二)「律法は罪なるや然らず律法に由らざれば我罪の罪たる識ることなし」(同上七〇十)など云ふ言に其の考が現れて居る。律法は管罪を知らするのみならず又「罪は誠の機に乗りて我を誘し其の誠をもて我を殺せり」(羅馬書七〇十一)と云ふ事も説いてある。斯くしてはならぬと云ふとして見たくなるのは人情である。規則は悪いものでないが、あまり規則づくめになると自由を愛する人の心は却て之に反抗するやうになる。而してしなればならぬからすると云ふてなくして已むに已まれぬ所から喜んでする

やうにありたいと思ふのは人情である。これが宗教と宗教のない道德と違ふ點である。保羅は大なる煩悶に陥つた。

「我れ内なる人に就いては神の律法を樂めど我が肢體に他の法ありて我が心の法と戦ひ我を擄にして我が肢體の中に居る罪の法に従はするを悟れり。噫われなやめる人なる哉。此死の體より我を救はん者は誰ぞや。」〔羅馬書七〇二二—二四〕

二、回 心

「この故に今より後我等肉體に依つて人を識るまじ我等肉體によりてキリストを識りしかど今より後は是の如く之を識るまじ」〔コリント後書五〇十六〕

保羅は曾て此の世に在りし耶蘇を見たことがなかつたか。これは非常に大切な問題ではない、又明な解決を與ふることは望み難いことであるが、興味ある問題たるを失はぬ。ヨハネス・ヱイスは「保羅と耶蘇」のうちに大分詳に此の問

題を論じて、保羅がエルサレムにある間耶蘇と云ふ人物を見たことがあるでなければ、彼のダマスコ途上で見た顯現も又回心も心理的に考へられ難いと云つて居る。ヱイスは又保羅が曾て耶蘇を見たことがなければ如何にして此れが耶蘇であると認識することが出来やうかと論じ、上に引いたコリント後書五〇十六につきて綿密な研究をして居る。蘇格蘭のラムゼエ博士は昨年十月の「エキスポジトル」誌上に載せた文章のうちにヱイスの意見に賛成して、自分は十年前、既に同じ意見を發表した事があつたが、爾來この問題を考へるほど益々其の重大な事が心に印せらるゝと云つて居る。モーフアットは「保羅及び保羅主義」と云ふ小い書物のうちに此の意見に反對して居る。我等に取つては孰れにしても大差は無いのであるが、保羅がエルサレムに學んで居る頃耶蘇がエルサレムに來られた事が數回もあれば彼を見彼の語るを聞いたことはあり得べきことであらうと思ふ。

それは兎も角、保羅は回心前には基督觀が全く間違つた居つた。メシヤと云へば昔のダビテ王のやうに赫赫たる威光を以てイスラエルに君臨すべきもののみ思ふて居た。其れに何ぞや基督者と呼べる、人々は地位もなく勢力もなく學問もないナザレの大工の子がメシヤであると信じ十字架にかゝつて死んで後までも之を神の子と崇むる、これほど愚なことはない、斯のやうな奴原の出るのはイスラエルの耻である。神聖なる律法を蹂躪するものであると思つたと見える。これ畢竟肉體の上からのみ基督を識つたからである。熱烈なる保羅は基督教迫害の急先鋒となつた。

「わが曩にユダヤ教に在りしとき行ひたる事を汝等聞けり、即ち甚しく神の教會を窘め且つ之をほろぼせり……されど我が母の胎を出てし時より我を簡えらひおき恩めぐみをもて我を召し給ひし神その子を異邦人に宣べしめんがため心に善として彼を我が心に示し給へる其の時云々」(ガラヤ書一〇十三—十六)

「われ神の教會を迫害せし故に使徒と稱ふるに足ざる者にして使徒の中に最い微ちひきものなればなり」(コリント前書十五〇九)

是の如く教會を迫害した保羅が一變して基督の僕しもべ、その使徒たるを此上無き光榮とするに至つたは如何なる譯があつたか。其の理由は、即ち彼が耶蘇を見たと云ふ一事に存する。彼は「我は我等の主イエス、キリストを見しにあらずや」(コリント前九〇一)と云ひ、又コリント前書十五〇四以下に耶蘇が復活して後多くの弟子に現れし事を記して後「最後に月足らぬ者の如き我にも現れ給へり」と記してある。復活せる基督彼に現れしによつて保羅の生涯一變したことを知ることが出来る。彼に現れし復活の基督は如何なる姿であつたか。

「光に命じて暗きより照り出でしめたる神我儕をしてイエスキリストの面にある神の榮光を知るの光を顯さしめんが爲に我儕の心を照したまへり。」(コ

保羅に現れた基督の面には神の榮光が輝いた居つた、始に想ふて居つたやうな見すばらしいナザレの耶蘇でなかつた。神々しい御榮が照り渡るやうな君であつた。これはひとり保羅ばかりの経験でない、基督を見出ださぬ中には基督と云つても尊い力ある方とは思はれず、昔イザヤの云つたやうに「われらが見るべき美しき容なく美しき貌はなく我等が慕ふべき^{みはへ}艶なしかれば侮られて人にすてられ悲哀の人にして惱を知れりまた面をおほひて避くることをせらるゝものゝ如く侮られたり、われらも彼をたふとまざりき」と思ふて居るのである。然るにこの力なく勢ない中に非常に尊い美しい所があるを見出すやうになつて来る、彼が苦しむ所に榮があるのである。然かし此の事はたゞダマスコ途上で基督を見たばかりで解るものでない、心の深い處に神から教を受けなければならぬ。故にガラテヤ書に「彼を我が心に示し給ふ」と云つて居る。又コリント後書に「心を照らしたまへり」とある。使徒行傳を見ると保羅はダマスコに入つ

て後三日の間目も見えず又飲食もせざつたと書いてある、この三日の間に彼は親しく神から教を受けたと想はれる。

「あゝ我れなやめる人なるかな」と叫んだ保羅は初めて言ひ難き平和を得た、信仰の歡喜に満たされた。

「我が主キリストイエスを識るを以て最も勝れる事とするが故にすべてのものを損とす、我かれの爲に既に此等のすべてのものを損せしかど之を糞土の如く思へり、」(ヒリヒ書三〇八)

保羅は何を失つたか。基督者と云へば當時背教者即ち國賊として罰せられて居る際であれば彼は地位を失ひ名譽を失ひ此の世に於てもてる總てのものを失つたに違ひない。殊に彼の家はバリサイ人に屬する家であれば、必ず家の人々から棄てられたであらうと想はるゝ。其の事は保羅に取りて、貧しく手の労働によつて日々の麵麩を得なければならぬ境遇に落ちたことを意味する。ラムゼエは

保羅がエペソ書にもコロサイ書にも「父なるものよ汝等の子を怒らすなかれ」と教へあるのは彼が父から受けた待遇の痛みから出た言でないかと想像して居るしかしこの間に於て保羅は神の恩と云ふことを深く思ふた。恩即ち「グレース」と云ふ言は信仰ある人には一種の音楽である。

「我かくの如くなるを得しは神の恩に由りてなり我に賜ひし神の恩は徒然か
らず我すべての使徒よりも多く勞めたり此は我にあらず我と偕にある神の
恩なり。」(コリント前書十五〇十)

三、回心後の十餘年

「其の時我れ直に血肉と謀ることをせず又我より先に使徒となりてエルサレムに在るところの者にも往かず、アラビヤに往き又ダマスコに返れり。三年を経て後ペテロを尋ねん爲にエルサレムに上り、十五日彼と偕に居りしが

他の使徒等には主の兄弟ヤコブを除きては誰にも遇ざりき。今我汝等に書きおくる所は神の前に説れる言なし。その後われスリヤ、キリキヤの地に至れり。」(ガラテヤ書一〇十六—二十一)

「ダマスコに於てアレタ王に屬る邑宰われを執へんとしてダマスコ人の邑を守れりわれ篋を以て牖より石垣にそひ縫下されて彼の手を脱れたり。」(コリント後書十一〇三十二、三十三)

カイザリヤ、ピリビに於てペテロがイエスに對する信仰を告白した時、イエスは之を稱讚して「ヨナの子シモン汝は福なり血肉なんぢに示せるにあらず天に在す我が父なり」と云はれたが、今パウロは「我れ直に血肉と謀ることをせず」と云ふ、此の裡にイエスの言の反響を聞くが如く感ぜらる。血肉と骨肉と云ふとは違ふ、人と云ふ意味である。此の時保羅の考のなかにあつたは血あり肉ある數限りなき人類でなくして、天に在す神と我が靈魂とあるのみであつた。日夜た

だ碎けたる靈魂を捧げて神から直接に教るゝ外はなかつた。彼は己の信仰に同情なき世間の人を眼中に置かなかつたのみならず、信仰の先輩とも云ふべきペトロ、ヨハネの人々に謀ることをだにしなかつた。乃ちエルサレムに行かすしてアラビヤに入つた。アラビヤと云つても随分廣い國であるが、保羅の往つたアラビヤは果して孰の部分であつたであらうか。ライトフットの如きはシナイ山であらうと云ふけれども、これは寧ろダマスコに近いアラビヤの砂漠の一部分であらうと想はれる。ダマスコからシナイ山までは随分道程も遠く且つ其の頃は戰爭の爲め道中危険であつたと云へば保羅徒に斯かる旅をすべしと思はれぬ。さて保羅が同心の後急いでエルサレムに上ることをしなかつたことは道理のある事と云はねばならぬ。假に今日ペトロ、ヨハネが我等の前に現れて基督一代の事につきて何か尋ねたいかと云つたとすれば、我等は果して如何なる質問を發するであらうか。大概の人は茫然たる事であらう。此の點を知りたい、彼の事は如

何に説かれたであらうかと云ふ事が明になるまでには餘程考へる必要がある、沈潜反復する必要がある。保羅はどれだけの間アラビヤに居つたか分らぬが、想ふにこの事をなしたであらう、且つ祈り且つ思ふて。アラビヤから歸つて再びダマスコに入つた。ダマスコは云ふまでもなく、彼が一生の行路の轉折點である。次に「三年を経て後」とあるを見れば三年の間ダマスコに留まつたと見える。ダマスコで其の間何を爲たか自ら語る所は無い、たゞコリント後書第十一章に「ダマスコに於てアレタ王に屬ける邑宰われを執へんとしてダマスコ人の邑を守れりわれ篋を以て牖より石垣にそひ縋り下されて彼の手を脱れたり」と云ふ一の事實を記してあるのみである。保羅は其の後復たダマスコに往きし様子なければ此の事實も此の時にあつたことと推し測られる。アレタ王と云ふはアレタ第四世であつてナバテアン、アラブの王であつた。紀元三十四年までダマスコは羅馬皇帝に屬して居つたが、其の後一度ダマスコがアラビヤ王の支配に屬し

た時代があつたと見える。アレタ王に關する事はないけれども大同小異の事實が使徒行傳第九章二十三節に傳へられて居る。「既に多くの日を歴した後ユダヤ人サウロを殺さんと謀りしがその計謀遂にサウロに知らる彼等は夜も晝も邑の門を守りて之を殺さんとせしに夜弟子たちを篋をもてサウロを石牆より縋下せり」とある。篋に載せて保羅をつり下した事は良く自傳と符合して居る。たゞ此方には彼を殺さうとしたものは猶太人であつたとしてある。然れどもこの記事が相容れざるものでない。保羅がダマスコに於て盛に傳道をした結果猶太人は彼に反對して騒動が大きくなつた。然してダマスコを支配して居る市長のやうな人の注意を引くことゝなつてこの人が平和を圖るため保羅を捕へやうとしたから彼は城壁に臨んで居る信者の家の牖から釣り下されて遁れたと見える。要するに保羅はダマスコに於て初めての傳道を試みたものと見える。

ダマスコを去つて後保羅は初めてエルサレムに上つた、ペテロに面會する爲

であつた。アラビヤで瞑想し、ダマスコで戦ひ、其の結果としていろ／＼ペテロに尋ねたい事も積つて居たし、且つは今の場合一身を處する道につきて相談もして見たく、多少の危険を冒してエルサレムに上つた。然してペテロと十五日偕に居つた。此の十五日の間兩人が語りし話を誰か筆記して今日に傳へたならば如何に面白からう。又想像に富んだ文士が此の一段の對話を復活させたならば随分面白いものが出来るであらう。

ペテロの外には主の兄弟のヤコブに面會したのみで保羅は故郷なるキリキヤに退いた、さうして此處で八年乃至十一年の年月を鳴かず飛ばすに送つた。保羅の盛な世界的傳道の時期の前には此の隠れたる準備修養の時代があつた事を忘れてはならぬ。此れは我等を勵す事實である。彼は兀々として道を傳へたに違ひない。定めていろいろの苦戦や煩悶があつたであらう。然れども神の慰めも亦多かつた。コリント後書十二〇二以下に「我れキリストにある一人の者を知れ

り此人十四年前に掣なづへられて第三の天に至る（或は肉體に在りしか我知らず或は肉體の外に在しか我知らず神知りたまふ）我この人を知る（かれ或は肉體に在りしか我知らず神知り給ふ）彼れ掣へられて樂園に至り言ふべからざる言即ち人の語るまじき言を聞き」とあり。これは保羅自身の經驗を婉曲に言ひ現したものであることは明である。保羅が外國傳道に出立してからコリント後書を書いた時分まで約十年であるから、十四年前と云へば略ぼキリキヤに隠れて居つた頃に當る計算になる。この淋しき勤勞の間に於て彼は肉體を離れたか離れて居なかつたか分らぬほど神秘靈妙なる經驗に接した。アウガスチンの「懺悔録」にもこれと類したやうな經驗が記されて居る。

四、エルサレム行

「十四年の後われバルナバと偕にテトスを伴ひて亦エルサレムに上る。我が上りしは黙示に循へるなり異邦人の中にて我が宣べし所の福音を被告に告げ又私に名ある人等に之に告げたりそは今勤むる所又既に勤めし所の事の徒然ならざらんが爲なり。我と偕に在りしテトスはギリシヤ人なるにほ強ては之に割禮を受けさせざりき」〔ガラテヤ書二〇一—三〕

ここに十四年と云ふはパウロ回心後の十四年なるか、或は回心後三年にしてエルサレムに上つた年から算して十四年であるか。ライトフットの如きは後の方の計算を取るが、余は寧ろ回心後十四年としたい。

此處に記さるるエルサレム上京は使徒行傳十五章に記されるものと同一事であるや否、ラムゼエは別の事となし、使徒行傳十一章になるエルサレム行と

同一事であると解するが、その説は多くの學者の賛成せぬ所である。矢張第十五章にある上京であるとする方が穩當であると思ふ。果して然らば使徒行傳と對照すれば其事實を詳にする事が出来る。

問題の中心は異邦人にして基督教を信じた者には割禮を受け舊約の律法を守る義務を負はしむべきかと云ふ點にあつたと見へる(使徒行傳十五〇一)。果して然らば基督教が猶太教の皮殻を脱して世界的宗教たる性質を鮮明に發揮すべきや其の運命の岐れ目であつて、パウロが最も苦しい戦をたたかふべき時であつた。或人はパウロの年少い弟子ギリシヤ人たるテトスに割禮を受けしめて事を圓滑にすることを勧めたが、パウロは強硬の態度を執つた。パウロに反對する人々の勢力もおさ／＼侮り難いものがあつた。ただ知己の友バルナバが何處何處までもパウロと行動を偕にした。コリント前書九〇六に「我とバルナバのみ云々」と記して居るが、一朝不和の爲に袂を分つて後も、バルナバとともにタルツ、

アンテオケ、エルサレムの間を往來した當時の交情は懷を去り難かつたであらふ。

「名ある者」と久ふ語が幾度か出て居るが、これには尊敬する意味はあつても貶す調子は少しも無いと説く人もあるが、さうは思はれぬ、所謂名士と云ふやうな風で多少輕した意味があるのは争はれぬ。然して所謂「名ある者」はヤコブペテロ、ヨハネの如き人と全く同じではないが、又全く別にはしてない。間違つて居るか知らぬが、パウロの性格の弱點がここに表はれて居るやうに感ぜらるゝ。かの名なる者より我は受けし所なし、彼等は如何なる人なるにせよ我に於て與る所なし神は偏る者に非ず彼の名ある者我に誨を加へしこと無きなり」との語の如き、まだ聖化せられぬパウロの聲である。これがなかつたならばパウロは其の一生の間如何に不必要な誤解や悪感を免れ得たであらうか。さてパウロとバルナバに對してエルサレムの使徒は如何なる態度を執つたか。

「また我に賜ひし所の恩を知りしにより柱と思はるゝヤコブ、ケバ、ヨハネも其の右の手を與へて我とバルナバに交を結べりこれ我等は異邦人に至り彼等は割禮を受けたる者に至らん爲なり。彼等ただ願ふ所は我等が貧民を眷顧かへりみんことなり。我等も亦その事は素より進んで爲さんとする所なり」

(同上二〇、九、十)

流石に耶蘇の肉身の兄弟で當時エルサレムの教會を世話して居つたヤコブ、主耶蘇の薫陶を受けたペテロとヨハネだけあつて、寛い心を以てパウロを迎へた。然してパウロの行動を束縛することなく自由な活動の天地を與へた。パウロの主義に忠なる精神と、使徒等の基督教的の愛心は相待つて、基督教會に悲しむべき破裂を來さず、危機を通過することを得せしめたことは千古の下我等の感謝すべき所である。

五、パウロとペテロ

「ペテロ、アンテオケに至りしとき彼に責むべき所ありしに因り我れ當面まのあたり之を詰めたり。そはヤコブより來る者に未だ至らざる前にはペテロ異邦人とともに食したれども彼等が至るに及びて割禮を受けたる者を懼れ退きて異邦人と別れたればなり。その餘のユダヤ人も彼と偕に偽の行を爲しバルナバも遂に其の偽の行に誘はれたり。我彼等が福音の眞に遵ひ正しく行はざるを見、すべての人の前にてペテロに曰ひけるは、ユダヤ人にして若し異邦人の如く行ひユダヤ人の如く行はざることは何ぞ異邦人を強いてユダヤの例に遵はせんとするや(ガラテヤ書二〇十一―十六)

凡そ思想の變遷の急激な時代には其の間非常の難局に立つ人を生ずる。ここに一種の悲劇がある。アンテオケに於けるペテロやバルナバの立場はそれであ

つた。

多くの美質を見へたペテロに又頗る脆い所があつた、道德上の勇氣に於てや或缺ぐ所のあつたことは争はれぬが、この時の失敗は單に此の弱點にのみ歸することが出来ぬ。思想の過渡期に處し其の立脚地に於て未だ徹底する所に行かなかつた所から進退に惑ふたのである。

異邦の信者に猶太人と同じ律法儀式を守ることが求めぬとはエルサレム會議に於て定まつた所である。然れども此等を守らぬ異邦人と接するとき、猶太人の信者は如何なる態度を執るべきであらうか。例へば信者となつた異邦人と食事を偕にすべきであらうか。同じ基督にある兄弟であると言ふ點から云へば隔てをすべき道理なく又然かしたく思はぬのは自然の情であるが、翻て思へば基督の出でたる今日猶太の律法の時代は過ぎ去つたと云ふ鮮明な立場にまで進んで居らぬ。猶太人は基督者であつても舊約の律法の下にあるものとなつて居る。

ペテロをはじめバルナバ等までも異邦人と同じ食卓に就く事を避けなかつたこれは正しい事であるが、實は未だ徹底した見解から出たでなくして、寧ろ情に負け勢に驅られてここに至つたものである。この故に一方に保守的の立場の明なヤコブの方から人が來た時は少からず狼狽した。然して今まで敢てした事をしないやうになつた。苦境に立てる心事憐むべきである。

其處になるとパウロは流石に識見がある、勇氣がある。事の根本に徹底した見解がある。是に至りては進むのみ、退くべき時でない事を觀得た。諤々としてペテロの態度を責めた。能く急潮激湍の間に立つて進むべき方向を指示するだけの人物であつた。

パウロの偉大なる事は良く表れて居るが、又多くの敵を作る傾もここに見る事が出来る。後日バルナバとの阻隔或はここに兆して居るでなからうか。長者の風あるバルナバは之を容れたにしても、末流の中にはパウロを傲慢な氣にく

はぬ者と思ふた者が蓋し少くなかつたであらふ。

然かもパウロの争は私情から發したものでなくして、主義の爲の争である。よし感情の衝突があつたにしても、一時の事であつて、ペテロとパウロの間には深い了解があつた事と信ずる。ここにペテロの偉い^え所がある。二人は羅馬に於て略ぼ時を同じくして殉教の血を注いだと云ふ傳説は信すべきものと思はる。

六、傳道者

主福音を宣べ傳ふる者は福音に由りて生活せんことを定め給へり。然れど我此等の事は一をも用ひず又かくの如くせられん爲に之を書き遣るにあらず。そは我が誇る所を人に虚くせられんよりは寧ろ死ぬるは我に善き事なればなり。我れ福音を宣べ傳ふると雖も誇るべき所なし、已むを得ざるなり、若し我れ福音を宣べ傳へずば實に禍なり、若し我れ好て之をなさば賞を得ん。若

し我れ好まざるも其の責任は我に與れり、然らば我が賞は何なる耶、われ福音を宣べ傳ふるに人をして費なくしてキリストの福音を得しめ又福音に在りて我が有てる權を妄に用ひざる即ち是なり。(コリント前書九〇十四)

偉大なる人は自由なる精神を以て必然の責任を果たす人である。保羅が基督敎の傳道者となつたのは、爲ても爲なくつても可いと云ふやうな氣樂な話でない、彼自ら云つた如く已むを得なかつたのである。所謂已むに已まれぬ必然に驅られてこゝに至つたのである。彼がキリストに捉へられたと云つたのは即ちそれである。彼は「異邦人の爲にキリスト・イエスの囚人となれる我パウロ」(エペソ書三〇一)と云つた。この必然を發見し得たものは即ち人生の意義に徹した人である。

然れども保羅はこの遁れ難い責務を果たすに極めて自由なる積極的な精神を以てした。當然すべき事をして居ると云ふ點から云へば何の誇るべき所をもた

ぬやうであるが、たゞ其の責任を盡した仕方にも多少自ら誇るべき所があつた。彼は之を爲して毫も差閤なき事まで當然の權を棄擲して用ひなかつた。ペテロや主の兄弟ヤコブは妻をもつたけれども保羅は家庭の樂を犠牲にした。傳道するものは傳道によりて衣食する權利あるを認めて居りながら自ら腕を働かせて衣食を得た。

「兄弟よ汝等汝等の勞と苦を知る汝等のうち一人をも累せざる爲に夜晝工をして神の福音を汝等に宣べ傳へたり」(テサロニケ前二〇十)と云ひし如くである、彼は夜も晝も勞働したものと見える。

必ずしも斯くしなくても濟む事であつて保羅が自ら好て爲た他の一の事は他人の未だ手を着けぬ處に道を傳ふるを方針とした事である。「且我れ慎みて他人の置きし土臺に建てじとイエスの名の未だ稱へられざる處に福音を宣べ傳へたり未だ彼に就て傳を得ざる者は見るべく未だ聞くを得ざる者は悟るべしと録さ

れたるが如し」(羅馬書十五〇二十、二十一)異邦人に教を宣ぶる使徒たる事は彼が授けられた使命であつたが、此の責任に一種の色彩を附けて前人未開の原野を開拓すると云ふ方針を立てた所に彼の潑瀾たる氣象は現れて居る。

然かし此の方針の爲に困つたこともあつた。羅馬の都に傳道することは彼が年來の素志であつたが色々の故障があつて其の志を達することが出来なかつた(羅馬書十五〇二十二)其のうちに天下の都は諸國の人の集る處であるから誰が傳道するとなく其處に教會が出来た。未開の原野でなくなつた。保羅は如何にすべきであらうか。新しき畫策沸が如くであつた彼は容易に活路を見出だした。羅馬の信者に書を贈つて「我年來汝等に往かんことを願へる故にヒスパニヤに赴かん時に汝等に就るべしそは過ぐる時に汝等に遇ひほゞ意に満足ことを得て又なんぢらに送られんことを望めばなり」(十五〇二十四)云つた。彼は態々羅馬に行くのではない、百尺竿頭一步を進めて西班牙まで行かう、道の序に羅馬に立

ち寄るとした。方針に縛らるゝてなく方針の爲に歩を新しい天地に進めた知慧は我等の學ぶべき所である。

斯の如くして保羅は歐羅巴の重なる都會に傳道したが、其風采堂々として人を壓する概あつたかと云ふに必ずしもさうでなかつたやうである。或る人は譏つて「其の書翰は重く且つ嚴しく其の會へるときの容は儒く其の言は鄙し」と云つた(コリント後書十〇九)。ガラテヤに傳道した時の事を語つて「汝等を試みる者の我が身に在りしを汝等は卑めず又厭ず」(ガラテヤ書四〇十四)と云つたのを見ても彼の風采が人を引き着ける力に富んで居なかつたことがわかる。使徒行傳十四〇十二を見ればバルナバの方が保羅より立派であつたことを想像せらる。且つ彼は非常なる勇氣の人であつたが感情も鋭敏であつた故に、畏を感じることもあつた。初めてコリントに往いた時には「弱く且つ懼れ又た多く戰慄けり」(コリント前書二〇三)とある。斯かる時にキリストは幻の中に彼に語つて「懼るゝ勿

れ黙せずして語るべし」と云つて彼を勵し給ふたと見える(使徒行傳十八〇九)。「キリスト我を助て異邦人を順はしめん爲に休徴と奇跡の能と神の靈の能を顯し言と行を以てエルサレムより偏くイリルコに至るまで其の福音を傳へさせ給ひしそのほかは一の言をも我れ敢て言はざるなり」(羅馬書十五〇十九)

七、悩みを知れる人

「我れ勞苦しこと彼等より多く、鞭れしこと彼等より夥しく、獄に入れらるること多く、死に遇ふこと屢々なり。又われは五次ユダヤ人に四十に一を減じたる鞭を受け、三度條にて撲れ、一次石にて撃たれ、三たび破船にあひ、一晝夜海にあり、又しばし旅路を經、且つ河の難、盜賊の難、同族の難、城の裏の難、野の中の難、海中の難、僞の兄弟の難に遭へり。又彼等に愈て勞苦つかれ、屢々寢らず、飢え渴き、しばしば食を絶ち、凍え

悩みを知れる人

裸なりしなり。此に言ざる外の事ありて日々我に迫る。即ち諸の教會の憂慮ばかなり。誰か弱て我れ弱らざらんや。誰か礙つまづきて我が心熱せざらんや。」(コ

リント後書第十一章二十三—二十九)

使徒行傳を讀むならば保羅が諸方に道を傳ふる間に幾度か艱難を嘗め死地を履んだ事が記してあるが、上に引いた自傳に照せば使徒行傳の記す所は猶ほ僅に事實の一端に過ぎないことが解る。此の手紙を書いた以前に保羅が獄に投せられた事實では使徒行傳にピリピであつた事が一回傳へられて居るが其の外まだ幾度もあつたと見える。カイザリヤや羅馬に禁錮せられたことは此の手紙より後であるから固より此の中に數へられてない。羅馬のクレメンヌは保羅は七回繯綫に遭ふたと書いてある。

死に遭ふた事と云へば前章に記した筐で釣りおろされてダマスコから遁れた事もあり、ルステラで石にて撃たれ人は最早死んだと思ふたほどになつた事も

ある(使徒行傳十五〇十九)又エベソに於ては非常なる難に逢ふたと見える。「我等がアジアに於て遇ひし所の苦を汝等が知らざるを欲まず即ち責めらるゝこと甚しくして勢當り難く生命を保たん望をも失ふに至れり且つ我等心の中に必死を定む是の故に己を恃まずして死し者を甦らす神を恃めり」(コリント後書一〇十)と書いてあるを見ても分る。又驚くべきはコリント前書十五〇三十二の「若し我れ人の如くエベソに於て獸と闘ひしならば何の益あらんや」と云ふ一句である。獸とあるは獸のやうな暴民の事であると云ふのが普通の解釋のやうであるが、これは文字通に獸の事でないかと疑ふ人もある。何しろ此の時の難にプリスキラとアクラの夫婦は生命を捐て、保羅を救ふたと見えて「我が命の爲に己の頸を劍の下に置けり」と記してある。(羅馬書十六〇四、余は羅馬書第十六章はエベソへ宛てた別の短い手紙であると云ふ説を探る)。又同じ章に「我とともに囚人となりし我が親戚なるアンデロニコとジュニヤ」とあるを見れば此の人々も保

惱みを知れる人

羅の連累と云ふ譯で禁錮せられたものと見える。無論保羅も獄に投せられたてあらう。今日でもエベソに「保羅の獄」と云ふ四角形の塔があると云ふことである。

鞭れた事を二種類に書き分けてあるが、四十に一を減じたとある譯は、申命記に四十以上扑つことを禁じてある(二十五〇三)からである。故に會堂で鞭つことは三十九で止めることが習てあつた。保羅自身も嘗ては基督者を會堂で鞭つたが(使徒行傳二十二〇十九)、今や鞭たるゝ身となつた。随分苦いもので此の刑の爲に死ぬるものもあつたさうである。それから條にて撲たるゝと云ふ方は羅馬人の刑罰であつて羅馬の公民權をもつて居る保羅の如き人にはそれを加へることを禁じてあるに係らずピリピに於て一回之に逢ひ(使徒行傳十六〇二十二)、其の外にも二回同じ難に逢ふたやうである。一度石にて撃たれたと云ふはルステラであつた事(上に引けり)を指すのであらう。

保羅が羅馬に送らるゝ途中地中海で破船した事はあるがこれも此の後の事であるから三度の破船は何處であつたことか能く分らぬ。其の中の一度は一晝夜海の上に漂ふた後助られたと見える。

彼は其外さまざまの難を數へて後、飢え渴き凍へ裸であつた事を語つて居る他の處にも「今の時に至るまで我等は飢え又た渴きまた裸また撻れ斯くて定め居る住處なく勞りて手づから工をなし言らるゝときは祝し窘らるゝときは忍び誚らるゝときは勸をなせり我等今に至るまで世の汚穢また萬の物の塵垢の如し」(コリント前書四〇十一―十四)と云つて居る。清少納言は法師は人には木のはしのやうに思はるゝと云ひしが保羅は世に於て汚穢と見られ塵垢と見られた。

「我いよゝゝ汝等を愛すればいよゝゝ汝等に愛せられず」とは保羅がコリント教會の人に向ひて滿腔の怨を述べたるものであるが、酬いられざる愛の怨幾度か熱血男子の骨を刺し胸を痛めた。彼が「すべての教會の憂慮」と云つたのは

惱みを知れる人

之れである。しかしこの事は別の章に譲りたい。然れども保羅はこの千辛萬苦の中に於て猶ほ生命を全うした。人生難處是安穩と支那の詩人の歌つた如くてある。「神すでに我等を此の如きの死より救ひ今また救へり後も亦我等を救ひ給はんことを望む」(コリント後書一〇十)。彼は艱難により練達を生じ練達によりて希望を生じた。加之此の辛苦の裡に於て能く道德上の純潔を維持し正を履んで怖れざる信仰があつた。「即ち多くの忍耐にも患難にも窮乏にも困苦にも責打にも獄に入るにも擾亂の時にも勤勞にも睡らざるにも食はざるにも貞潔いよひびことし知識と恒忍と仁慈と聖靈と偽なきの愛と眞の道と神の能と左右に在るところの義の武器を用ひ又榮耀、羞辱、悪名、令聞に由りて己の義を人に顯せり」(コリント後書六〇四―八)と云ふことが出来た。多くの人は艱難より來る苦と併せて、自分の仕方が義しくない疚い所があるが爲に苦むのである。然るに保羅は良心に於て苦む所がなかつた。これが彼の靈魂に彈力がある秘密であつた。

保羅は獨り苦戰した。然れども他人をも皆我が如くせよと索めなかつた。「今日われに聴くところの者皆此の縲紲なくして我が如き者とならんことを神に願ふなり」とアグリツバ王の前で叫だのは保羅の人物の大い所である。

八、人を懷ふ人

「兄弟よ我等暫時汝等に離れ居るこれ面のみなり心に非ず切に願ひて急ぎ汝等の面を見んとせり、是故に我等なんぢらに至らんと欲へり殊に我れパウロ之を願ふと二次なりしかどサタン我等を妨げたり我等の望また喜また誇の冕は誰ぞや我等の主イエスキリストの臨いよらん時その前にて汝等も此ものとなるにあらずや夫れ我等の榮と喜は汝等なり是を以て我忍ぶこと能はず獨りアテンスに留まることを意こころに定めキリストの福音を傳へ神と偕に働く我等の兄弟テモテを汝等に遺しとなりこれ汝等を固くし又汝等の信仰の爲

に汝等を慰め一人も此患難に搖されざらしめんためなり」(テサロニケ前書二〇七—三〇三)
 此れは保羅がテサロニケの教會に書き送つた手紙の一節である。人を懐ひ友を戀ひし丈夫の愛を見ることが出来る。

テサロニケは今はサロニカと云ひ歐羅巴土耳其に於ける第二の都會、地中海に臨める良港である。麥、羊の毛、綿、鴉片などを輸出し人口十二萬ばかりあつて次第に繁昌しつゝあると聞く。保羅は初めてヘレスポント海峽を渡り、ギリビに道傳へて次に此の地に來つた。「汝等知る如く我等さきにギリビにて苦みを受け又辱めを受けたり然れど尙汝等に至り我等が神に頼りて憚る所なく神の福音を大なる紛争の中にて汝等に語れり」(テサロニケ前書二〇二、以下單に前書)と云へる如くである。其の紛争と云ふは猶太人が市場に居る無頼の徒をかたらひ保羅と同行者シラスを捕へやうとした騒であつて、保羅は難を免れたのであるが、保羅を宿した主ヤソンと云ふ者は市の役人の前に引き出さるるなど酷い目にあつた。

序ながら記して置くが羅馬書十六〇二十一には我が親戚ヤソンとある。多分同じ人であらう。果して然らば此の人親戚の緣故で保羅の宿をして艱難を偕にした事が靈縁まで深くして信者となり羅馬書を書いた時分にはコリントに來て居たと見える。

保羅は至る處已に仇する同胞國人の仕打を憤らざるを得なかつた。「ユダヤ人は主イエスと己が預言者たちを殺し又我等を窘めて逐ひ出せり、彼等は神の心に合はず且すべての人に逆へり」(前書二〇十五)と云ひ、又「彼等は己が罪を盈しむ神の極めて大なる怒彼等に臨れり」(前書二〇十六)と極言した、然れども憎むこと深き人は愛することが又齊しく深い。思へこれが普通の旅客であつたならば一層長い年月異郷の市に逗留したとして知己の友が幾人出來やうか。然るに保羅は其の足跡を印する處慕ひ慕はる多くの心友を見出した。人を結び合す福音の力絶大なるを見るべきと同時に、彼が如何に溫き性情の人であつたかを知

るべきである。實に保羅が其の信者を愛し懐ふ心は極めて厚いものであつた。曰く「斯く汝等を慕ひて、嘗に神の福音のみならず、己の生命をも汝等に與へんとを喜べり。これ汝等は我が愛する者なればなり」(前書二〇八)彼は戀人が互に慕ひ合ふ如く、日夜其の顔を見たいと思ひ焦れた。「切に願ひて急ぎ汝等の面を見んとせり」と云ひ、又「夜晝切に願ふは汝等の面を見んと汝等の信仰の足らざる事に補はんことなり」(前書三〇十一)と云つた。保羅は顔を見たいと云ふ事を良く云ふ人である。山川路遠くして往來の困難多き當時に在つては別けて相會ふ喜が深かつてあらうけれども、今でも訪れ訪れらるる喜を感ずること少い人は保羅の心事の一面を解し得ぬ人でなからうか。保羅は神に對してさへ「彼の時には面を對せて相見ん」(コリント前書十三〇十二)ことを待ち望んだのである。然しその心即ち基督の心であると信じた。ピリピの信者に書き送つて「我れキリスト・イエスの心を以て汝等すべてを戀ひ慕ふことに就て其の證をなすものは

神なり」(二〇八)と云つた。基督も牝鶏が雛を翼の下に集むる如く人の靈魂を引き寄せんと焦るる情熱をもつて居給ふた。

保羅は故障の爲にテサロニケを去つた後再度までも此地に引き返さんと試みた、されども「サタン我等を妨げたり」とある。此れは何を指したものであらうか。確な事は分らぬが、使徒行傳には「上官はヤソン及び其の餘の人々より保狀を取りて之を釋せり」(十七〇九)とある。多分今後保羅を此市に入れない宿をしないと云ふ意味の證文を書かしたかと思はれる。さう云ふ事が妨となつて市の長官が變らぬうちはテサロニケを訪問することが出来なかつたであらう。そこで彼はアテンスからテモテを使者としてテサロニケに遣はした。其の目的は信者の信仰の状態を視せしむるためであつた(前書三〇五)。其中保羅はアテンスを去つてコリントに傳道した。程なくテモテは歸つた來た。「シラスとテモテ、マゲドニヤより下りたる時パウロ、ユダヤ人に向ひてイエスのキリストなる事

を證し道を傳ふるに心を凝し居たり」と、使徒行傳に記してある(十八〇五)。彼は猶ほ猶太人を棄てないのである。己の友を愛するのみならず至る處に己に敵した輩を救ふ爲に力を盡した。さてテモテは歸つて如何なる音信を傳へたか。「今テモテ汝等より我等に來りて汝等の信仰と愛の嘉き音を聞せ又汝等常に我等を切に念ひ我等に遇ふことを欲ふが如しと告げたり。是故に兄弟に我等さまの禍と患難との中に汝等の信仰に因りて安慰を得たり」(前書三〇六七)。彼が人を懷ひ慕ふは弱々しい感情的の愛でない。九折なる山路に於て清水の有り難いを覺ふる如く、戰場に在る丈夫が故郷の便を待つ如く、苦戦の場、劇忙の裡殊に愛の慰を感ずることが深かつたのである。良く言葉を記憶せぬがバスカルが、愛は峻難なる生活のうちで最も多く全くせらるると云つたのは眞實である。

進んで讀め「そは汝等もし堅く主に屬けば我等之に因りて生くべければなり我等汝等の事に就きて我等の神の前に歡ぶ所の大なる喜により汝等の爲に如何

なる感謝を以て神に報んや」と實に字々紙上に立つ如く目の醒める文章である。「我等之に因りて生くればなり」との譯はまだ甚だ弱い。「我等今活く」とすべきである。然して神に捧ぐる感謝を以て終る。前に信仰と愛の音信と云つたが、基督教の信仰と愛の結合する處ほど大なる喜を與ふるものはない。この喜は天幕を造る保羅の寓居を天國とならしめた。

九、涙の勝利

「我れ大なる患難と心の哀痛いたみあるにより多くの涙を以て汝等に書きおくれり此は汝等をして憂しめんとするにあらず汝が汝等を愛することの深きを知らしめん爲なり」(コリント後書二〇四)「我キリストの福音の爲にトロアスに至り主己が爲に門を開き給ひしにわが兄弟テトスに遇はざるが故に我が心安からず彼等に別を告げてマケドニヤに往けり常に我等をしてキリストに在りて勝を得

しめ且彼を知るの香を我等をして遍く示す神に感謝す」(同上二〇二十四)……「われらマケドニヤに至れる時我等の肉すこしも安きことなく各様の患難にあひ外には争ひ内には懼ありきされど心憂ふる者を慰めたまふ神テトスの至るに因りて我等を慰め給へり。」(同上七〇五六)

上に引いた文章のうち「常に我等をしてキリストに在りて勝を得せしめ」云々とある一節を今少しく原文に忠實に譯して見るならば「常にキリストに在りて我等を凱旋に加はらしめ且つ彼を知る香を我等によりて何處にも顯れしむる神に感謝す」とすべきである。此れは凱旋式を譬喩に取つたものである。羅馬帝國の盛な時代には南征北伐の軍繁くして勝を得た將軍が羅馬の都に凱旋する式と云へば實に盛なものであつた。保羅はこの時まで羅馬の都に上つたことはなかつたにしても人の噂に聞く其の華麗な光景は羅馬の公民たる彼の胸を躍らざるを得なかつたされば其の書翰には幾度か凱旋式の事が引いてある。さうして凱旋

式の當日には羅馬に在る神々の宮に香を炷いて神を祭る。其の芳しい香ひが満都に薫るといふ有様であつた。凱旋式にたとへ次にキリストを知る香と云つたのは此の風俗に因んだものであらう。想ひ遣るだに壯に又嚴肅に感ぜらるるではないか。

保羅の生涯は常に勝利の生涯であつたのであるが、茲に特別に凱旋を喜んだのは如何なる譯があつたのであるか、前の節を讀んで見ると「我れキリストの福音の爲にトロアスに至り主我が爲に門を開き給ひしに我が兄弟テトスに遇はざるが故に云々」と書いてあつて少しも連絡が無いやうであるが、實は大に有るのである。其の次第は四節に多くの涙を以て書翰を書き送つたと云ふ事實から知らねばならぬ。抑も此の手紙は希臘のコリントの都に在る教會に宛てたものである。保羅は三年の間此の華奢な市に傳道して骨を折つた結果信者が出て來て教會が建つた。然るに保羅が此の地を去つて海を隔てて相對して居る亞細

亞のエペソに道を傳へて居る間に保羅に反對する人々が勢力を得てコリント教會は憂ふべき状態に陥つたと見える。之より先き保羅の命を受けてコリントに行つた弟子テモテ歸つて此の事を報告したかと想はれる。元來コリント教會の中にはパウロを好まぬ人達があつて、我はイエスの直弟子なるペテロに屬するものであるとか、或は又我々の基督教は直にキリストを宗とするものであるとか云ふ風に標榜した(前書一〇十二)。いづれにしてもパウロに反對する仲間であつたことは事實である。ところが思ひがけなく少しの間にその仲間の勢力が急にはびこつて來た。之をかくならしめたに就いて外から之を動した誘因もあるらしい。パウロと云ふ人は其の性格の上から云つても鋭い人であるから敵が出来易い人であつたらしい。其上彼は直接イエスの教育を受け其の選任を被つた十二使徒の一人ではない。今日でも獨逸あたりでパウロの基督教は耶蘇の基督教でない論する人もあるほどであれば、パウロの生時に於てそのやうに考へて

居つた人の少くなかつたも亦已むを得ざる次第である。別して猶太の基督者のうちには、基督者たるものは猶太人と同じく舊約の律法をも守らねばならぬと主張する所謂猶太的基督教を唱へてパウロに反對し、彼が傳道した跡に廻つては人心を惑し教會を毀した人があつた。ガラテヤ教會の如きも此の種の人から少なからぬ害を被つたが、コリントへも此一派の人だちが來てパウロの事を悪しざまに批評し我々こそ真正の希伯來人である、キリストの正統を傳へた傳道者である(後書十一〇二十二、二十三)、パウロが自身に天幕を作つて道を傳へ信者を累はせないのは彼が狡猾な處であつて、人心を收攬する術である(後十二〇十六)と云ふやうな事と云ひふらし、コリントの信者も之に惑はされてパウロが果してキリストの眞理を傳へて居るものであるか確な證據を見せてもらひたいなどと云ひ出した(後書十三〇三)。パウロに對する反對はこれ即ちコリント教會が狹隘な頑固な形式的な信仰に誤られんとする危機を示したものである。パウロは自

己の心事を誤解せらるゝのみでなく、三年間心血を注いで造り立てた教會はあたら此の輩に蹂躪せられんとして居る。憂心忡忡たらざるを得ない。彼は行李匆々コリントさして急行した。

いつもなればトロアスまで陸路を取り、それからマケドニヤに渡つて希臘に行くが常であるけれども此時は心せく旅ではあるし海路を選んだと察せらるゝコリントに着いて教會の人々に會つて見たところが案外模様が悪い。交渉の衝に當つた人々はパウロと反對の立場に立つて居る人。彼の心事を解せぬ人であつて、折角の志彼等に貫徹せぬのみならず、力のない他の信者までも此の人々に壓せられパウロに對して甚だ失禮な待遇をした。パウロと云ふ人は手紙に見ると偉さうであるが會つて見ると風采は揚らぬ言語は野鄙である（後書十〇）などゝ悪口するものもあつた。是に於てパウロは今や時利あらず長居をしても益のないことを觀て取りしかば、限なき恨を遺して一先コリントを去ることに決

したエペソに歸り着いてから滿腔の憂を一通の書翰に寫して涙ながらに筆を執つた。「我れ大なる患難と心の哀痛あるにより多くの涙を以て彼等に書き贈れり此は彼等をして憂へしめんとするにあらず我が彼等を愛することの深きを知らしめんためなり」（後書二〇四）とあるのは即ちそれである。この手紙を持つて行つた使者はテトスであつた。其の頃パウロは程なくエペソを去らうと豫定して居つた時であつたからテトスがエペソに歸るを待たず出立しトロアスあたりで出會ふ約束をしてテトスを立たせた。かくてパウロは日を経て後エペソを出立しトロアスに着してテトスに會はれると楽しんで待つたがテトスはなか／＼歸つて來ない。パウロはコリント教會の事が心に懸つてたまらぬ。トロアスでは傳道の門戸が開けたにかゝはらず落ち着いて居ることが出来なかつたから残念ながらトロアスの人々に別を告げて歐羅巴に渡つた（後書二〇十三）。マケドニヤでは何のやうな様子であつたかと云ふに「マケドニヤに至れるとき我等の肉少

しも安きことなくさまざまの患難に逢ひ外には争、内には懼れありき」(後書七〇五)と記してある。内にあつた懼とはコリント教會の成行について懐いた苦心を云ふのであらうと解く人もある。斯かるうち一日千秋の思ひを以つて待ちに待ちたテトスは歸つて來た。

さて日夜心にかゝつて居たコリント教會の様子如何であるか。遙々テトスを煩はして送つた書翰は何等かの効を奏したであらうか。聞きたきは山々なれど聞くも恐ろしいやうな感がしたであらうけれどもテトスの顔の上に浮んで居る喜色は、彼が如何なる消息を齎し歸つたか略ぼ推測することが出來た。神の恩は感謝すべきかな。實に案外の好結果であつた。パウロは自身に書いた手紙の文章があまり強きに過ぎたことを悔いざるにもあらざりしが(七〇八)これは杞憂であつたことを發見した。コリント教會の人も一時は人の言に惑されて本意なくも恩人を冷遇したものゝ、原々教會の父であつて一方ならぬ世話を蒙つて居るバ

ウロであるし、殊に山の如き苦心責任に疲れて居るパウロをば憂愁失望を抱いて去らしめた後では、流石耻かしく畏ろしく濟まぬことをしたと云ふ感じが動き始めたであらう。其中テトスは到着した。コリント人の態度は既に變せんとして居つた。恐れ慄いてテトスを迎へた(七〇十五)。パウロの涙を以て書いた書翰を読み又テトスの話を聞きてパウロが如何ばかりコリント教會の爲に心を悩して居るかを知つたときに、彼等は自ら責め又懼れた。彼等を誤らしめた人を譴責して是非早くパウロに會ふて破れたる情誼を回復したいと願ふやうになつた(七〇十一)。正に雨後の月もれ出づるを眺むる様にパウロの鬱結したる心は解かされて、言ひ難き喜と慰籍と人を懷ふ心胸に湧かざるを得なかつた。物窮つて後通ず。是は人心一變の機が來たにも因るであらうし、又パウロの赤心が貫徹したにも因るであらう。一には又テトスが此の如き局に處して人心を融和せしむる才幹に富んで居たことに負ふ所多いであらう。そこでパウロは不日自ら

コリントに行くに先ち再びテストをコリントに遣し、之に托して書き贈つたのは即ちコリント後書として傳へらるゝものである。

實に此の手紙は眞情惻々として、偉大なる魂の自然で率直で又婦人の如く濃な情緒が一字一句の底に鼓動して居る。左の數行を讀め。

「我れ書を以て汝等を憂しめしを曩に悔いたれども今は悔ずそは我れ其の書に因て汝等を憂しめしは暫時の間なりしを知りたればなり今我が喜ぶは汝等を憂しめしに因るに非ず汝等は憂ひて悔改むるを爲しに困りてなり……是の故に我等安慰を我たり我等が安慰を得たる上にテトスの喜に緣りて益々喜べりそはテトスの心なんぢら總てに緣りて平安を得たればなり我れ汝等の事を彼に誇りしかどそを愧とせず我等が汝等に語りし言の皆眞實なりし如くテストの前に誇りし言も亦眞實なり彼は汝等の恐懼戰慄おのれを迎へて従ひしことを憶ひ出します／＼其の心に汝等を愛せり」(コリント後

書七〇八—一五)

別けても已に仇した人を酷に責めないやうに頼み「斯かる人は多くの人の責めを受くること既に足れり、然らば汝等は反て彼を赦し慰むべし恐くは彼はなはだしく憂に沈まん……によらず人を赦すことあらば我また之を赦さん」(二〇—六十)と書いてある。彼は窮鳥を殺すことを好まなかつた。誰か深厚なる同情を以てこの書翰を讀まぬものがあらうか。

十、帝都の囚人

「兄弟よ願くば汝等我が身に在りし所の事反て福音の進み行く助となりしを知れ斯くて我が繯綫に罹りしはキリストの爲なること既に王を護る所の陣營および他の人々にもすべて明に知られたり、我が繯綫に因りて兄弟等おほくは主を信する心を篤くし益々勇みて懼ることなく道を傳ふまた猜忌

と分争あざむきに因りてキリストを宣る者あり又善意に因りて之を爲す者あり彼は我が縲綆おろしの苦を増加へんことを欲ひ誠の心なく黨を結ぶ心よりキリストを宣べ此れは我が福音を辯明する爲に立てられしことを知り愛よりキリストを宣ぶ然らば如何孰れにもあれ或は偽或は誠ともに宣る所はキリストなれば我之を喜ぶ且つ常に喜ばん蓋此の事の汝等の祈とイエスキリストの靈の助とに因りて終に我が救となるべきを知ればなり」(ヘリビ書二〇二十一―十九)

保羅は遂に帝都の客となつた。アゼンに入つた如くコリントに入つた如く、風アピアン街道に薫る春、此の年月の夢に浮だ羅馬の都に入り、更に地の極はたなる西班牙にまでも旅程を延長しやうと云ふのは心の願であつた。然るに此の願はその儘には遂げられなかつた。彼は上告中の罪人として都に入つた。着しきて後も縲綆の身である。羅馬の皇帝ネロに上告して裁決を待つ身であるから、自然に皇帝の指揮を受くる近衛兵の權下に置かれて其の監視を受くることとな

つた。上に引いた文章のうち「王を護る陣營」とあるは原語ブライリオリオンであつて近衛の兵營と云ふ意味に解する學者もあるけれども、此は兵營でなく近衛兵と云ふ意味に解すべしと云ふ方の説が更に有力である、改正英譯の聖書も之に遵つて居る。使徒行傳の終には「斯くてパウロ其の借り受けし家に居しこと全く二年すべて來り見んとする者を接へて憚らず神の國を宣べ主イエスキリストの事を教へて禁げらるゝことなかりき」とあるが、ビリビ書を認ためた時分には必ずしも其れとは様子が違つて或は兵營内に移されたと考へる必要はない。彼は羅馬帝國の公民たる地位を有する身分で又罪有りと定つた譯でもない。彼は自ら借り受けた家に住み、近衛の兵士交々來て之を衛つて居たであらうと想はれる。外に出ることは出來なかつたにしても訪ひ來る人には面會して自由に語ることは許された。其れにしても多分細い鎖はパウロの腰と兵士の腰とを繋ぎ合はせてあつたであらうし、彼が「縲綆の苦」と云つたやうに随分苦か

つたに違ひない。ことに保羅のやうな人は獨居の時を得たいと思ふのは自然であつて朝から夕まで知らぬ人が側に附いて居ると云ふことは鎖で縛られて居る事よりも却て堪へ難い事であつた事と察せらるる。

然れども彼は「鎖に繋がれた大使」であつた(エペソ書六〇二十にこの言あり。日本譯には意味良く表れ居らず英譯の ambassador in chains とあるは)。此の境涯に在つても堂々として基督の大使たる使命を辱しめなかつた。彼の様な身分のある人が如何して縲紲の身となつて居るであらうかと云ふ疑問は日夜交代して保羅の家に來る兵士や其の將校の間に起らざるを得ない然して基督とは何人であるかと云ふ話になる。保羅も亦兵卒等に道の話をしたに違ひない。吉田松陰は監送の道すがら捕卒に對つて勤王論を説き、英國の宗教改革の英雄リドレエは殉教する前オクスフォードの市長の家に預られて居たが、冷酷無情なる市長も此の人の感化に因りて改悛したと云ふ事である。偉大なる靈魂は如何なる境遇をも征服するのである。ピリピ書四〇二十二を見るな

らば「カイザルの眷屬のもの別けて汝等に安を問へり」とある。カイザルと云ふは羅馬皇帝の事であるが、其の眷屬と云つても必ずしも皇族や貴人を指す譯でない。宮仕へして居る人なれば奴隷でも斯く言へるのである。或は又之よりも大分身分のあつた人かも知れぬ。兎に角ネロ皇帝の宮中は最も基督教を信する人の起りさうもない處であるのに其處に信者の出來たのも亦頗る面白い。説教者デヨウエットが「高き召命」ハイゴキングなる書中此處を解く所面白い節があるから其の一部分を引用したい。「神は最も困難で、さう云ふ事のありさうもない處に其の美を育てることを樂みたまふやうである。余は近頃最とも美麗な羊齒シダを見出したが、其れは羊齒類の茂つて居らぬ嶮しき巖石の重疊せる處に留つて僅ばかりの土を養として生えて居つた。其れが宛も肥え潤ふた森の土壤に根を下して居るかの如く元氣良く其の愛らしい莖を暢ばして居た。此れが我等の神の樂みの一であると思える。荒涼たる煤烟だらけの鐵道の停車場にも神は苔を生えし

む。我等が之を見るだけの目があるならば之を見出だすことが出来る。これは最高なる恩恵の天地に於ても其の通りであつて、神は困難な思ひ設けぬ處に、否神を瀆し心の荒れ果てた其中に其の聖徒を興すことを好み給ふ。彼はカイザルの宮中に聖徒あることを示すを特に歡び、税吏の階級に其の弟子を育つることを樂みとなし給ふた。

復と世界に現るゝ事は有り得べからざるほどの宗教的天才なる保羅が今や羅馬の都に來たのであるから、羅馬の信者たる者之を助けて傳道の効果を擧げしむる爲に日もこれ足らざる感あるべき筈である。然れども意の如くならぬものは人事である。良く人情の曲折を解した保羅は預てから羅馬の信者に對しては一通りならず心配して誤解を招かぬやうの方法を講じたのであるか、今や羅馬に來て見ると果して心遣ひをした必要があつたことが分つた。羅馬の信者のうちには保羅に好意を有し其の精神に勵されて益々熱心に傳道した人もあつたが

又同じく傳道に力を盡すにしても其動機が全く純粹でない、眞に基督の恩めぐみに感じて之を人に傳ふると云ふでなく、保羅の向を張つて、なに保羅が來なくても我々の力で充分に遣れると云ふやうな量見を抱いた人もあつた。其の人々は或る學者の思ふ如く猶太的の基督教を主張した人であると考へる必要はない。保羅の來ぬ先に羅馬の教會の牛耳を報つて居つた人のうちにこのやうな人があつたかと想はれる。ピリピ書のうちに「猜忌と分争に因りてキリストを宣ぶる者」と云ひ「誠の心なく黨を結ぶ心よりキリストを宣ぶ」と云つたのは此の人々を指したものである。何事も高尚な精神から出づべきはずである宗教界にこのやうな水臭い事のあるは嘆はしき次第であるが、源流の濁少い原始時代にさへ斯かる事があつた。かゝる事があつたに係らず、神の國の業は着々として進捗せられたと云ふことを思ふと、慰めらるゝ節も多い。保羅はさらだに苦しい境涯であるのに、又このやうな事があつて苦みを忘るゝ由なく、縲綯の苦み

が起さる心地がした。然しながら彼は單調な人でないから又た見地を改めて「さりとして何かあらん偽にもあれ眞にもあれ孰れの道にても宣べらるゝはキリストなりさらば我れ之を喜ぶ又喜ばん」と云つた。しかのみならず、人によつては境遇が善くないと善くならぬ人もあるけれども、保羅のやうな人は苦の多い時が却て自身の爲になる基督の御心を學ぶことが出来ることを感じて居つたものと見える。彼は此等の苦心によつて又聖靈の豊かな供給と己の事を懷ふてくれる友の祈によつて、漸く救はるゝのであると云つた。實に肺肝から出た言である。

保羅は其の頃最早何歳位であつたか、同じ時分に書いたビレモン書を読むと「我れすでに年老い今キリスト・イエスの爲に囚人となれるパウロ此の如き狀（コリント後書）にて云々」とある。ここに「老い」と譯してある字は類老の齡を云ふのではない、ヒボクラテスと云ふ人の云ふ所によると四十九歳から五十六歳までを云ふとの事である。兎に角保羅は最早六十歳に近かつたと見える。元氣は旺盛であつても

廿年餘り斷間なき辛酸苦楚の爲に外なる人は壞（コリント後書）れて年よりもふけて見えなてあらう。ルウテラは長の苦戦に疲れて晩年は、神早く休息を與へ給はんとを待ち望んだとの事であるが、保羅も亦「我等此の幕屋に居り重を負て歎くなり」（コリント後書）と云ひ、又「我が願は世を去りてキリストと共に在んとなり、これ最もよき事なり」（ビレモン書一）と云つた。然れども神の國の事業の爲に彼が猶暫く世に留まる必要があつた。營生き乍らふるのみならず今一度自由の身となつて焦れ慕ふ幾多の友と相見るの日を遠からぬ將來に期した者と思しく、ビレモン書には「我れ再び汝等と共に居らば汝等の喜び我に因りてイエスキリストの中に益大ならん」（二六）と云ひ、ビレモン書には「汝我が爲に寓（キレ）を備へよ」（三）と云つて居る。

憂多き幽囚の裡に於ても心を慰むる事も亦少くなかつた。始終同情の篤かつたビレビの教會はエバフロデトと云ふものを使とし香しき情をこめたる贈物を携へて遙々と來り見舞はした。エバフロデトは此の使命を果たしたのみならず

保羅の同勞者となり戰友となつて盡力して居る中重き病を得て一時は保羅も一方ならず心配したが幸に快くなつてピリピに歸つた。亞細亞のコロサイの町の傳道を開いたエパfrasと云ふ忠實な傳道者も來つて彼を尋ねた。主人の許からにげて來た奴隷オネシモは保羅の感化によりて回心し保羅は手紙を持たせて主人ピレモンの家に返らしたなどさまざまの事があつた。其の外年少い弟子たちの往來の様子は次回に探ることゝしやう。

ピレモンに贈つた手紙の中に「彼汝に不義をなし又汝に負債あらば汝之を我に歸せよ我バツロ親手てつか之れを書けり我必ず償はん」(四八)と書いてある。羅馬まで上告すビ書にも「我には諸物そなはりて餘あり」(四八)と書いてある。羅馬まで上告する費用、家を借り受けるに要する費などを辨じ得た事を思へば保羅は此の頃は貧窮と云ふ苦だけは、神の恩によつて漸く脱し得たかと想はるゝ。それでなくとも保羅は「我れ貧賤に居るの道を知り又富に居るの道を知り飽くことも飢る

ことも豊ことも歎きこともすべての事に於て我れ之を熟練せり我は我れに力を與ふるキリストに因りて總の事を爲し得るなり」(ピリピ書四)と云ふことが出來た。故に斯くあると否とは保羅に取つてさまでの輕重はなかつたであらうし、我々もさして重きを置いて見る譯でないが、果してさうであつたとすれば、こゝに亦八方を閉し給ふことなき神の恩を見るべきである。

身は縲紲の裡に居りながらも天下の都に居つて兩大陸の傳道を指揮し、移り行く世の態を觀するうちには保羅の氣宇識見頓に大を加へざるを得なかつた。彼が力をこめて説く所は前の如く世の終でない、基督の再臨でない、厭世的の調子を帯びて居ない、總ての物を支配し總ての物に充ち満ちたる基督である、知慧と知識の蓄積は基督に藏れあることである。然して世間に存する善き事美しき事は同情を以て之を見んとを勉めた。曰く「凡そ眞實なると凡そ敬ふべきと凡そ公義きこと凡そ眞實なる事すべて如何なる徳如何なる譽にても汝等之を

念ふべし」(ピリピ書^{四〇八})。保羅は既に老いた、然れども彼の思想は常に新しい事實と思想とを受け容るべく開かれた。

十一、保羅の祈禱

「彼さきに汝等が靈に感じて懐ける愛を我等に告ぐ。是故に我等この事を聞きし日より汝等の爲に斷えず祈禱をなし且求む、願くば汝等靈の與ふるすべての知慧と穎悟とを以て悉く神の旨を知り、すべての事主を悦ばせんためにその意に従ひて日を送り、すべての善事に因りて果を結び、且つ神を知るに因りて漸に徳を増し、又神の權威に従ひて賜ふ諸の能力を得て強くなりすべての事よろこびて恒忍且つ久耐、また我等をして光にある聖徒の業の分を受くるに堪ふる者とならしめたまふ父の恩を感謝せんことを。」

(コロサイ書一〇八至一二)

幽囚裡の保羅は祈る人となつた。

彼の書翰のうちに散見せる祈禱を學ぶならば、彼が専ら志したる所、又人に望みたる所を知ることが出来る。エペソ書一〇七至十九、二〇十四至二十一ピリピ書一〇九至十一等に之を觀るべきであるが、コロサイ書の中にあるもの最も整ひて且つ最も意味豊富である。以下節を逐ふて之を研究して見たいと思ふ。先づ保羅の祈禱を喚び起した所のものが記してある。それはコロサイの基督教の開拓者であるエバフラスが羅馬に來り保羅を訪れてコロサイの信者が遙に保羅を愛し慕ふ衷情を具に語つた事である。エバフラスは恒にコロサイ人の爲に力を盡して祈禱をした(四二)。保羅は此の戦友の物語により温められ、その祈に動されて自ら亦未だ其土地を踏まざるコロサイの教會の爲に不斷の祈禱をなすものとなつた。

次に祈禱の内容は如何。第一に「靈の與ふる諸の智慧と穎悟とを以て悉く神

の旨を知る」ことである。之を一層原文に忠實に譯し改むれば「すべての靈なる智慧と悟りとを以て神の意志の知識に満たされ」とすべきである。神の意志と云ふ事この祈禱の骨になつて居る。凡そ基督教生活の骨は神の意志を知り之に従ひ之を實行するにある。その骨のない宗教生活は軟弱になり主我的になりることが多い。知るは一切の交渉の始である。故に保羅は非常に知ると云ふことを重するが、其の知るは知らんが爲に知るのでなくして、神の意志を行はんが爲に之を知るのである。神の意志は千古を貫き萬象を包んで確然變せざるものであるが、しかも又潑測として常に新に常に活けるものである。之を知るには醒め且つ敏き靈魂を要する。靈なる智慧と悟りとを要する。次に「満たさる」と云ふ語を日本譯の聖書に留めてないのは残念である。「満たさる」との一語はエペソ書にも屢々見ゆる語であつて、此の時期の保羅の作に最も多い。今日の思想に譯すればつまり全人格を以て知ると云ふことになる。

既に説しき如く神の意志を知り之を行ふと云ふ精神は支那人の天行健と云つた如く信仰生活を強く健にならしむる骨であるが、眞の信仰生活には兼ねて又やさしく美はしい情緒を伴へり。それは即ち「すべての事主を悦ばせんがため」と云ふ心にある。人を悦ばしたいと云ふ念は宜しきを失へば人を害するのであるが、又人を善くする力もある。友達方より來るを待ちて室を淨め、花を活け、掛物をかけ代へて客の心を悦ばさうと勉める。ここに美しき人情の發動があるではないか。基督を愛するものにはこの尊き主に對して同じ心持がある。故に保羅は他の書に於て「いかに行ひて神を悦ばすべきかを知りたれば益々之に進むべし」(テサロニケ前書四〇一)と云ひ、又「主の悦ぶ所を辨へて之を行ふべし」(エペソ書五〇十)と教へて居る。又此の書の三〇二十、二十二にも同じ精神が表れて居る。

「その意に従ふて日を送り」とあるも亦精密な譯でない。原文は「主に適ひて歩む」又「主にふさはしく歩む」となつて居る。主を悦ばすと云ふ心は基督に見

らるる方であるが、主に適ひて歩むと云ふは寧ろ外に對する心がけてある。士は四方に使ひして君命を辱しめず、基督者は基督の使節なり、其の進退行動つねに基督の榮を彰すことを力むべきである。「歩む」と云ふ語亦保羅の好んで用ふる所である。歩むとは進歩を意味し、進行を意味する。基督は今堂々として歩を進めつつあり。我等之に従ふて歩まざるべからず。「行を端正しくして晝歩むが如くすべし」(羅馬書十^二二〇)。又ヨハネの教ふる如く光のうちに歩まねばならぬ。

保羅の祈りは着々實際的の方面に進んで來る。春ありて秋あり。花咲いて果を結ぶ。果を結ぶのみならず樹の幹も枝も年毎に大きくなる。靈的の知識と活動の結果は二に歸する。爲す業が祝福せられて神の爲め世の爲になる美はしき功績を擧ぐるのが一つ、又斯くして自己の品性人格が次第に生長發育するのの一である。「すべての善き事に因りて果を結び且つ神を知るに因りて漸に徳に増し」と云ふ祈ある所以である。此の句の後半の譯し方、解し方は一でない。徳

の一字は原文には無い。然して神を知る事に於て増すと、神を知るによりて増すと二の説がある。しかし神を知ることには於て生長する方はこの祈禱の始に出で居ることであるから、そこはライトフット、エリコット、フォン・ソオデン等の如く神を知るによりて生長すると解するが優つて居るやうに思はれる。

我と云ふものの生長は當に力の生長を含まねばならぬ。學問の進むはたゞ多くの事を知ると云ふでなく學力に於て進まねばならぬ。我等は惡に勝つ力に於て、人を善くする力に於て、基督を代表する力に於てどれだけ進歩しつつあるか。顧みて肅然たらざるを得ない。保羅と同じく神より賜ふ力を得て弱くなることを祈らねばならぬ。然してこの力は一時發して復た沈衰する力でなくして耐久的の勢力でなければならぬ。天下を風靡する勢力とならずとも、己の分に安じ日又日、兀々として久に耐え得る力を與へらるることを祈りたい。かくて保羅が祈を結んだ如く「我等をして光にある聖徒の業の分ちを受くるに堪ふ

るものとならしめ給ふ父の恩を感謝すること」が出来る。保羅の祈禱は謙遜なる感謝を以て終りぬ。

十二、戰友の面影

先年英國の英帝エドワード第七世が崩せられた頃、「グラフィック」と云ふ雜誌に數人の肖像を掲げて、其の下に「皇帝に友人」と題したと云ふことである。保羅には幾人か年若い弟子があつた。併し彼は我が弟子と云つたことがない。或は兄弟或は子若しくは愛子と呼んで居る。彼はビリビ教會の使者であつて彼を助けたエバフロデトの事を云ふときに「我が兄弟、同勞者、戰友」と云ふ文字を重ねて居る(ヒリビ書二〇二十五、日本譯には良く表れて居らぬが原文はこの通りである)。彼の戰友には如何なる人があつたであらうか。書翰のうちに列んで居るスケッチを點檢して見たい。先づあまり事實の傳はつて居ない人から始めた。

「願くは主^{おはれみ}矜恤をオネシポロの家に賜へ。そは彼れ屢我を慰め且つ我が鏈を恥とせず其のロマに在りしとき急ぎ尋ねて我に遇たり。願くば主彼をして夫の日に至り主の矜恤を得しめよ。彼エベンにありて如何ばかり我に事へしか汝の善く知る所なり。」(テモテ後書一〇十六、十七)

「請ふなんぢプリスキラとアクラとオネシポロの家に安を問へ」(同上四〇十九)此の數行は惻々たる涙を含んだ文字である。オネシポロと云ふ人の事は外に傳はらぬ格別の仕事をした人であつたと思はれぬ。たゞ保羅を懷ふ友情が至て厚く且つ親切であつた。エベソの人であつたと見えて、保羅がエベソで困難した時分非常に善く彼の爲に盡した。然して保羅が囚人となつて羅馬に來たと聞くや、其時分オネシポロも羅馬に來て居つたものらしく、取るものも取り敢へず尋ねて來て其の後もしばしば保羅を慰めた「我が鏈を恥とせず」とあるを見ると、或は多少地位のあつた人であつたかとも察せらるる。保羅がテモテ後書を

書いた時分には此の人既に死んで其の家族がエペソに住んで居たと見える。故に再度「オネシポロの家」と云ふ事を記して、其遺族の爲に矜恤を祈り又其の平安を問ひ、今は見ぬ國の人なるオネシポロの爲にも神に祈つて居る。何たる厚い情であるか。實に美しい物語である。

「我と偕に繋るゝアリスタルコ及びバルナバの甥マコ汝等に安を問ふこのマコの事に就て汝等既に命を受けたり彼もし汝等に至らば之を受くべし。ユストと名くるイエス汝等に安を問ふ。割禮を受けし者のうち唯この三人のみ我と偕に神に國の爲に勞けり我彼等に由て安を得しなり。」(コロサイ書四〇十、十一)

爰に保羅は猶太人で彼とともに神の國の事業に盡した三人の名を掲げてあることにアリスタルコとマコは保羅と偕に繋がれたとある。弟子のうち保羅の囚れて居る家に偕に起臥して其苦を分つた人があつて、アリスタルコとコマは其の人であつたと見える。ビレモン書にはエバフラスを「我と偕に囚人となれ

る」と書いて、マコやアリスタルコの事を「我が勤勞の侶」と書いてある。時々代り合つたものと見える。アリスタルコは、使徒行傳に據ればテサロニケの人であつて、等三傳道旅行から歸る頃から保羅に隨行し、エペソでは亂民の爲に捕へられて酷い目に逢ふた(十九〇二十九、三十〇四)。之より後も保羅の許を離れず、保羅がエルサレムの難に遭ひ上告して伊太利に航海した時も一緒にあつた。「マケドニヤのテサロニケ人アリスタルコ我等と偕に在りき」と使徒行傳(二十七〇二)に記してある。ユストと名くるイエスと云ふ人の事は外に全く傳はらぬ。我等は保羅が「バルナバの甥マコ」と特筆した事を感謝する。もし單にマコであつたならば、此のマコはバルナバの甥で保羅の第一旅行の時始め隨行して中途から弱つて引き還したマコとは別人であるなど説を立てた學者があつたであらう。然るに此マコが即ち彼のマコであることを明に知り得ることは如何に満足すべき事であるか。友情の斷絶は悲惨であるが、斷えし交の復た繋るるほど喜

ばしいことはない。此事は保羅のエルサレム上京中か或はカイザリヤ幽囚中に起つたであらう。其の後保羅の許に來たと見える。コロサイ書を書いた頃には保羅は彼を東方に遣さうとして居る。然して或は昔の事を思ふて、マコに冷淡な事があつてはならぬと心配したと見えて、コロサイ教會及び他の教會へは既に預め言傳を以て注意を與へた、「マコの事に就ては汝等既に命を受けたり」とあるは即ち其れである。今又改めて彼を推薦して之を厚遇する事を求めて居る。斯くてマコの生涯の新時期は開かれ、小亞細亞の地方にて盡力した。數年たつて後保羅はエペソに居るテモテに「汝マコを伴ふて偕に來れそは彼の職つとめ我に益あればなり」と書き送つて居る。マコが如何に保羅に取つて必要な人物となつたかと云ふ事がわかる。然してこのマコが馬可傳の著者である事を思へば彼は基督教會又世界の人類が永久に感謝すべき恩人となつたのである。

猶ほ加へて云ひたい事は保羅は以上に擧げたオネシボロからも又マコ、アリ

スタルコ、イエスからも慰めを得たことを書いて居る。保羅は偉丈夫である。しかし慰められたと云ふ事が戦友に對する最大の感謝である。慰を要することは男も女も英雄も凡夫も異なることはない。我等は友人として慰めると云ふ一の大なる特權を忘れてはならぬ。

「我等が愛する醫者ルカ及びデマス汝等に安を問ふ」(コロサイ書四〇十四)

「我が勤勞の侶なるマコ、アリストタルコ、デマス、ルカも同じく安を汝等に問ふ」(セレモン書二十四)

「デマス此世を愛し我を棄てしテサロニケに往けりクレスケンス、ガラテヤにテトス、ダルマテヤに往けりタルカのみ我と偕に在り」(テモテ後書四〇十)

唯これだけの數行を讀んでも、其間に向背浮沈さまざまなる人の心が語られて居る。コロサイ書とビレモン書にはルカと雙んで擧げられてあるデマスがテ

モテ書を書く時分には情なくも保羅を棄て去つたのである。其理由は何處にあつたか、世を愛したのが爲とある。「世」と云ふは聖書には特別な意味を含めて用ひられた聖語で、要するに物質的の勢力に支配せられて居る世間を指すのである。悲いかな保羅の如き大精神家の門下に在つたデマスも此世の生活と安を慕ふて獨自一個を埋没し了つた。艱難を偕にすべからざる友である事を證明した。悪い人ではなかつたらうが惜むらくは一片英雄的な氣節を缺いて居つたてなからうか。之に反して醫者ルカは終まで保羅に對する友情を全ふした。「たゞルカのみ我と偕に在り」と云ふ一句のうちに保羅の悲哀と感謝ともに籠つて居る。保羅が感謝して居るのでなく世界の基督者は昔も今も又未來永遠醫者ルカに感謝すべきであらう。教會史の祖たるユウセビウスは「ルカの兩親はアンテオケの人であつて、彼は醫者を業として居つた。特に保羅と親しく、他の使徒と良く識り合ふて居た。然して彼等から靈魂の醫術を學んだ證據を二冊の靈感の書に留め

た」と記して居る。二冊の書とは云ふまでもなく路加傳と使徒行傳のとである。

序に記して置くが、ユウセビウスはルカの事を書いた續に「クレスケンスはゴオルに遣された事を保羅は證明して居る。」と記して居る。聖書にはガラテヤとあるに此の歴史家はゴオルにと書いてあるは如何にと云ふに、昔の寫本の多數はガラテヤとなつて居るけれどもシナイ本外或る數種の寫本にはガリヤとあつて、チツシエンドルフの如きは之を採つて居る。昔の聖書學者にもガリヤ即ちゴオルの方を正しいと論じた人もある。

* * * * *

「汝等に向ふ熱心を我と同じくテトスの心に賜ひし神に謝すそは彼れ我が勸を納れ且つ熱心なる者にして自ら願ひて汝等に往けり」(コリント後書八〇十六)

「テトスの事を言へば彼は我等の伴侶なり又我と偕に汝等の爲に勤むる者なり。」(同上八〇二十三)

我等は保羅とコリント教會の間にあつた事件を語る時（「涙の勝利」と題したる章を觀よ）にテトスが保羅の使者として如何に大切な役目を果たしたか、又如何に良く之を果たしたかを見た。彼は事に處する才幹ある人であつたと見える、上に引いた文章は此才幹の秘密を語つて居る。それは何かと云へば熱心である。保羅はテトスの事を云へるときに一節のうち二度まで熱心と云ふ文字を重ねて居る。勿論天分の相違はあるけれ共熱心は或る點まで才幹を産むのである。テトスは希臘人であつて保羅が第一傳道旅行を終りてエルサレムに上る時から彼に隨つて居つて、割禮を受けさすべきや否やが一の問題となつたのである（ガラテヤ書二〇三）。爾來彼は保羅の伴侶となり、又同勞者となつて羅馬に囚はれた時分まで始終事を偕にしたテモテ後書を書く前に「テトス、ダルマテヤに往けり」とある。ダルマテヤとは今の埃太利の部分で地中海に沿ふた地方である。

テトス書は隨分學者間に議論のある手紙で全部保羅の筆であることは疑はし

いが、テトスがクレテに傳道した事は事實であつて又「アルテマス或はテキコを我汝等に遣さんとき汝急ぎてニコポリスに來り我に就くべし我彼處にて冬を過ごさんと定めたり」（三〇）と云ふ節の如きは保羅の書いたものであることを認める人が多い。ただ之を保羅傳の何のあたりに置くべきかを定めるとは困難である。興味の有る問題であるが今之に及ぶ事が出来ぬのは残念である。

*

*

*

*

*

「我れ汝等が事情を知り念を慰めんがために速にテモテを汝等に遣さんことを主に頼りて望むそは彼の外に我と同じ心を以て汝等の事を眞實に慮る者なければなり多くの人は皆おのが事のみを求めてイエスキリストの事を求めず然れどテモテの鍛鍊なることは汝等の知る所なり彼はその父に於ける如く我と共に福音の爲に勤めたり」（ヒレヒ書二〇一九—二二二）

此の數行の文章はテモテの爲に不朽の記念碑である。之に據つて見るとテモ

テの性質の美點は第一に、主我的でなく人の爲に謀て忠なる所にあつた。然して營生來善良な性質であつたのみならず事に當て醇良なることを試験せられ鍛錬せられた人格であつた。テトスと性格の異つて居る點が略ぼ想像せらるる。

テモテと保羅との交は昨日今日の事でない、「我れ汝の偽なき信仰を念ふ此の如き信仰前に汝祖母ロイス又汝の母ユニケにあり」(テモテ後書一〇五)と云つて居るを見ると、保羅はテモテの祖母を識り又母を識つて居つたと見える。識つて居つたと云ふばかりでなく彼等も多分保羅に導かれて其の誠なる信仰に入つたであらう。斯く一通ならぬ縁故から保羅はテモテを見ること子の如くであつた。我が愛する子」と呼び、「夜も晝も祈禱に汝を懷ふ」と云ひ、「汝の涙を思ひて汝を見んことを願ふ」と云ひ(テモテ後書一〇二、四)「汝年少きを以て人に輕せらるるなかれ」と教へた(前書四〇十五)。然して「汝の胃のため及び汝屢疾わづらふに因りて恒に水を飲むこと勿れ少く葡萄酒を用ふべし」(前書五〇、二十四)と云ふに至つては宛然母親の語氣である。彼が

保の羅使命を帯びてテサロニケに使し又コリントに行つた事は既に語つた如くである。彼は又ビリビにも送られた(ヒリビ書二〇十九)。希伯來書を見ると彼も亦一度囚へられて釋されたと見える。ユウセビウスは彼がエベソの最初の監督であつた事を記し、ニケホラスはドミチヤヌス帝の代に殉教したと記して居るが孰れも確實とは云はれぬ。

此の外保羅はまだ幾多の戦友をもつて居つた。保羅の爲に「頸を劔の下に置た」プリスキラとアクラもありシルワノもありシラスもありテキヨもある。羅馬書十六章に書き連ねてある固有名詞は保羅に取つては樂譜の名の如きものである。一々之を語ることの出来ないのは遺憾である。